

許々は許に縮り、多毛能は等に縮り、於比の於は、等の餘韻に含まれば、許等牝牛となれり、冠辭考に、ことひ牛は、物を殊に多く負牛といふ意か、と云るはあたらざ、いかにとなれば、物と云言と、多くと云言とを略きて、そをやがて、物を殊に多く負意とは、いかで聞ゆべからむ、さて三宅とか、れるは、嚴毛といふ意に、いひかけたるなるべし、諸獸毛はあるものながら、牛に取たて、毛をいふは、漢國にても、九牛之一毛などいふ、同じこゝろばえなるべし、嚴とは、みか栗、みか蜂などいふ美、可に同じ、さて可と也は、同韻にて通へば、美也氣を、美可氣の意にとりて、云かけしをしるべし、○三宅之酒は、和名抄に、下總國印幡郡にも、海上郡にも、三宅あり、さて鹿島にさしむかへるは、印幡郡なりと云り、さらば印幡郡三宅と定むべきか、酒は、酒の誤なるべし、○狹丹塗之云々、狹字、舊本挾に誤、八卷にも、佐丹塗之小舟毛賀茂玉纏之眞可伊毛我母、とよめり、朱漆て彩色たる船に、玉纏て文飾りたる楫のよしなり、○小船儲は、ヲブネヲマケとよむべし、○滿乃登等美は、沙のみちたゝへたるを云、今も土佐國にて潮沙の湛るを、常にとゞひと云り、登蓮法師集に、淡路島沙のとゞひを待ほどに涼しくなりぬせとの夕風、○三船子呼は、和名抄に、江賦云、舟子於是搦棹、和名布奈古とあり、こゝは、大伴、卿の乗賜ふ船なれば、敬て御船子といふなり、○阿騰母比は、上にも、足利思代傍行舟薄、とよめり、二卷に、御軍士平安騰毛比賜、十七に、阿登毛比底和賀古藝由氣婆、とあり、率る義なり、アトフと

云も、同義より出たる言なり、書紀に、誘字をアトフとよめり、六帖に、ほとゝぎす春をなけとは、あたふとも人の心をいかつたのまむ、これは、あつらふといふ意なり、さてアツラフといふも、アトツラフにて、ツラフは、邊ツラフ、擧ツラフなどのツラフにて、此も本は、同言なり、○濱毛勢爾は、濱も狭きほどに、おくりの人々の別を惜むとて、滿居るを云、野もせ、山もせ、庭もせ、里もせ、道もせなども云り、○後奈居而は、岡部氏、奈は並の誤か、又は奈の下美字の落たるか、と云り、○足垂之、本居氏、垂は摩字の誤なるべし、と云り、アシズリシと訓べし、○海上は、古事記に、上菟上國造、下菟上國造、國造本紀に、上海上國造、下海上國造、とあり、和名抄に、上總國にも、下總國にも、海上郡ありて、宇奈加美と註せり、上海上は上總國、下海上は下總國なるを云るなり、此にいへるは下總なり、○其津乎指而、乎字、舊本には於と作り、今は元曆本、活字本等に從つ、其とは、人のしりたるものを、正しくさす詞なり、されば海上の即、其津なり、海上の津に舟をさしむけて、こぎわたるを云り、

反歌

海津路乃名木名六時毛渡七六加九多都波二船出可爲八。

毛は、もしは爾の誤にはあらざるか、○歌意は、浪風静まり、海路の平らかに和たらむ時を待て、海上の方へ渡り行賜はなむ、かくばかり風高く浪荒き時に臨て、船發したまふべき事か

は、今暫く時を候て、船發し賜へ、となり、これはもし蟲麻呂自常陸國の守あるは、據などにてよめるにや、

〔右二首高橋連蟲麻呂之歌集中出〕

與妻歌一首

雪已曾波春日消良米心佐閉消失多列也言母不往來

歌意は、雪こそは、春の日の光にあひてきゆるものならぬ、われをふかくおもふよしいひつる人の心さへ、その春日にあへる雪の如く、消失てあればにや、このころはたえて音づれもなき、といへるなるべし、

妻和歌一首

松反四臂而有八羽三粟中上不來麻呂等言八子

松反は、通難し、蓋強と云ふ料の枕詞なるべし、十七家持、卿放逸、鷹夢見、感悅歌に、麻追我弊里之比爾底安禮可母佐夜麻太乃乎治我其日爾母等米安波受家牟、とよめり、契沖は、松は色の變ぜざるものなるを、變ずといふは、しふることなる故に、しひてと云むために、松反とは云るなり、と云り、中山嚴水云けらく、今世の俗に、をさなき子等をおどしいさむるとて、人に物あたへおきて、其を又此方へ取かへせば、その代に、背中に松の木生るぞといふことあり、思

ふに、さる事は、上代よりありし諺にて、たとへば有ものを無といひ、なき物をありと云などしひ付ることをすれば、その反報に、身に松、木生ふものぞと云しことありしにて、やがてその松反と云を、強言する名目に云しならむか、されば強の言をいひ起さむとて、枕詞のごとくにおけるにもあらむか、といへり、此考、いさゝかむづかしけれど、さるよしにていひそめたること、ふつにあらじとも決めがたければ、こゝにしろしおくなり、なほ後の考をまつにこそ、○四臂而有八羽は、羽は物字などの誤なるべし、十七の歌を合考べし、そのうへ凡て、云々夜毛云々可毛などいふべき所を、夜波可波と云は、今京已降のにのみあることにて、此集の頃の歌には、一もあることなし、但し續紀宣命に、後世の歌にいへること、也波といへること、一二見えたるを思へば、歌詞の他には、既に彼頃も、いひし詞にや、さて強たることにてあれやも、嗚呼強たることにてはなし、と云意なり、○三粟は中の枕詞なり、○中上不來は、岡部氏が義を以て、ナカスギテコゾとよむべきよしへり、今按に、十二に、何時左右二將生命會凡者戀乍不有者死上有、とあるも、上はすぐれ勝る意に用ひたれば、右の考はさもあらぬか、○麻呂等言八子は、呂は追の誤ならむと、これも岡部氏云り、さもあらむか、さらばマツトイヘヤコとよむべし、八は、嗚や罵などの八なるべし、子は使の童をさして云る言ならむ、○歌意は、我君を待と云は、強言にてあれや、嗚呼さらに強言ならず、己が音信もなきとの

給ひおこせられたれども、中々に君こそ、わが思ふ如くに、われを思ひたまはざらめ、月の半過るまで來まさぬ君なれば、待はことわりにあらずや、我待居ると君にいへや子等よ、と使にいひつくる意なるべきか、

〔右二首、柿本朝臣人麿之歌集中出。〕

贈入唐使歌

入唐使は、此末に、多治比真人廣成遣唐使の時の歌あり、此歌も同じ度の歌ならむ、

海若之何神乎齊祈者歟往方毛來方毛舶之早兼

歌意は、海上掌座其神の孰をさして、幣獻り慇懃に祈白したらばか、唐土に渡り往にも、御國に還り來るにも障りなく、往方來方舶の早からむぞ、となり、底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命の三柱神を、墨江、三前大神と申し、底津綿津見神、中津綿津見神、上津綿津見神の三柱神を阿曇連等が以拜祭る神として、海神數柱ましますによりて、何の神を齋祈らばかといへるなり、ことに五卷、山上大夫の遣唐使に贈られたる好去好來歌に、宇奈原能邊爾母與爾母神、豆麻利宇志播吉伊麻須、諸能大御神等、船舳爾道引麻遠志云々、とあるにて、海上船の往來を守りまします御神の數多ましますことをしるべし、さて集中に、住吉乃荒人神、また墨吉乃吾大御神などよみて、船路をまもらせたまふよし、いへるは、もはらかなの墨吉、三前大神

なり、かくて十九に、住吉爾伊都久祝之神言等行得毛來等毛船波早家無とあるは、末句今と似たり、

〔右一首、渡海年紀未詳〕

この九字、一本にはなし、

神龜五年戊辰秋八月作歌一首并短歌

神龜五年云々、これは越の國の内、前中後いづれにまれ、友人の國守などに任られて行とき、京に留れる人の別る、時よみておくれる歌なり、○作、字、舊本脱たり、

人跡成事者難乎和久良婆爾成吾身者死毛生毛君之隨意常念乍有之間爾虛蟬乃代人有者大王之御命恐美天離夷治爾登朝鳥之朝立爲管羣鳥之群立行者留居而吾者將戀奈不見久有者

人跡成事者難乎云々、これは五卷貧窮問答歌にも、和久良婆爾比等々波安流乎、とよめる同じ意にて、もと佛籍に、人身を得て生るを難きこと、すること、あるによりたることなり、(四十二章經に、佛言、人離惡道得爲人難、とあり)○成吾身者は、上のいひかけならば、なれる吾身なれどもとあるべきを、吾身者と云るは、吾身は甚惜けれどもと云意を、言の外に含ませたるにて、これほど大切なる吾身なれども、君がためには、死生を委するよしにいへり、廿卷

於中臣清麻呂朝臣之宅大原今城真人作歌に伊蘇能宇良爾都禰欲比伎須牟乎之杆里能乎之伎安我未波伎美我末仁麻爾とあるも惜吾身は甚大切なれども君が隨に委すると云意にて同じ例なり○死毛生毛君之隨意常は相思ふ心の深切なれば死にも生にも君がまゝに任ずると云なり十六仙女の歌に死藻生藻同心跡結而爲友八違我藻將依とあり○虚蟬乃代人有者大王之御命恐美は現在の人身なればいつ命の下らむといふこともはかりがたきにより此たび皇命を畏まりてと云なり此四句次下の長歌の發端にも見えたり○夷治爾登は越國の任にて行を云ふ○朝鳥之は枕詞なり○朝立爲管はアサタタシツカ又アサタチシツカにてもよし朝とく起て發つを云○群鳥之これも枕詞なり十七に無良等理能安佐太知伊奈婆云々廿卷に群鳥乃伊埜多知加豆爾云々古事記八千矛神御歌に牟良登理能和賀牟禮伊那婆云々など見えたり○群立行者は從者どもを、あまた具して行を

反歌

三越道之雪零山乎將越日者留有吾乎懸而小竹葉背

三越道は、三は眞の意にて三吉野三熊野など云類なるべし越前越中越後あれば三と云にはあらず○雪零山は、八月の歌なれど越國は甚寒ければはや雪のふることもあるべきな

れど、必しも今雪ふると云にはあらざるべし越路は凡て雪深き國なるが故に、ひろくいふなるべし○歌意は、常に雪深きと聞及たる越路のけはしき山を、艱難して君は越行賜ふらむを、そのけはしき山にかゝりたまはぬほどは、このたゞずまひ、かしこのけはひなど、めづらかなる處々に、心をうつして、旅のうさをもはらしたまふべければ、しばらく吾事をも忘れたまふべきなれど、その峻しき山を越賜はむ日の苦しき時には、吾と共に在しほどに、とありしか、りしなど思ひ出して、其遊び樂みし折のことを慕ひおぼさずはあらじ、吾此方にて、君が旅行艱難を思ひやりまゐらすごとく、京に留れる吾事をも、必慕ひたまひてよ、となるべし、

天平元年己巳冬十二月作歌一首并短歌

天平元年云々續紀に天平元年十一月癸巳任京及畿内班田司云々とあれば、この歌班田使に出立る人のよめるならむ○作字舊本に脱たり、

虚蟬乃世人有者大王之御命恐彌磯城島能日本國乃石上振里爾紐不
解丸寐乎爲者吾衣有服者奈禮奴每見戀者雖益色二山上復有山者一
可知美冬夜之明毛不得呼鷓五十母不宿二吾齒曾戀流妹之直香仁
磯城島能は、大和と云む枕詞の如し、十三に磯城島之日本國爾、何方御念食可津禮毛無城上

宮爾大殿乎都可倍奉而殿隱隱在者云々とあるなどは、みな畿内の大和一國のうへにいへるなり、そも、磯城島は古事記に、天國押波流岐廣庭、天皇者坐師木島大宮治天下也、と見え、書紀にも此御代の卷に、元年秋七月丙子朔己丑遷都倭國磯城郡磯城島、仍號爲磯城島、金刺宮とありて、もと此欽明天皇の都の地名より起りて、冠辭考に、崇神天皇は磯城瑞離宮におはしまし、欽明天皇は磯城島金刺宮におはしまして、二代ながら殊にあまた年おはしまして名高ければ、さる比よりおのづから大和國の今一の名の如く成にけむと云るはいかが、其故は、崇神天皇は古事記に、坐師木水垣宮治天下也、と見え、書紀にも遷都於磯城是謂瑞離宮と見えて、彼御代なるには磯城とのみ見えて、磯城島てふ名は見えざればなり、つひにおのづから大和一國の號となれるものなり、かく都したまふ所の名の、一國の名となれるは、秋津島は、孝安天皇の都の地名なるが、後に大和一國の名となれると全同例なり、たとへばやまとといふも、もと一國の號なるが、古もはら大和國に都したまひしから、轉りて天下の惣名となれるが如し、さてしき島といふが、一國の名となれりといふ證は、十九に、立別君我伊麻左婆之奇島能人者和禮自久伊波比氏麻多牟とよめるにてしるし、さてかく一國の名となれるより、しき島即大和なるから、唯かさね云たるにて、しき島の中なる大和といふ意にはあらず、さてかくつゞけなれて後は、天下の惣名にいふときの倭にも、此詞をおきて

いふこと、なれること、十三、長歌に、式島之山跡之土丹人多爾滿而雖有云々、反歌に、式島之山跡乃土丹人土有年念者難可將嗟、又志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福在興具廿卷に之奇志麻乃夜末等能久爾爾安伎良氣伎名爾於布等毛能乎己許呂都刀米與などあるにて知べし、しき島は大和一國をいふこと、はなれど、天下惣名にまでなれることは、古に見えず、しき島の道などいひて、天下惣名とすることは、いと、後のことにて、古の證にはなりがたし、されど一國の大和につゞけなれたるにひかれて、惣名の倭にも冠らせたことは、上に出せる歌の如し、○本居氏國號考に、萬葉集の歌どもに、しきしまのやまと、つゞけ云る意は、もとは大和一國をさしてにはあらず、京師をさしてやまとといへるにて、しきしまの都といはむが如し、かの萬葉の歌に、やまとには鳴てか來らむよぶこ鳥とよめるやまとも、殊に京師をさしていへると同じ、又かの秋津島倭とつゞけいふも、もはら同じくて、本は秋津島の京と云むが如し、さればその秋津しまも、師木島も、共にみな京の名をいへるにて、國の名にはあらず、これらもし一國のことならば、倭の秋津島倭のしきしまといはでは、ことわりかなはず、といへるは、かへりて理になづめるものにて、古のおのづからなる趣に、いたくもとれり、さるはまづ京師のことを、ことにやまと、云ることはあれど、集中に、磯城島之倭秋津島倭とよめる倭に、京師を云る意なるは一首もなく、そのうへ、かの書紀仁德天皇、大御

歌にあきづしまやまとの國とのたまへるは能く其頃あきづ島といふがひろく天下の惣名にさへなれる趣なれば共にしき島も秋津島も大和一國の名となれる後よりたゞ其名をかさねていへるにこそあれしき島の中なる倭秋津島の中なる倭といふ意にはあらず集中に日本之山跡國とよめるも山跡は天下の惣名になりて後のことにて日本の中なる大和國といふ意にも日本の中なる京師と云意にもあらず日本もやまとも共に惣名なるを重ね云たると同じ例なるをやさてかればこの磯城島之はうけはりたる枕詞の例とは違ひたれど云なれては唯やまとといはむとてはまづ磯城島之と打出して歌ふ事となれればやがてまくら詞といはむにも妨なきものぞ○日本國はかくはかきたれども字は借字のみにてこゝは御國の惣名に云るにはあらず畿内の大和國なり○石上は和名抄に大和國山邊郡石上伊曾乃加美とあるこれなり○振里は布留の里にてかくれもなき地なり○丸寢は獨宿の容を云るなり麻呂禰麻流禰通云りと見ゆ今の俗にも丸寢と云ることあり古にいはいゆる丸寢の轉れるものか別か知がたし但し今世に云はまるは全然の義にて衾なども覆はず着のまゝにて臥より云ことゝ意得たり古にいへるは獨宿にかざりて云るをもしは今世に云は古の丸寢の轉れるものならむには後に義を意得誤りたるものにもあるべし夫婦相宿する形は手さし交し足さし延て股長に寝ることなるを獨宿する

には足を屈め手を脛に纏て全體を圓くなしして臥より獨宿の容を圓寢とはいふなるべし麻呂寢は轉寢の意ならむかとも思しかど其は非ず十卷に旅尙襟解物乎事繁三丸宿吾爲長此夜十二に旅之丸寢爾下紐解十八に之吉多倍乃手枕末可受比毛等可須末呂宿乎須禮波云々廿卷に久佐麻久良多比由久世奈我麻流禰世婆云々又久佐久麻良多妣乃麻流禰乃比毛多要婆云々などあり○吾衣有はアガケセルと訓べし○服者奈禰奴は契冲云此集に穢の字をナルとよみたれば塵垢にけがるなり衣をあらひぬふことは女のしわざなれば妻を思ひ出ることこれをにつけても云なり○毎見は其衣の褻垢きたるを見たびにと云なり略解に反歌に振山從云々とよめるごとく近ければ京を見るたびにと云なりと云てみるごとくにを京をみるごとくにの意とせるは甚非なり○色二山上復有山者はイロニイデバなり古樂府に藁砧今何在山上更有山と云は藁砧をば砒と云故に夫字とし出字は二の山とみゆれば夫ははやく遠く出てゆけりと云意に山上更有山と作れり又唐孟暹詩に山上有山不得歸と作れるも右の古樂府によれり○一可知美は人知ぬべみなり人が知べきに依て色に出さず夜々寐もやらざして戀慕思ふ意なり○明毛不得呼鷄は舊本には鷄字脱たり本居氏或人呼の下に鷄字落たるにてアケモカネツなるべしと云り不得呼にては穩ならず冬の夜のとあればアカシとは訓難しもしアカシならば冬夜乎といは

では調はずと云り、○妹之直香は、妹が有りさまと云意なり、四卷に、既に委釋り、
反歌。

振山從直見渡京二會寐不宿戀流遠不有爾。

直見渡は、タ。ニ。ミ。ワ。タ。ス。と訓べし、すぐさまに見わたすなり、○京二會は、契冲云、都をぞと心得べし、乎と云べきを二と云は、集中に、君をこふると云べきを、君に戀ると云る如し、○歌意は、遠く隔り來たらばさもあるべき理なるに、この布留の山より、直様に見わたすばかり甚近くて、さらに遠くはあらぬものを、皇命の畏こさに、しばし立かへりにゆきて來る事もかなはずして、夜もねられずに、京都を戀しくぞ思ふ、となり、此も長歌の如く、布留里に在て、都をこひてよめるなり、

吾妹兒之結手師級乎將解八方絶者絶十方直二相左右二。

歌意は、月日ふるまゝに、吾紐の緒が破て断はすとも、よしやそれもいとほじ、吾妻の手づから結び堅めてし紐なれば、妻に直しくあふまでは、他女のためには解はすまじ、となり、

〔右件五首、笠朝臣金村之歌集出。〕

天平五年癸酉遣唐使船發難波入海之時親母贈子歌一首并短歌。

遣唐使は、續記に、天平四年八月、以從四位上多治比真人廣成爲遣唐大使、從五位下中臣朝臣名代爲副使、判官四人、錄事四人云々、同五年閏三月、授節刀、夏四月、遣唐四船自難波津進發、とみゆ、此人々の内の母のよめる歌なるべし、此時の歌五卷、八卷、十九卷等にも出たり、
秋芽子乎妻問鹿許曾一子二子持有跡五十戸鹿兒自物吾獨子之草枕
客二師往者竹珠乎密貫垂齊戸爾木綿取四手而忌日管吾思吾子眞好
去有欲得。

秋芽子乎妻問と云るは、鹿はよくはぎ原にむつれて鳴ものなれば、萩を妻として、嫂ふよしに云ること、集中に多し、此上にも鹿を詠る歌に、秋芽子之妻卷六跡とよめり、○一子二子持有跡五十戸、この二句のこと、今村、樂がいへらく、吉川、文水が云けるは、此二子と云る言、下の獨子とあるへつゝきわろく、又他の句、五七五七と次第したるを、この一子二子とある句體調はず、そのうへ鹿は子ひとつうみて、二はうまぬものなることは、獵人などのよく知れることなり、故按ふに、二字を上句へつけ、子字を下句へつけて、ヒトツコニ、コモタリトイへと訓べきなり、と云り、樂思ふに、此説いはれたり、されどヒトツコニ、コモタリトイへとは、二の辭穩ならず、こは思ふに例の草書にて、一子字とありけむを、字を二子に誤れるにはあらざるか、然らばヒトツコヲモタリトイへと訓て、やすらかに聞ゆるなり、モタリト

イへは六言なれど、この例集中に多ければ妨なし(已上)此説信におもしろし、さて一子はヒトリコと訓べし(鳥獸にヒトリコといひ、人にはヒトリコといひて、差別あること)思ふはあらずぬれてやしかのひとりなくらむなどよめるをもおもへ、○鹿兒自物とは、鹿兒は鹿の子をいふ、和名抄に、鹿亦作麋とあり、自物のことは既く委釋り、廿卷に、可胡自母乃多太比等里之氏とあり、○吾獨子之第六に、市原王悲獨子歌に、不言問木尙妹與兄有云乎直獨子爾有之苦者、伊勢物語にひとりこにさへありければ、いとかなしうし給ひけり、○竹珠乎密貫垂は、三卷に釋り、○齊戸も、三卷に釋り、○木綿取四手而は、神慮を和め奉むがために、酒器を木綿とり垂て文飾れるなるべし、皇極天皇紀に、折取枝葉懸挂木綿とあり、四手は垂なり、タレの切テとなれり、○真好去有欲得、マサキクアリコツと訓べし、サキクとよむべき所に、好去と書ること往々あり、五卷に好去好來歌とあるも、サキクユキテサキクカヘリコヨと云歌なり、十七に、去好而安禮可弊里許牟平久伊波比底待登云々、廿卷に、平久和禮波伊波牟、好去而早還來等、などあり、書紀に行矣、漢書註に、師古曰、行矣猶今言好去、さて舊本こゝに、奴者多本、奴去古本、と註せり、此二字、多本には奴者、古本には奴去と作れるよしなり、此註なき本もあり、これは仙覺が校合せし時、書入たるものなるべし、さて奴者の奴字、元曆本には好と作り、いづれも奴は好の誤なり、さて好者とある多本は誤なり、者は去の誤なればなり、

反歌

客人之宿將爲野爾霜降者吾子羽裘天乃鶴羣

客人は契冲云、惣じて此度の諸人をいふか、下の吾子をも云べし、今按に、客人といふは、諸人のうへに、涉りてさて下の吾子は、其内にこもれり、○吾子羽裘は、鶴は子をよく愛むものなれば、ことにわが子を羽ぐ、ゆめとあつらへたのむなり、羽裘は、鳥の羽の下に、ひなをはさみつゝ、むを云なり、十五に、武庫能浦乃伊里江能渚鳥羽具久毛流伎美乎波奈禮豆古非爾之奴倍之、大船爾伊母能流母能爾安良麻勢波羽具久美母知氏由可麻之母能乎、などよめり、後にひろく育をハゴクムといふも、此より出たる言なり、○天乃鶴羣は、アメノタヅムラとよむべし、天とは、たゞ天上を群飛よりいへるのみなり、天飛鶴といふを思合べし、○歌意かくれたる所なし、

思娘子作歌一首并短歌

白玉之人乃其名矣中中二辭緒不延不遇日之數多過者戀日之累行者
 思遣田時乎白土肝向心摧而珠手次不懸時無口不息吾戀兒矣玉釵手
 爾取持而眞十鏡直目爾不視者下檜山下逝水乃上爾不出吾念情安虛
 歟毛

白玉之人とは、人を賛うつくしみて云ことなり、五卷に、白玉之吾子古日者、と云るが如し、源氏物語桐壺に、世になくきよらなる、玉のをのこ御子さへうまれ給ぬ、宇津保物語藏開に、わが國に見え給はぬ、すがたかはおはする、玉のをのこの見え給へるは、いみじうかなしきに、などあり、毛詩召南に、有女如玉、といへるも同じ、○中中二辭緒不延は、まづ辭緒不延は、契沖云、おもふことをいはぬは、たとへば物の緒をつかねておけるが如く、それをいひ出るは、引はへてのぶるが如し、人のその名を中々にこのをはへずとは、名をそれとも、えいひあらはさぬなり、(已上)今按に、此説の如し、中々には、なまなかと云意なれば、辭緒延ずして、なまなかに戀る心のやすからぬ意に、いひくんだり、さて十四に、許等於呂波敵而伊麻太宿奈布母、とあるは、今の辭緒延とは、やゝ異にて、その言をおろくはへたるよしにて、かつく約をかはしたるよしなり、○思遣とは、思をはるけやり失ふよしなり、後世想像するをおもひやると云とは、異なり、既く云り、○肝向は、心の枕詞なり、既く云り、○心摧而は、十二に、黒玉之宿而之、晚乃物念爾、割西智者、息時裳無、又從聞物乎、念者我胸者、破而摧而、鋒心無などよめるに、同じ、遊仙窟に、心肝怡欲摧、又曰、下官當見此、詩、心膽俱碎、○珠手次は、懸の枕詞なり、○不懸時無は、ことのはに懸て、いはぬ時なくといふなり、○口不息は、口の端にかけて、つぶくといひやまぬよしなり、十四に、波流能野爾久左波牟古麻能久知夜麻受安乎、思努布良武伊徹

乃兒呂波毛、とあり、○玉釧は、枕詞なり、釧は、鉞の俗字なりと見ゆ、鉞は、和名抄に、久之路、とあり、なほ委く一卷、中に云り、披見て考べし、○手爾取持而は、親く相なるを、比て云、冠辭考に、取とあるはおほつかなければ、思ふに、取は、詩の誤にて、テニマキモチテとありしならむと云り、さもあるべし、詩は、纏の借字なり、○真十鏡は、枕詞なり、○下樋山は、攝津國能勢郡にあり、攝津國風土記に、昔有大神曰、天津鰐、化為鷲、而下止此山、十人往者五人去、五人留、有久波乎者、來此山、伏下樋、而屆於神、許從此、樋内通、而禱祭、由是曰下樋山、とあり、さて今は、下ゆく水の上に出ずと云む料に、設けたるなり、かくて此歌よみしほど、此山に由ありて、取出たるなるべし、輕、太子の御歌に、阿志比紀能、夜麻陀袁豆久理、夜麻陀如美、斯多備袁和志、勢志多抒比爾和賀、登布伊毛袁、斯多那岐爾和賀、那久都麻袁云々、考合べし、○上爾不出は、發見さずと云意なり、○安虛歟毛は、虚は、不在の二字を誤りしか、ヤスカラヌカモと訓べし、(略解に、ヤスキソラカモとよみて、集中、思空安からなくになどいふに同じく、こゝは安きかは安からずと、返る詞なり、といへるは、あまなひ難し、安くあらぬ哉、さても苦しやと歎きたるなり、

反歌

垣保成人之横辭、繁香裳、不遇日數多、月乃經良武。

垣保成は、四卷、十卷にも此詞あり、契沖云、よこしまに、人のいひさまたげてあはせぬは、かき

の物をへだてさふるに同じければ、かきはなすとは云り。○歌意は、人のいろ／＼にいひさまたげてあはせぬ、よこしま言のしげきが故に、其を恐れ憚り避て、相見ぬ日の數多く重りて、月の經ぬるにてあらむか、さて／＼相見まほしく、戀しく思はるゝ事ぞとなり。

立易月重而雖不遇核不所忘面影思天。

立易とは、立は、月の立を云、易は、月々の經易るよしなり。○雖不遇は、アハネドモと訓べし、アハザレドと訓はわるし。○核不所忘は、まことに忘れぬの意なり、左禰の言は、集中に多し、源氏物語薄雲に、行て見て明日もさね來む中々にをちかた人は心おくと、とあるさねも同じ。○歌意は、立て經易る月の數の重りて、程久しく相見ざれば、今は忘るゝ隙もあるべきに、中々にさはなくして、常に面影の目の前にうかびて、まことにしばしも忘れられずとなり。

〔右二首、田邊福麻呂之歌集出。〕

挽歌。

宇治若郎子宮所歌一首

宇治若郎子(治)字、舊本治に誤、應神天皇の太子にして、位を大鷦鷯尊に讓、給ひ、菟道に宮作し、ておはしませしこと、委、仁德天皇紀に見えたり、諸陵式に、宇治、墓(菟道)稚郎子、皇子、在山城國

宇治郡、兆域東西十二丁、南北十二町、守戸三烟、契冲云、此皇子、宇治に宮作せさせ給へること、は、仁德天皇紀に見えたり、今木あたりの宮のこと考る處なし、これは應神天皇、輕島、豐明宮に、天下しろしめしける時、此皇子、今木におはしましけるなるべし、(本居氏云、山城志に、今木嶺、在宇治、彼方町東南、今日離宮山、と云るは、此萬葉の歌に依るおしあて説なるべし) 妹等許、今木乃嶺、茂立、孀待、本者、古人見、祁牟。

妹等許は、五卷に、伊毛良遠、美良牟、十三に、妹等者立志、などあれば、妹等と云ひはさることながら、なほ七卷に、妹所等、我通路云々、八卷に、妹許登吾去道乃云々、十卷に、妹許跡馬鞍置而射駒山云々、などある例によらば、こゝももとは、妹許等とありけむを、例の顛倒たるにやあらむ、さてこは、妹が許へ今來たり、と云意に、いひつゝけたる枕詞なり。○今木乃嶺は、大和國高市郡にあり、十卷に、藤浪之散卷、惜霍公鳥、今城岳、叫鳴而越、奈利、雄略天皇紀に、於是圓大臣與黑彦皇子、眉輪王、俱被燔殺云々、合葬、新漢、槻本南丘、欽明天皇紀に、七年秋七月、倭國今來郡言云々、かくあれば、古は郡名なりしが、後に高市郡の内に、并せおかれけるなるべし、さて今來と云は、古三韓の人、皇朝の德化をしたひまつりて、わたり來けるを、おかせ給へるよりおへる所、名なり、今は新の意にて、新に來朝ける義にて、今來と云り、即雄略天皇紀に、新漢と書るは、其義なり、皇極天皇紀に、蘇我大臣、盡發舉國之民、百八十部曲、預造、雙墓、今木、孝德天

皇紀に蘇我倉山田石川麻呂大臣自茅渟道逃向於倭國境大臣長子興志迎於今來大槻齋明天皇紀に四年五月皇孫建王八歲薨今城谷上起殯而収天皇云々輒作歌曰伊磨紀那屢乎武例我禹杯爾俱謨娜尼母旨屢俱之多多婆那爾柯那皚柯武云々天武天皇紀に十一年三月命小紫三野王及宮内官大夫等遣于新城令見其地形仍將都矣など見ゆ○茂立一本には並立と作りいづれにてもさることなり○孀待木は孀といふに用あるにあらざる人の孀を待つといひかけたるにてた松木なり君松樹などよめるも同じ例なり○古人見祢牟これをフルヒトミケムと訓たれども通え難しそもそも布留人とは今世に存る人をいふ稱にて過去し昔の人を云ことにあらず源氏物語若紫にいとかたはらいたくうちとけてあやしきふる人どもの侍るにときこえさす赤石にふる人は涙もとめあへず玉葛に右近はなにの人数ならねどなほそのかたみと見給ひてらうたきものにおぼしたればふる人のかずにつかうまつりなれたり云々かふるふる人をさへぞたはぶれ給ふ行幸にあやしきふる人にこそあれかくものつみしたる人はひきいりしづみたるこそよけれ藤裏葉にふる人どものまかでちらずさうしにさぶらひけるなどまうのぼりあつまりて云々ふる人どもおまへに所得て神さびたることどもきこえいづ若菜に昔の世にもかやうなるふる人はつみゆるされてなむ侍りけるときこゆ此餘の卷々にも甚多

し紫式部日記に少將のおもと云はしなのかみすけみつがいもうと殿の故人なり云云などあるをもふ思べし俗に云古參のことなりしかるに昔來この歌の古人を昔の人といふと同じ意と心得てしひて疑ひしひとのなきはいかにぞや今按に古は吉字の誤にてヨキヒトミケムなり叔人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見與良人四來三とあるをも思合べしさて今の吉人は即稚郎子皇子を指奉れるなり○歌意は今來の嶺に幾千年經たりともしらず神さびたる松の木のみたてるを古皇子の宮内より朝夕見し給ひけむを其皇子はた昔がたりにのみなり賜へるに今もなほ松はありしよのまにたてるなりと感をおこしてよめるなり

紀伊國作歌四首

黃葉之過去子等携遊磯麻見者悲裳

黃葉之はすぎにしを云むとの枕詞なり○遊磯麻はアソビシイソヲと訓べし麻をヲの假字に用ひたること集中にいと多し略解にイソマと訓て磯回と云義と心得たるは太ヒき誤なり凡て古はイソミウラミなど云てイソマウラマなど云ることかつてなしそのうへこは必イソヲといはではかなはぬところなるをや○歌意は過にしむかしすぎにし妻と二人手をと리카はして遊びありさし紀伊國の此海磯を今見ればいよゝゝありし昔

の事の思出られて、さても悲しや、懐ましや、となり、これは死にし妻をしのびたるなり、次三首みな同じ趣なり、

塩氣立荒磯丹者雖在往水之過去妹之方見等曾來。

塩氣は、鹽けふりを云、二卷に、塩氣能味香乎禮流國爾とあり、○往水之は、過去の枕詞なり、七卷に、往川之過去人之手不折者裏觸立三和之檜原者、とあるに同じ、○歌意は、鹽けふりのみ立て、さのみ興なき荒磯なれば、鹽汲海人などこそあらめ、風流人のわざ／＼見に来べきほどのところにはあらざれども、すぎにしむかしの妻と、手とりかはして遊びありきし、其妻が形見と思へばこそ、かくふりはへて、わざ／＼見に来つるなれ、と深く故人を慕ひたるなり、二卷に、眞草刈荒野者雖有黄葉過去君之形見跡曾來、これに似たり、

古家丹妹等吾見黑玉之久漏牛方乎見佐府下。

古家丹は、イニシヘニなり、○久漏牛方は、七卷にも、此上にも出たり、○佐府下は、不樂もなり、さふしは樂の反にて、うれはしきを云言なり、故他處に、不樂不恰など書り、後世寂寞の字の意なるをのみ、さびしと云て、淋字を用ふるとは異れり、○歌意は、いにしへに、ありし妻と、手とりかはして見し時は、他所に勝りて、おもしろかりし黒牛瀉なりしを、今一人來て見れば、そのおもしろかりしに引がへて、ありし昔の事の思出られて、さてもうれはしく苦しや、と

なり、

玉津島磯之裏未之眞名兒仁文爾保比氏去名妹觸險。

裏未、舊本、未を末と作て、ウラマとよめるは誤なり、は、浦回なり、ウラミとよむ説、既に委しく云り、此上に、浦箕とあるも同じ、○兒、字、舊本脱たり、○爾保比氏去名、氏、字、舊本脱たり、六卷にも、白浪之千重來縁流住吉能岸乃黄土粉二寶比天由香名又馬之步押止駐余住吉之岸乃黄土爾保比而將去、などあり、名は牟を急云るなり、○妹觸險は、ありし妹が、吾と俱に、この磯にあそびしとき、眞砂に行觸けむ、となり、○歌意は、玉津島は、世にこえておもしろく興あるところなれば、その磯のめぐりと、さまにゆきかくさまに行などして、心を慰むれども、ひたすらに、ありしとき、すぎにし妻と手とりかはして、遊びし時の事の思ひ出られて、慰むべきよしもなし、よしやその磯の眞砂は、妻が行觸けむ形見ぞとおもへば、その眞砂になりとも、吾衣を彩り染して行むと、ひとへに思ふぞ、となり、

〔右四首柿本朝臣人麻呂之歌集出〕

四字、舊本五に誤、

過足柄坂見死人作歌一首。

足柄坂、坂、字、舊本板に誤、知名抄に、相模國足柄郡足柄とあり、既に三卷にも七卷にも出たり、

十四、二十卷々にも、おまた見ゆ、坂は、十四に、足柄の御坂と見え、甘巻にもしかよめり、
 小垣内之麻矣引干、妹名根之。作服異六、白細乃。紐緒毛不解。一重結帶矣。
 三重結、苦侍伎爾。仕奉而。今谷裳、國爾退而。父妣毛、妻矣。毛將見跡、思乍往。
 而邦問跡、國矣。毛不告、家問跡、家矣。毛不云、益荒夫乃。去能進爾。此間、偃有。
 小垣内は、小とは、小嶺、小河などの如く、添たる辭なり、又大に對へて、小き事をいふこともあ
 れど、こゝはしからず、垣内は字の如し、○妹名根とは、名根は、親辭名は、名兄、妹、夫名などの
 名に同じ、根は、かしこけれど、神名に、阿夜訶志古泥神と申し、また垂根、伊呂泥、天津日子根な
 ども多く云が如し、さてこれを名根と連ねて云たるは、神代紀、阿姉と見え、此集四卷には、
 己が女を指て、名姉ともいへり、又古事記中卷に、神沼河耳命、其兄命に、那泥汝命とも詔へり、本
 居氏云、常に男には、兄女には、姉と云ば、名根は、女に局るべきに似たれども、男にもわたりて
 云稱なり、○作服異六は、麻を引て日に暴し、剝て苧になし、績紵ぎ織縫て衣に作り、夫に令服
 けむと、その勞きし様をまで思やりて、深く死人をいとほしみたるなり、○白細乃は、多く衣
 と云につゞけ云り、衣は白きをもとゞする故に、衣と云むとは、まづ白細之と枕詞におけ
 るなり、さて紐帶袖は、衣の具の一なれば、紐とも帶とも袖とも、つゞけよめること多し、紐緒

毛不解は、紐をも不解なり、緒字は書たれども、只假字にて、てにをはなり、紐の緒と云ふには
 あらず、○一重結帶矣、三重結とは、身の病て、やせおとろへほそりたる形容を云り、四卷にも
 十三にも、かやうによめり、古詩に、衣帶日已緩、○今谷裳とは、今は追付と云意なり、十二に、湊
 入之葦別小船、隙多、今來吾乎不通、跡念莫、十三に、門座郎子内爾、雖至痛之戀者、今還金、など
 の今に同じ、私の旅ならねば心まかせに、疾に國に還る事はかなはねども、程なく公事竟べ
 ければ、追付なりとも國に還りて、父母妻をも見むと思へるよしなり、○國爾退而は、公事竟て、
 本國に罷り還りて、と云なり、○父妣毛は、父母をもと云意なり、次の妻矣毛とある、矣に照し
 て、此には略けるなり、さて妣は、死去し母をいふ字なれども、ハ、と訓るゝ故に、此字をかけ
 るなり、○神之三坂爾は、足柄の眞坂になり、甘巻に、知波夜布留賀美乃美佐賀爾、怒佐麻都里
 伊波布伊能知波意毛知々我多米、これは歧蘇の御坂にて、處は異なれども、神の御坂と云る
 は同じ、すべて神と云は、山にまれ海にまれ、ことにけはしくて、行難む所を云なることは、余
 が考ありて、既に委釋るが如し、十四にも、安思我良乃美佐可加思古美、とよめり、○和靈乃は
 岡部氏云、こゝは必靈と云べき所にあらず、細布二字を靈に誤しならむ、和細布乃衣とつゞ
 くべき歌なり、○寒等丹は、寒げにの意なり、わびしら、戀しらなどいふ類なり、○烏玉乃は、枕
 詞なり、くろとつゞくが本にて、何物にて、黒きものにはおきて云、○髮者亂而は、終の此間

假有に連けて心得べし、これにて死りたる形容をあらはせり、○邦間跡(邦字、舊本には郡と作り、今は一本に従)は、本國を問どといふなり、○此間(此、間、假有は、此處に臥給へると云意なり、すべて臥)ことを、許夜(許、夜、佐牟、許、夜、之、許、夜、須、許、夜、勢、流)と、はたらかしいふときは、對(對、人、を、敬、ひ、て)の人を敬ひていふにかぎれることなり、されば許夜(許、夜、勢、流)と云ふときは、即臥(即、臥、給、へ、る)といふ意になる定なり、自(自、の、う、へ)にいふときは、許夜(許、夜、良、牟、許、夜、理、許、夜、流、許、夜、禮、流)とのみいふべきなり、しかるを許夜(許、夜、須)といふは、たゞ臥(臥)といふことの古言とのみ意得て、他のうへを敬ひていふと自(自)のうへにいふの差別をわきだめずして、古書をよみたがへ、自(自)の歌文などには誤れることの多きは、おろそかなることなり、この事既く委(委)云り、

過葦屋處女墓時作歌一首并短歌。

葦屋は、和名抄に、攝津國菟原郡葦屋(原は屋の誤なり)さてこれをアシノヤとも、アシヤとも呼りしと見えて、次に引伊勢物語にも、詞にはあしやといへり、後までも歌詞にはアシノヤと之の言を加てよめり、後拾遺集に、津國へまかる道にて、能因法師、蘆のやのこやのわたりには、日は暮ぬいづちゆくらむ駒にまかせて、伊勢物語に、むかしをとこ、津國菟原郡葦屋の里に、しるよししていきて住けり、昔の歌に、葦の屋の灘の鹽焼暇なみ、黄楊の小櫛もささずきにけり、とよみけるは、この里をよみけるなりけり、こゝをなむ、あしやの灘とは云ける、とあ

り、さてこの處女(處、女)の事跡いづれの時にかありけむ、いと古き代のことなるべし、このをとめをよめる歌、此(下十九)にも見えたり、歌林良材集に、花山院のつくらせ給へる大和物語に云く、むかし津の國に住、女有けり、其をよばふ男二人なむ有ける、一人はその國に住、男、姓は兔原(原)になむ有ける、今一人は和泉國の人、姓は智努(智、努)となむ云ける、かくて其(男)共に年齢容貌(年齢、容貌)人のほど、唯同じばかりになむ有ける、心ざしの勝らむにこそ逢めと思ふに、心ざしの程も、唯同じ様なり、暮れば諸共にさあひぬ、物おこすれば、唯同じやうにおこす、何れ勝れりと云べくも非ず、女思(女、思)煩ひぬ、親有て、かく見苦しく年月を経て、人のなげきをいたづらにおふもいとほし、一人にあひなば、今一人が思ひはたえなむと云に、女(女)こゝにもさ思ふに、人の心ざしの同じやうなるになむ、思ひ煩ぬる、さらばいかゞはすべきといふに、そのかみ生田川のつらに、女ひらばりを打て居にけり、かゝりければ、そのよばひ人共をよびに遣りて、親の云やう、誰も御心ざしの同じやうなれば、此(此)をさなきものなむ思ひ煩ひて侍る、今日いかにまれ、此事(此、事)をさだめてむ、或は遠き處よりいまする人あり、或はこゝながら其(其)いたづきかぎりなし、これもかれもいとほしきわざなりといふ、時にいとかしこくよるこびあへり、申さむと思ふ給ふるやうは、此(此)河にうきて侍る水鳥を射給へ、それを射當給へらむ人に奉らむと云、時にいとよき事なりと云て射るほどに、一人は頭の方を射つ、今一人は尾の方を射つ、そのか

み何と云べくもあらぬに、女思ひ煩ひて、住佗ぬ吾身投てむ津國の生田の川は名のみなり
 けり、と作て、此平張は、河に臨きてしたりければ、つふりと落入ぬ、親あわてさわざの、しる
 程に、此よばふ男二人も、やがて同じ所に落入ぬ、一人は女の足を取へ、今一人は手をとらへ
 て死けり、親甚じう泣の、しり、とりあへずあけて葬す、男共の親も、聞傳て來にけり、此女の
 つかの傍に、又墓共つくりて掘埋む、時に津國の男の親の云やう、同國の男をこそ同所には
 せめ、別國の人の、いかでか此國の土をば犯すべきといひて妨くる、時に和泉國の親、和泉國
 の土を舟にて運びて、此處に持て來てなむ、終に埋みてける、されば女の墓をば中にて、左右
 になむ男の墓ども今にあなる、さて一人の男の親、彼が著たりける、狩衣袴烏帽子帶弓胡録
 太刀などをも入てぞ埋みける、今一人の親は、おろかにやありけむ、さもせずぞ有ける、彼墓
 の名をば、をとめ墓とぞ云ける、或旅人、此墓のもとにやどりけるに、人のいさかひする音の
 爲ければ、あやしと思ひ宿たりけるに、血にまみれたる男前に來てひさまづきて、吾敵に責
 られてわびしく侍り、御はかししばらくかし給はらむ、ねたき物の酬し侍らむと云に、恐ろ
 しと思へどかしてけり、夢にや有むと思ひたれど、太刀は信にとらせて遣りけり、とばかり
 きけば、いみじうさきのごといさかふなり、しばしありて、はじめの男來て、いみじうよろこ
 びて、御とくに年來ねたき者打殺し侍りぬ、今よりはながき御まもりとぞなり侍るべきと

て、此事の始よりかたる、いとむくつけしと思へど、めづらしきことなれば、とひきくほどに、
 夜もあけにければ、人もなし、朝に見れば、つかのものと、血などなむ流れたりける、太刀にも
 血つきてなむありける、といひ傳へ侍り、(已上)これは菟原處女がことによりて作れる物語
 なり、さてこの墓のあり處は、打出村より生田に行道の間、吳田村といふに、血沼壯士の墓あ
 り、東明村に處女墓あり、大石村に菟原男の墓ありて、處女墓は南面にて、二壯士の墓は、處女
 墓に向ひてあるよし、荒木田、久老、播磨下向日記にしるせり、

古之益荒丁子各競妻問爲祁牟葦屋乃菟名日處女乃輿城矣吾立見者
 永世乃語爾爲乍後人偲爾世武等玉梓乃道邊近磐構作冢矣天雲乃退
 部乃限此道矣去人每行因射立嘆日惑人者啼爾毛哭乍語嗣偲繼來處
 女等賀輿城所吾并見者悲裳古思者

益荒丁子は、マストラヲノコノと訓べし、血沼壯士、菟原壯士二人を云、丁子とかけるは、古公朝
 の制に、廿一歳已上の男を、丁とせられたるによれり、戸令に、其男、廿一爲丁、六十一爲老、六十
 六爲耆、と見えたり、丁、強也壯也、と註せり、鶉飼、信興云、丁年と云こと、諸書に見えたり、詳
 ならず、文選に、漢、李陵が、蘇武に報る書に、蘇武が年を丁年とかきたる、其時蘇武が年齢は、廿
 歳ばかりなり、されば廿歳頃をさして、丁年といひしと見えたり、○各競は、アヒキホヒと訓

べし、鏡をば伎保布とのみいひて、伎會布といひたること、集中假字に見えたることなれば、然は訓べからず、但字鏡は言、鏡言也、支會比云、又支會比加太利、と見えれば、キソフと云も、むげに後、世言にはあらず、○菟名日處女は、攝津國菟原郡の娘子なれば、菟原處女と呼なせり、眞間の手兒名、周惶の球名など云が如し、さて菟原は、和名抄に、攝津國菟原郡宇波良とあるは、や、後の唱にて、古は宇奈比郡とのみ云しなり、故此下には菟會處女と書たり、原は、古生と通用て、茅生、茅原、室原、室生などかけり、されば原も、其義にて書るなり、○奥城は、即墓のことにて、既に三卷に委釋り、○磐構は、磐を多く疊みて、石櫛に造れるを云、○作冢矣は、ツクレルハカヲと訓べし、ハカは葬處の謂なり、既に委釋り、○天雲乃退部乃限は、海内の至り極れる限と云意なり、三卷石田王卒之時丹生女王作歌に、天雲乃會久敵能極とある處に、委釋りき、海内の至り極れる限旅行して、此處を往來ふ人毎に、一人も残らず、古の事跡をしるびて、處女墓に立より、いとほしがかりて見るよしなり、○射立嘆日とは、射はそへ言、なげかひは、なげきの伸りたるにて、立嘆ことの絶ざるよしなり、立は立留る謂、嘆は長き息をつくよしなり、○惑人者は、本居民云、これはサドヒトハとよめるに従ふべし、さて惑は借字にて、里人なり、十八に、惑はせると云ことを左度波世流と云り、十二に惑者とあるも、里人と聞えたり、(已上今按に、里人は、左等妣等と、妣を濁るが定格なるを、妣の濁音を上へめぐらして、左度

比等と云は、久志夫流を、久士布流と云と同類にて、古の音便の一なり、さればこゝなると十二なるとは、左度比等と、度を濁りて訓する爲の假字なるべし、さなくば惑字いかゞなり、十三にも散度人と書り、なほこの清濁音便のことも、既に本居氏いへれど、此、惑人のさだなき故に、今具にいふなり、○吾并は、アレサヘニなり、こゝは吾等までにもといふ意なり、

反歌。

古乃小竹田丁子乃妻問石菟會處女乃奥城叙此

小竹田丁子は、サ、タ、ヲ、ト、コと訓來れり、シ、ヌ、田、ヲ、ト、コなるべし、和名抄に、和泉國和泉郡信太臣多とある地の産の男なるべし、これは血沼をとこなり、此下に出たる歌に、智奴壯士とあるこれなり、血沼のことは、なほ彼處に云り、さて血沼も和泉郡の地名なれば、もしは信太郷に屬る所なりし故に、チ、ヌ、ヲ、ト、コとも、シ、ヌ、ダ、ヲ、ト、コとも呼るならむか、又は血沼はひろき名にて、その血沼の内のシ、ヌ、ダ、にてもありしならむ、さて和名抄註に、臣多とあるは、や、後の唱にて、古は志奴太と呼しことは著し、歌林良材集に、この二壯士の事を、ひとりをば血沼をとこといひ、一人をば小竹田をとこといひけりとあるは、さゝだとよめるによられたる物がたりなれば、論のかぎりにあらず、○歌意は、古の和泉國の信太男の嫂せしと云、菟原處女の墓處は、即此ぞとなり、

語繼可良仁文幾許戀布矣直目爾見兼古丁子

可良は故と云に同じ、かくさまに尾につく詞を、第二句の頭における例は、七卷に手取之柄
二忘跡磯人之曰師戀忘貝言二師有來八卷長歌に落許須奈由米登云管十一に面忘太爾毛
得爲也登手握而雖打不塞戀之奴十三に年渡麻豆爾毛人者有云乎何時之間曾毛吾戀爾來
などある類なり、○直目爾見兼は直しく親見けむと云が如し、○古丁子は、二壯士をさす、○
歌意は直しく親り見けむ古の二壯士は、いかばかりかなしくいとほしかりけむ語繼たる
を聞くからにさへも、そこばく戀しく思はるゝものを、となり文の辭に力を入れて聞べし、

哀弟死去作歌一首并短歌

父母賀成乃任爾箸向弟乃命者朝露乃銷易杵壽神之共荒競不勝而葦
原乃水穗之國爾家無哉又還不來遠津國黃泉乃界丹蔓都多乃各各向
向天雲乃別石往者闇夜成思迷匍匐所射十六乃意矣痛葦垣之思亂而
春鳥能啼耳鳴乍味澤相宵晝不云蜻蜒火之心所燎管悲悽別焉
成乃任爾は成とは何にまれ物をつくり成しとのふるを云言にて、こゝは生成育成たる
を云成なり父母が生なし人と成したるまゝにと云なり神代紀に汝所生兒必當男矣竹
取物語にこの人々ゐる時は竹取を呼出してむすめをわれにたべとふしをがみ手をすり

の給へばおのがなさぬ兒なれば心にもしたがへずとなむいひてつきひをおくると云り
此なさぬ兒と云るも同じ意なり、○箸向は契沖云箸は二さしむかへるものなれば箸むか
ふと云り今の俗にたゞふたりある兄弟を云とて箸をりかゞめと云はをりかゞめこそ心
得がたけれど此箸むかふと云古語の遺れるなるべし(已上今按に此説いさゝか聞とりが
たし、さるは元來箸と云ことを本にたて、古言を解むとする故なるべし、故考るに、波之と
は、そのもと物二相對ふをいふ言なるべし、されば相雙對ふ兄弟の謂にて云るならむ、橋と
云も彼岸と此岸と相對はするよりいふ稱なるべく、又相競端爾など云る端も、字は借字に
て、彼と此と兩方相對ひて、先を競ふ間を云るにて、同言なるべく、さて箸と云も、二相對ふよ
りいふ稱なるを知べし、○弟乃命は、オトノミコトとよむべし、ナセとよめるはいとわろし、
○朝露乃銷易杵壽は朝露の消易き如くに、はかなき命を云、五卷に朝露乃既夜須伎我身十
一に朝露之消安吾身十三に朝露之消者可消なども見えたり、六帖に、日の光あひみてうと
む朝露の消ぬさきにもあひ見てしがな、○神之共荒競不勝而は、人の世にあるほど、生るも
死るもみな萬神の御心のまゝには、はからひ給ひなし給ふものなれば、神の死せむとし給ふ
に、いな死じと神と共に競て、生ることを得爲しあへねばと云意なり、契沖が、神は壽命長遠
なるものなれば、神と共にあらそひかぬるなり、と云るはあらじ、二卷天智天皇崩給ふ時婦

人のよめる歌に、空蟬師神爾不勝者と云るも、うつせみの人にして、神の御心に對て、競ふに勝ねば、すべなく天皇を神あがらしめ奉りて、離れ居て歎くよしなり、抑靈幸神と申すことは、神の幸ひ佐け保ちますによりて、靈を人の身體にやどして、ほどくゝに樂しましめ給ふことなるに、其中幸ひましゝて、神の御保助の厚き人は、長く靈を持ち、祟りましゝて、神の御守護の薄らぎし人は、天く靈を失ふことにて、靈散離けゆけば、やがて、身體は滅亡るものなり、しか神の御心のまゝに、はからはせ給ふには、いかに競ひても靈をかへしやどして、ふたゝび生ること得ねば、げにもあらそふべきかざりにあらずなむ、さてこの二句の下に又還り來ずなりぬらむといふ詞を、假にくはへて聞べし、○家無哉又還不來は、家がなき故に、又かへりこぬとにや、家は本のごとくあるものを、いかさまにも還り來ざるは、神の御心に競て生ることを、得爲あへねばなるべし、と云意を、思はせたるなり、哉の言は還不來の下へ轉して心得べし、○遠津國は、夜見を云む料なり、人の死ゆく夜見の國は、此國より遠きよしにて云、○黄泉乃界は、夜見國と云が如し、よみの界に別しゆけば、とつゝけて心得べし、○蔓都多乃は、枕詞なり、給石は、本は一にて、末のこなたかなたへ蔓別るものなれば、各各向向とつゝけたり、○各各向向は、本居氏は、オノオノムキムキとよめり、今按に、これはオノモオノモと六言に訓べきか、稱徳天皇紀、宣命の中に、於乃毛於乃毛と見えたり、己々の意にて、俗

に面々と云に同じ、又按に、向は、もしは面の誤にて、各面各面と云意に、各々面々とかけるか、さらば古事記に、許袁呂許袁呂を、許々袁々呂々と書る類とすべし、○天雲乃は、枕詞なり、○關夜成も、枕詞なり、關夜の如と云意なり、迷とかゝれり、○思迷匍匐は、思マドヒの伸りたるなり、迷ふ事の、かりそめならぬよしなり、ハヒはヒと切る、○所射十六乃は、枕詞なり、矢に射られたる猪鹿の、疵の痛む意にて、痛につゞけり、○葦垣之も枕詞なり、あしを束ねて結たる垣は、亂れわゝけたるものなれば、つゞけたり、○春鳥能は、これも枕詞なり、ハルトリノとよむべし、ウグヒスノとよむは、わろし、○啼耳鳴乍は、ネノミナキツ、なり、○味澤相、これも枕詞なり、既に云り、ウマサハフとよむ、さて味澤相は、集中に、何處にても、目と云にのみつゞきたれば、宵晝とはつゞきがたし、故熟考るに、こゝも此間に、二句ばかり脱たるにて、昔にいはずば、味澤相目辭毛絶而野干玉乃宵晝不云、などぞありけむ、二卷に、味澤相目辭毛絶奴とあり、見ることも聞言も絶てといふなり、○蜻蜒火之も、枕詞なり、所燎といはむためなり、○悲悽別焉、これをナゲクワカレヲとよみたれども、いとつたなし、按に、別焉は、我爲の誤なるべし、ナゲキノアガスルと訓べし、四卷に、情爾者思渡跡縁乎無外耳爲而歎會吾爲とあるをもて、相例すべし、別るゝことは、上にいひ終たれば、今更別焉とはいふべくも非ず、詞もいと穩當ならず、かゝるを、今まで註者このさだせし人の、ひとりだになきは、いかにぞや、

反歌

別而裳復毛可遭所念者心亂吾戀目八方

心亂舊本に、一云意盡而と註せり、此はいづれにもあるべし、○歌意は、遠く別るゝは、きはめて悲しくはあれども、旅などに出行しごとく、又も還り来て、あふ時ありとおもは、それを力にして、これほど心亂れて、戀しく悲しく思はれむやは、今は永く訣れて、又もあふ事のあるべからねば、せむ方なく、さてくゝかなしく思はるゝよとなり、

蘆檜木笑荒山中爾送置而還良布見者情苦裳

歌意は、人氣疎き荒山中に葬り送り置て、おくりの人々の退り還るさまを見れば、さてもせむ方なくくるしや、となり、契沖云、兼好法師が、からは、氣うとき山の中にをさめてと云る、もし此歌をふみてかけるにや、

〔右七首、田邊福麻呂之歌集出〕

詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌

勝鹿真間娘子の事、三卷赤人の歌に見えて、そこに註しき、十四にも二首あり、勝鹿は、下總國葛飾郡なり、

鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留事登至今不絶言來勝牡鹿乃真間乃手

兒奈我麻衣爾青衿著直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎谷不
雖行錦綾之中丹裘有齊兒毛爾將及哉望月之滿有面輪二如花咲
而立有者夏蟲乃入火之如水門人爾船已具如久歸香具禮人乃言時幾
時毛不生物乎何爲跡歟身乎田名知而浪音乃驟湊之與津城爾妹之臥
勢流遠代爾有家類事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞

古昔爾云々、赤人の歌にも、古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立妻問爲家武勝牡鹿乃真間之手兒名之與椰乎此間登波開杼真木葉哉茂有良武松之根也遠久寸言耳毛名耳母吾者不所忘、とよまれたれば、いと古き代の事なりけむ、○青衿著は、契沖、毛詩子衿篇に、青々子衿、悠悠我心、傳に、青衿、青領也、とあるを引て、アヲエリツケとよめり、略解に、アヲオビと訓るにつきて、和名抄腰帶部に、衿、小帶也、釋名云、衿禁也、禁不得開散也、和名比岐、於比、とみゆ、後、世女の裳に、引腰とて、長く垂て曳ものあり、其類にて、衣をゆひて、はしを長くたるゝなるべしと云り、いかゞ、○直佐麻とは直は、直土などいふ如く、ひたすらの義なり、佐はそへたる辭にて、ひたすらの麻を、そのまゝ裳に織て著を云り、衣裳の籠くてよからぬよしをいへり、○髮谷母は、髮をさへもと云むが如し、髮なりとも梳り結たらば、なほさもあるべきに、髮をさへも梳らぬに、然ても貴人の女にも、こよなく立越たるよしにて、勝れたる美貌なり、○履

乎谷は、履をさへもと云むが如し、○不着雖行着、字舊本看に誤、一本に従つはハカゾアルケドと訓べし、○錦綾之云々、袈有はク、メルと訓べし、此上に、吾子羽裘とあるを考合べし、源氏物語夕貌にも、此人を得抱き堪まじければ、うはむしろに押く、みて、惟光のせ奉る、とあるも同じ、若紫に、いとつくしき御肌つきも、そゝる寒げに覺したるを、らうたくおぼえて、一重許をおしく、みて云々、とも見ゆ、○齊兒毛云々、齊兒は良家の女を云、源氏物語若紫に、人海龍王の后になるべき、いつきむすめなり、心高さくるしやとて笑ふ、未通女に、かやらの事は、限なき帝の御いつき娘も、おのづからあやまつためし、むかし物語にもあめれど、眞木柱に、大殿の北の方のしり給ふことにも侍らず、いつき娘のやうにて物したまへば、かく思ひおとされたる人のうへまでは、しり給ひなむや、などある、いつきむすめに意同じ、さるうまひとの子も、此娘子に及ばむやは、といふなり、○望月之は、滿有の枕詞なり、○滿有面輪二は、タレルオモソニと訓べし、神名に、面足尊と申すも、御面の滿足、へるを云、二卷に、滿將行神乃御面跡とあり、續紀廿七、宣命に、大御色毛光照天甚美久、大御形毛圓滿、天別好久、とある、圓滿を、本居氏のタラハシと訓る、よくかなへる言なり、面輪は、十九にも、眞珠乃見我保之御面、御面謂之美於毛和とあり、○夏蟲乃入火之如、夏は、火の光を愛て、身を捨るものなる故に、色好みする人にたとへたり、○水門入爾船己具如久は、舟くらべとて、われさきにと互

にいそぐものなれば、これも此娘子をめ、人のまよひあらそふにたとふ、○歸香具禮は、本居氏ヨリカグレとよみて、香具禮は、婚をする古言なり、と云れど、覺束なし、又歸は、歸依とつらぬる字なれば、ヨリとよまむは、さることながら、此集中には、ユクと訓べき處にのみ用ひて、ヨリとよむべき所につかへることなし、心を付て考べし、今按に、具禮は、賀比の誤にてユキカハヒなるべし、香賀比は、久那賀比の約れる言にて、そのもと婚合を云よりは、ヒヤれる古言なり、上の筑波の賀我比、合思べし、本居氏は、此の香具禮といへるをもとにして、かの加賀比と云は、加具禮交の約りたる稱として、加具禮交すよしなりといひ、又歌垣と云も歌加具禮交にて、互に歌をよみて、加具體交すよしの名なり、といへれど、婚娶をと、のふることを、加具留といへること他に見えたることなければ、したがひがたし、久那賀比と云ことは、古言と思はれて、現報靈異記にも、婚クナカヒスと註し、又鶴鶴をニハクナブリと云も、急婚貌の意の稱ときこえ、又巖をマクナギと云も、目婚の意の稱ときこえたり、されば加賀比は、久那賀比の約れる稱、歌垣は、歌久那賀比の意にて、歌をよみうたひ交して、つまどひする名とこそきこえたれ、○人乃言時とは、言は誂、字の誤なるべし、次下に、垣廬成人之誂時と見えたり、さらば、ヒトノトキと訓べし、○幾時毛は、イクバクモなり、時は許の誤ならむか、又もとのまゝなりとも、○不生物乎は、イケラジモノヲと訓べし、イケラヌモノヲにては、

いとわろし、○何爲跡歟身乎田名知而は、本居氏云、身の事を何と心得てかなり、何爲跡歟は、何とかと云むが如し、歟は、知而の下にめぐらして意得べし、○奥津城爾妹之臥勢流は、こゝは葬埋たるうへをもていひたるにて、實は身を投て死たるを云り、何と心得てか、かやうに身を投たるぞとなり、臥勢流は、臥給へると云むが如し、此上に委く云り、上古の名高き美人なりければ、敬ひていへるなり、これ古人の常なり、○昨日霜云々は、次下の長歌の終にも、新裳之如毛哭泣鶴鴨、とよめるに、同じ意なり、霜は、數ある物の中を、とりたて、いふ辭なり、こゝは多くの年月日時のあるが中にも、昨日ありし事の如くおもはるゝよしなり、されば遠き代のことなれば、さはあるまじきに、きのふまのあたり、わが見けむことこのやうに、ことあたらしく思はれて、さても深くなげかるゝ事哉となり、

反歌

勝牡鹿之眞間之井見者立平之水挹家牟手兒名之所念

水挹家牟は、水酌賜ひけむといふほどの意なり、敬ひていへること、長歌に臥勢流といへるに趣同じ、挹は、酌也とみゆ、十三に、小治田之云々人者挹云々、また水社者挹而飼旱など書り、○歌意は、この葛飾の眞間の井を來て見れば、井の邊に立平して、水汲賜ひけむ娘子が形貌のまのあたりみゆるやうにて、一すぢに戀しくおもはるゝとなり、

見菟原處女墓(作)歌一首并短歌

菟屋之菟名負處女之八年兒之片生乃時從小放爾髮多久麻庭爾並居
 家爾毛不所見虛木綿乃窄而座在者見而師香跡悒憤時之垣廬成人之
 誂時智奴壯士宇奈比壯士乃廬八燎須酒師競相結婚爲家類時者燒大
 刀乃手預押禰利白檀弓靴取負而入水火爾毛將入跡立向競時爾吾妹
 子之母爾語久倭文手纏賤吾之故大夫之荒爭見者雖生應合有哉完串
 呂黃泉爾將待跡隱沼乃下延置而打嘆妹之去者血沼壯士其夜夢見取
 次寸追去祁禮婆後有菟原壯士伊仰天叫於良妣踞地牙喫建怒而如己
 男爾負而者不有跡懸佩之小劍取佩冬菽蕓都良尋去祁禮婆親族共射
 歸集永代爾標將爲跡還代爾語將繼常處女墓中爾造置壯士墓此方彼
 方二造置有故緣聞而雖不知新裳之如毛哭泣鶴鴨

片生は、かたなりと云に同じ、伊勢集に、かた時の人をみしまになる物はただかたおひにな
 るぞわびしき源氏物語末採花に、紫の君甚もうつくしきかたおひにて、云々、未通女に、まだ
 かたおひなる手のおひさきうつくしきにて、かきかはしたる文どもの云々、若菜に、まだか
 たおひならむとをば、みかくしをしへきこえつべからむ人の、うしろやすからむに、あつけ

きはやなど聞え給ふなどあり、又かたなりとも云ると多し、賢木にいとさとくおとなびたるさまに、ものし給へど、まだいとかたなりになむ、未通女に、十四になむおはしける、かたなりに見えたまへど、いとこめかしうしめやかに、玉葛に、姫君は、きよらにおはしませど、まだかたなりにて、おひさきぞおしはからせ給ふ、若菜に、姫宮は、げにまだいとちひさく、かたなりにおはするうちにも云々、又かたなりなるも、さまに、人によりまさりて、このみ物し給ふ云々、廿一二ばかりになり給へど、なほいとみじくかたなりに、きびはなる心ちして云云、かたなりなる御心にまかせて、紅梅に、御息所の御ことの音、まだかたなりなるところありしを、寄生に、廿一二ぞあまり給へりける、いはけなき程ならねば、かたなりにあかぬ所なく云々、かたなりなるうひ琴をも、かくさずこそあれ、東屋に、まだかたなりに、なに心もなきさまにて、そひふしたり、など見えたり、○小放は、放りの髪とも云り、ふり分髪のほどなり、○髪多久麻庭爾は、髪を總ね結ふ及に、と云なり、二卷に、多氣婆奴禮多香根者長寸妹之髮比來不見爾攝入津良武香、とある處に、委釋りき、○並居家とは、隣家のことなり、上に、指並隣之君者云々、とある類なり、○虛木綿乃は、枕詞なり、舊訓には、ソラユフノとよみたれど、ウツユフならむか、既に拾穂抄にも、書紀の内木綿を引て、ウツユフとよむべきよし、或説に云り、としるせり、契沖云、そらゆふは、いとゆふなり、もろこしに遊絲といふを、此國には、木綿にも

似たりと云こゝろにて、いとゆふとは名づけたりと聞ゆ、それが空にありて、天外、遊絲或、有無、と詩にも作るものなれば、そらゆふのかくれてませば、と云り、第二に、白妙之天領巾隠と云るは、白雲がくれと云ることなるに、思合べし、(已上)今按に、これをウツユフとよめるによりて、強て考るに、木綿は、芋木綿の事にて、二卷に、神山之山邊真蘇木綿とあり、そはかの芋手卷と云て、丸く内方を虚ろに卷たる、それを虚木綿と云ならむか、もしさらば、内のうつろなるが隠りかなるよしもて、うつ木綿のこもりとつゝくならむ(神代紀に見えたる、無戸室のウツは、虚の義にあらざ、混ふことなかれ、かれは至室の意にて、至は、至剣の至に同じ、戸も隔もなく、全く塗廻し、室の義なり)神武天皇紀に、内木綿之真進國とあるも、内方の進くせまりたる意の續けならむか、猶考べし、(冠辭考に野蠶のこと、せるは用がたきよし、余が辨あり)○見而師香跡は、見たきかなとの意なり、○悒憤時之は、心のむすばれふさがりて、おぼつかなく思ふ時のと云なり、又イフカルトキノとも訓べし、イフカルと云ことは、此上に見えたり、しか訓ても、意は同じことなり、さてこの之は、六卷に、丹管士乃將薫時能櫻花將開時爾とある能の言に同じく、つぬの之のいひさまとは、いさゝか異りて、悒憤時人之詠時とをいへるなり、○垣廬成は、上にも、垣保成人之横辭繁香裳不遭日數多月乃經良武とあるに同じく、吾あはむとするを、垣穂の如くさまたげへだて、あはさじとして、人のわれさきに

と、こととふよしなり、○人之誂時誂字、拾穗抄には挑と作り、契沖も誂は挑の誤なるべきよし、さだせれど、なほ誂字よろしは、ヒトノフトキなり、誂は誘ふ義にて、妻問よしなり、古事記安康天皇條に、爾都夫良意美、聞此詔命、自參出、解所佩兵、而八度拜白者、先日所問賜之女子、訶良比賣者、侍云々、とあるも、所問賜は、妻問したまへると云ことなり、又允恭天皇條輕、太子御歌に、阿志比紀能云々、志多杼比爾和賀登伊布毛袁云々、とあるも、下問にて、問は妻聘なり、○智奴壯士は、さきに引る大和物語に、和泉國の人、姓は血沼となひひける、とあるこれなり、血沼は、古事記に、五瀬命云々、到血沼海、洗其御手之血、故謂血沼海也云々、書紀に、河内國泉郡茅渟海、とあり、(書紀にかくあるは、いまだ和泉國を割置れざりし前なればなり、今は和泉國なり)この處の本居の壯士なるべし、千載集十二に、戀佗ぬ血沼のますらをならなくに生田の川に身をや投まし、とあり、○宇奈比壯士は、この處女と同じく、菟原郡の産なり、○廬八燎は、枕詞なり、八は借字にて、屋なり、廬屋を焼て凝烟び、といふ意に、云係たり、ふせ屋にて火を燎ば、よくすゝけふすぼるものなれば云り、大神景井廬八は、廬火の誤ならむか、廬火燎凝烟と續きたるなり、あし火たく屋のすしてあれど、云るを考合べし、と云り、○須酒師競は、ス、シ、キ、ホ、ヒと訓べし、進競と云が如し、ス、シは、スソリ、ス、ミ、ス、ロク、ス、サムなど云言に通ひて、皆同意なり、互にわれおとらじと進みて争ふ謂なり、○相結婚は、

ア。ヒ。ヨ。バ。ヒ。とよめるよろし、十二に、他國爾結婚爾行而太刀之緒毛未解者、佐夜會明家流、古事記八千矛神御歌に、佐加志賣遠阿理登岐加志氏、久波志賣遠阿理登伎許志氏、佐用婆比爾阿理多多斯、用婆比邇阿理加用婆勢云々、伊勢物語、又源氏物語などにもある詞なり、こは吾方に心をよせよと、女を呼といふ意より出たる言なり、用婆布は、用夫と約ればなり、今の世にも、女房をよぶなど云り、十三に、ヨ。バ。ヒ。と云に、夜延と書るによりて、夜匍匐と云意と思ふは、わろし、(竹取物語にいへるは、ことさらにわざと滑稽て云るのみなり、言の本を誤ることなかれ)○爲家類時者は、者は煮の誤なり、シケルトキニとよむべし、○焼大刀は、四卷にも見えたり、焼てきたひつくるものなればいふ、焼鎌なども古語に云り、○手預押禰利は、預は頭字の誤として、ク。カ。ミ。と岡部氏のよめるぞ宜しき、タ。カ。ミ。は、古事記に、手上書紀に、劔頭と書て、今云柄なり、又神武天皇紀に、撫劔此云都盧者能多伽彌屠利辭魔屢と見えたり、(又紀中に劔柄と書て多加比と訓る所もあり、そはいみじきひがことなり、其は風土記に、日向國宮崎郡、御劔柄置於此地、因曰劔柄村、後人改曰高日村也、とあるを、本よりたかひの村とは云つれども、劔柄と書しを改めて、高日とせしと云ことごと誤心得して、つひに劔柄を、しか訓るものなり、此風土記の意は、本たかみの村と云るを、後人たかびと改めつと云ことにて、劔柄をたかひと云べきよしは、さらになし、ミ。と。ビ。の濁音と通ふまゝに、後人改めて然いへる

のみにこそあれ、よく考べし、又略解に、預一本類とす、祝詞にも類はカヒとよめりヒとミと通へば手類にてタカミとよむべしといへるも、うべなひがたし、押禰利は、契沖云、押燃りなるべし、○鞞は、鞞字の俗體なり、○入水火爾毛將入跡は、水中にも入、火中にも入、むとての意なり、水爾毛と云意なれど、火爾毛の毛に照して、略けるなり、山をも川をもと云意の處を山を川をもと云、同例なり、四卷に吾背子波物莫念事之有者、火爾毛水爾毛吾莫七國とよめり、榮花物語に、この御そらは、そらの夜心ざしのかぎり、火水に入まどひあつかひ明し奉りたれば、心ちもあしう成て云々、○競時爾は、キホヘルトキニとよむべし、○吾妹子は、菟原處女なり、○母爾語久は、母に語るやうは、と云むが如し、○倭文手纏文字、舊本父に誤り、は、賤の枕詞なり、倭文は、借字にて賤なり、後ながら今昔物語に、賤の鞍、賤の水干、賤の弓胡籙、など云る類の賤にて、其品の賤しく下れるをいふ稱なり、手纏は、所謂手纏の玉の類なり、さてその賤の手纏は品下りて、物數ならず、賤しき意につけたるなるべし、○賤吾之故は、卑賤き吾なるものをの意なり、吾之故は、吾故によりてといふ意にはあらず、○應合有哉は、アフベクアラメヤと訓べし、逢べくあらむやは、逢こと叶はじと云意なり、さて次下の句に、血沼壯士其夜夢見云々といひ、又反歌にも、如聞陣努壯士爾之依倍家良信母とあるを、合見るに、この處女、血沼壯士に心よせられたれど、相競ふをとこのある故に、得あふこともせざれば、夜見に行て、

血沼壯士を待むと、心の内に契りおきて、自害せるよしなり、○完申呂(完字は、完なるべきを、古書多くは完と作り)は、枕詞なり、書紀繼體天皇卷、歌に、矢自炬矢盧于魔伊禰矢度爾とあるに依に、完は矢自と濁るべきに、此字をしもかけるは、凡て借字には清濁を互に轉用たる例多ければなり、此事既く一卷に具説り、さて矢自は、繁の謂ならむ、串呂は、藥なるべし、藥は酒のことなり、上代に、酒をもて藥とせしこと、その證古書にこれかれ見えたり、さて酒を古に伎といひ、久志と云るも、みな久須理の縮れる言なり、久須理の須理を切て、(志となる故)久志といひ、その久志を切て伎と云るにて、皆一なり、さて久須理といふ言義は、もと類汁なるべし、(祝詞に、汁爾毛類爾毛と云るは、酒と稻實と二をいふなるを、今はそれとは異にて、類は稻實にて米なり、但し類字は、玉籩に禾末と註したるによれば、のぎさきのことなり、此方にては、江家次第に、切穂謂之類とあれば、もはら稻穂をいふこと、見ゆるに、祈年祭祝詞に、皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穂爾聞食故丹云々、とある加比は、すなはち米のことなるを合思べし、さて米汁は酒なり、(から國にも酒のことを米汁といふめり)さて類は伎と切れば、伎志留といふべきを、伎を久に通し、留を呂に通はして、久志呂といひ、又久須理とも通はし云りとおぼゆ、かくて上古には、酒をもて藥とせしこと、上に云る如くなれば、藥と酒は同物なり、さて繁といふは、酒實の繁くて醇き意もて云るならむ、か

くて黄泉につゞくは、美實といふなるべし、さて書紀に、于魔伊とつゞけたるは、繁酒甘美といふ意にて明かなり、しかるを冠辭考に、完串呂は繁釧なるべし、繁釧を好とほむるを黄泉につゞけ繁釧美しとほむる語を、熟寢に云かけつと見ゆ、繁釧は、鈴を繁く着たる釧ありしならむと云るは、いかにぞや、そも、繁釧の意ならば、即直に釧の繁かる謂とこそきこゆれ、其に附たる鈴の繁きよしとせむは、いはゆる耳をとりて、鼻かみたらむが如くなるをや、○黄泉爾將待跡は、血沼壯士をなり、契冲が母をまたむとなりといへるは、たがへり、○隠沼乃は下の枕詞なり、○下延置而は、下とは裏にてしのび隠して、ひそかに物するを云ことなり、四卷に、戀爾毛曾人者死爲水瀬河、下從吾瘦月日異、十卷に、藤浪咲春野爾蔓葛下夜之戀者、乏雲在、十一に、埋木之下從其戀、又同卷に、隠沼從裏戀者、又隠沼乃下爾戀者、十二に、隠沼之下從者將戀、又、隠沼乃下戀餘、十七に、許母里奴能之多由孤悲安麻里、などあり、古事記に、許母理豆能志多用波閉都々、とも見ゆ、延とは、思を懸て聘するを云、十四、二十に、之多婆倍十八に、之多波布流、十二に、令蔓有者、古事記に、波閉祁久斯良邇、などあり、しのび隠して人しれず、ひそかに思をかけ置て、といふなるべし、○打嘆妹之去者は、處女の自害したるを、物に出行たる如くに、比云たるなり、○血沼壯士其夜夢見は、處女が自害したることを、血沼壯士が夢に見たるなり、○取次寸追去祁禮波は、取つゞきて、血沼壯士も自害したるをたとへたり、○菟原

壯士伊とは、伊は、紀關守伊家なる妹伊など、集中によめる伊なり、そへたる辭なり、三卷にも、志斐姫を、志斐伊といへり、續紀宣命等に、ことに多き辭なり、此伊を下の句の上へつけて、イアフギテとよめるは、わろし、この句と次句とは、本居氏の訓に従へり、○仰天は、アメアフギなり、下の跣地と云に相對て云り、○叫於良妣とは、叫は玉篇に、叫呼也と見ゆ、(字彙に、叫俗作叫非、とあれば、叫の俗字なるべし、)大聲に呼號ぶ意なるべし、於良妣は、神代紀下に、哭聲、清寧天皇紀に、哀號など見えたり、今も土佐國などにては、なきさけぶを、おらぶと云り、(契冲云、今も筑紫の方の人は、さけぶを、おらぶ、といへり)、○跣地、跣字、拾穂本には、頓と作り、地字、舊本に他と作るは、誤なり、今は元曆本、拾穂本等に従つ、跣は、もしは、跣字の誤には、あらざるか、字彙に、吳都賦、魂褫氣懾、而自跣、跣者、應弦而飲羽、とあり、但し、跣は、跣、義ある字にて、もあらむか、未詳には、知ず、上に天を仰よし、ひこ、には、地に伏よしを云て、詞を雙對べたり、歎の甚しきよしなり、五卷に、天神阿布藝許尙乃美、地祇布之豆額拜、なりと見ゆ、(略解に、清水濱臣説を引て、跣地は、義を以て、あしずりしと訓べしといへるは、笑ふべし、)上に天を仰て、叫哭、と云るに、對たれば、こゝは、いづれ地に伏勃怒と云べき語、勢なるをや、○牙喫、建怒、而とは、牙喫は、字鏡に、咆勃勇猛貌、和奈志、又支可牟、とあり、支可牟は、牙喫なり、和名抄に、牙岐波、一云在齒後、最近輔車者也、とありて、キハは、牙齒にて、牙は、キとのみ云ぞ、古言なるべき、建怒は、古事記に、男

建神代紀に、雄詰此云鳥多稽眉神武天皇紀に、雄詰此云鳥多雞盧此集十一に、大夫乃思多雞備豆などもよめり、又遷却崇神祝詞に、荒備給比建備給事無志豆、ともあり、健く荒ぶるを云古言なり、○如己男爾とは、モコロは、如の古言なり、神代紀下に、若燧火、又此集十四廿卷にも、如と云べき所を、モコロとよめり、モコロヲは、十四に、可奈思伊毛乎由豆加奈倍麻伎母許呂乎乃許登等思伊波婆夜夜可多麻斯爾、とよめり、さて如己とかけるは、如自己男と云義にて、われく、なみの男にと云意なり、言が同輩にといふが如し、○懸佩とは懸は、手して物すること、多くそへいふ言にて、取佩といふに同じ、搔曇搔數など云カキも、もと此よりうつりたる言なり、懸はカキなり、カケとよめるにつきて、契沖が、太刀をば、紐解ときは懸置、又は取はくものなれば、かけつにきつと云心なり、と云るはわろし、懸を、古は多くは、カキと云りし故に、此字を書るなり、古事記に、掛出胸乳、又應神天皇條に、掛出其骨などもあり、○冬菽積都良菽字、舊本菽に誤れり、拾穂本には、著と作り、薯なるべし、即薯と作る本もあり、は枕詞なり、トコロツラと訓べし、此章既く出たり、品物解に委云り、○尋去祁禮婆は、契沖云、タヅネケノパとよむべし、後撰集に、あしひきの山下しげくは、ふ葛のたづねてこふる我としらずや、此歌は、ふ葛のたづねるとつゞけたる、葛のこなたかなたにわかれては、ひゆくは、物をたづぬるに似たれば、今もたづねゆくといはむために、冬菽積都良と云るは、後撰集の歌の心に同じ

と云り、さてこれも、菟原壯士が、追つゞきて自害せるを比へたるなり、○親族共は、ヤガラドチとよむべし、二壯士と、處女の親族等をいふ、○射歸集は、イユキツドヒと訓べし、射はそへ言たり、○標將爲跡、標字、舊本標に誤、拾穂本に従、は、契沖が、シルシニセムトとよめるよろし、○處女墓は、ヲトメハカと訓べし、○壯士墓は、ヲトコハカと訓べし、○故縁は、源氏物語、帚木に、あまりのゆゑよし心ばえ打そえたらむをば、よろこびに思、と云り、○雖不知は、十三に見吉野之瀧乃白浪雖不知語之告者古所念とあるに同じ、往古の事なれば、まのあたり、見知りよしなり、○新裳之如毛は、昨日今日ありし、新喪の如くにも、の意なり、裳と作るは、借字なり、さきの真間娘子をよめる歌に、遠代爾有家類事乎昨日霜將見我其登毛所念可聞、といへるに同じ、

反歌

葦屋之宇奈比處女之奧擲乎往來跡見者哭耳之所泣。
 往來跡見者は、行とは見歸來とは見る意なり、○歌意は、葦屋の菟原處女が墓所を行とては立よりて見歸來とは、立よりて見すること、きのふ今日ありし新喪の如く思はれて、おはれにかなしく、一すぢに哭にのみなかるゝとなり、
 墓上之木枝靡有。如聞陳努壯士爾之依倍家良信母。

墓上はハカノへと訓べし、○依倍家良信母は、倍は仁の誤なりと或説に云り、さもあるべし、○歌意は、この處女墓の上に、墓標に殖たりける、その黄楊の木の枝が、血沼壯士の墓の方へなびきてありけり、さては素り、外にて聞しが如く、まことに血沼壯士に、心をよせたるにてありけらし、さてもあはれのけしきやとなり、黄楊をうゑしことは、十九、この處女墓をよめる長歌に、思努比爾勢餘等、黄楊小櫛之賀左志家良之、生而靡有、とよみ、其反歌に乎等女等之後能表跡、黄楊小櫛、生更生而靡家良思母、とあり、〔右五首、高橋連蟲麻呂之歌集中出〕

萬葉集古義九卷之下終

萬葉集古義十卷之上

春雜歌

これは以下凡七十八首歌の總標なり、
雜歌

この二字、舊本にはなし、目錄にはかくあり、總標に春雜歌とあるは、下の旋頭歌、譬喻歌とあるまでを總たれば、今の七首の題詞、別に擧ずしては足はず、春相聞も、をはりの問答十一首までの總標なれば、はじめの七首、別に題を擧べきに、舊本になきは足はず、秋相聞の下の相聞五首、冬雜歌の下の雜歌四首、冬相聞の下の相聞二首、みな此に准ふべし、さて今この七首は、みな霞の歌なるを、下に詠霞三首といへると別てるは、所由あるにや、

久方之天芳來山此夕霞霏微春立下

天芳來山來字、舊本になきは、脱たるなるべし、三卷に、天之芳來山、とあるにて、必來字あるべきことを思ふべし、但別所に香山と多く書たるは、芳香同義にて、かぐはしきと云訓を用た

るものと思ふはあらず香山と書るは義異れり香はカウの音を轉し用たるものなり高山
と書ると同義なり既く云り混ぶべからず○歌意は此夕方あの迦具山に霞の立たなびき
たるよこれにて思へば春が來たるにてあるらしさてものどかなるけしきぞとなり

卷向之檜原丹立流春霞鬱之思者名積米八方

卷向之檜原は七卷に動神之音羽聞卷向之檜原山乎今日見鶴鳴とあり此山の事既く七卷
にいへり○鬱之思者は岡部氏オホニシモハハと訓るよろし霞の立ふさがりておほほお
しき意に云かけたるにて承たるうへにては大かたの謂なり之は助辭にて力ありすべて
之の助辭はその一すぢをとりたてゝおもく思はする處におく辭なり既くたびく云り
○名積米八方はナヅミコモヤモと訓て米はコメの借字なるべく思はるれどもなほ思ふ
に來字を誤れるなるべし嗚呼艱難來むやはの意なり八は後世の也波の也にて方は歎息
辭なり○歌意本は序にて大方にそこを思はゝかやうに遠道を艱難辛勞してあひに來ら
むやは一すぢに深く思へばこそ來れるなれとなり○今按に此歌本句はオホといはむた
めの序なれば寄霞相聞條に入べき歌なり

古人之殖兼杉枝霞霏霰春者來良之

本句は契沖云卷向山につきてよめる歌の中にあればこれも卷向山の杉なるべし杉は年

ひさしくあるものなればいにしへの人のうゑけむ杉が枝とはいへり今按に卷向山に昔

時人ありて杉を殖生しと云故事ありてよめるなるべし○歌意かくれたるところなし

子等我手乎卷向山丹春去者木葉凌而霞霏霰

子等我手乎は枕詞なり○木葉凌而は之奴藝とは物の堪がたきを押するを云詞なり三
卷に奥山之菅葉凌零雪乃云々とあるも菅の葉を推なびけて零雪を云るにて薄く零雪な
らばこそあれ厚くふる雪はその靡かすに堪がたき處をも凌奪ひ吾處とする謂にて云る
なり但し霞は草木の葉なぞをおしなびけてたなびくものにはあらざれどもたゞ打見た
るさまの木葉の處を凌ぎ奪ひ吾處として押なびけて立たなびきたる如くなるを凡にし
か云るぞ古語なる略解に木葉凌而は常葉木の葉のあはひまでもの意なりといへるこれ
は木葉のあはひの人に堪がたき處へも堪て立入たる謂にとりていへるなるべけれどい
さゝかいかなり○歌意かくれなし(六帖にせながてをまきもく山に此ゆふべ木の葉し
のぎて霞たなびくと本句を改て載せたり)

玉蜻夕去來者佐豆人之弓月我高荷霞霏霰

玉蜻は枕詞なり既く出づ○佐豆人之も枕詞なり佐豆人とは古事記に海佐知彦山佐知彦
集中に薩雄とも見えてすべて獵漁する人をいふ稱なりさて佐都人といふべきを豆の濁

音の字を書るは、妣等の妣の濁音を上に轉す一格にて、里人を佐度人といふと同例なり、さてさつ人は、もはら弓矢もて鳥獸を獵ゆゑ、さつ人の取持弓束といふ意に、弓槻といふ地に云かけたるなるべし、カトキは親通へり、たゞに弓といふにのみ、かゝれるにはあらじ、○弓月我高は、泊瀬の齊槻が峰なり、○歌意これもかくれなし、

今朝去而明日者來牟等云子鹿丹旦妻山丹霞霏霰

此歌第二三句、ア。ス。ハ。コ。ム。ト。イ。フ。コ。ガ。ニ。とよみたれど、解べきやうなし、岡部氏ア。ス。ハ。キ。ナ。ム。ト。イ。フ。コ。ガ。ニ。とよみたれど、なほわろし、略解に、朝妻と云山の名によりて、朝歸りては、又あすも來むといふ妻の契たがへぬ如くに、朝妻山に霞のたなびくと云歟と云るは、太じき強説なり、故熟按に、こは甚く字の亂れたるなるべし、今われ嘗に云べし、こはもと明日者來牟等云愛也子旦妻山爾云々、とありしなるべし、ざるを愛也を鹿丹に誤て、つひに子字は上に入混て、今の如くなれるなるべし、又按に、子鹿丹は、左丹頰歷とありしを、左を子に誤り、頰字を脱し、歷を鹿に誤、また丹字は亂れて、旦字の上に入しものなるべし、三卷に、狹丹頰相吾大王者、此卷に、左丹頰經妹乎念登七卷に、雜豆臘漢女乎座而十三に、散釣相君名曰者、などよみたれば、左丹頰歷旦妻とも續くべきことなり、且六卷に、狹丹頰歷黃葉散乍、と書るにて、鹿は歷字の誤なるを知べし、されどなほ上の説によりて、愛也子とせむかた、平穩なるべし、さ

て旦妻は旦夫にて、妹がりゆきて、旦に歸る夫をいふことなれば、今朝妹がりより去て、早明朝は來むといふ愛き旦夫といひかけたるにて、上は旦妻山と云むための序なり、○旦妻山は、大和國葛上郡なり、天武天皇紀に、九年九月癸酉朔辛巳、幸于朝婦云々、仁德天皇紀、大御歌に、阿佐豆磨能避箇能鳥瑤箇鳥云々、又姓氏錄に、太秦宿禰の先祖を、大和朝津間、腋上、地に居しめしことなど見えたり、近江にも、あさづまてふ地あれど、此歌なるは、それにはあらず、次歌なるもおなじ、○歌意かくれなし、夫木集に、旦妻の片山櫻咲にけり、明日は來むといふ人に見せばや、

子等名丹開之宜朝妻之片山木之爾霞多奈引

開之宜、開は關字の誤なるべし、關は懸の借字なり、六卷に、缺卷毛と書るなども、此例に近し、四卷に、鹿煮藻關二毛とも書り、又元曆本には、關と作り、それに從ば、關係る意にて、正訓とすべし、續紀四卷、詔に、關母威岐、藤原宮御宇、倭根子、天皇云々、關母威岐、返江、大津宮御宇、大倭根子、天皇云々、これらによるときは、關とせむぞよろしかるべき、但この續紀なるも、印本には、開に誤れり、一本に關と作り、さて子等が名に係ていふも、宜しき旦妻といひかけたる序なり、○歌意これもかくれなし、

〔右七首、柿本朝臣人麿歌集出〕

詠鳥

白雪之常敷冬者過去家良霜春霞田菜引野邊之罵鳴鳥旋頭

常敷常は落字の誤りにて、ノリシクなるべし、常の草書落に誤れる例あり、九卷に、勢能山爾
黄葉常敷十九に、十月之具晚能常可、これらみな常は落の誤なり、敷は、重る意なり、敷は詞な
り、と略解にいひたれども、ひがことなり、○鳥、二本には焉と作り、契沖云、和名集に唐韻を引
て、鳥は焉と通ずといへり、しかれば、助語におけり、○歌意は、霞の立たなびきて、其野に罵の
鳴ぬるにて思へば、今は雪の降重る冬は過にけらし、さてものどかなる春のけしきやとな
り、

打霏春立奴良之吾門之柳乃宇禮爾罵鳴都

打霏は、契沖、霏は靡の誤なり、前後みなしかりといへり、霏字も、たなびく意にて、ナヒクと訓
まじきにもあらぬど、なほ外の例を考るに、契沖のいへるがごとくならむ、此は草木の若く
なよ、かに、打しなひ靡く春とつゞきたるなり、此つゞけ集中にいと多し、○宇禮は、末枝の
つゞまれるなり、○歌意は、吾門の前に殖る、柳の梢に来て、鶯の鳴つるよ、これにて思へば、草
木の打しなひ靡く、のどかなる春の來れるにてあるらし、となり、

梅花開有崗邊爾家居者乏毛不有罵之音

第三四句、イヘヲレバトモシクモアラヌと訓べし、拾遺集には、いへしあればともしくもあ
らずと載たれど、わろし、○歌意は、梅の花の咲たるこの崗の邊に、家居を爲てをれば、乏しく
少くもあらぬ鶯の聲ぞ、よくこそ此處に、家居をばしつれとなり、

春霞流共爾青柳之枝啄持而罵鳴毛

流共爾は、ナガル、ナベニと訓たるよろし、さて霞雪の類にも、ながるゝといへること、古へ
は多し、さるは空、方より豎に降るをも、横に延をも、ずべて長くひきはへたるを、長るゝとい
へば、水にはかぎりざることをするべし、(契沖が霞のうへは、水のながるゝやうなれば、かく
はいへりといへるは、いさゝか本末を失たるに似たり)、○枝啄持而、契沖、鶯の木傳ふに、まこ
とに何をはむにか、しかするなりといへり、十六詠、白鷺啄木飛歌に、池神力士儻可母白鷺乃
梓啄持而飛渡良武源氏物語胡蝶に、みづとりのともものつがひをはなれずあそびつゝ、ほそ
きえだどもを、くひてとびちがふ、といへり、○歌意は、霞の長く引はへたなびくにつれて、柳
の枝を啄持て、鶯の鳴囀るよ、さてもおもしろの春のけしきやとなり、

吾瀨子乎莫越山能喚子鳥君喚變瀨夜之不深刀爾

莫越山は、大和の巨勢山に、吾夫子を越すこと莫らしめよ、此方へよびかへせと云意に、いひ
つゞけたり、七卷に、吾勢子乎乞許世山、とつゞけたるとは、反對にて、今は吾方より、歸る夫を

呼返せと喚子鳥に令するなり。○夜之不深刀爾とは、刀爾は時爾の略なりといひ、保刀爾の略なりと云などは、穩ならず、刀爾は十五に、古非之奈奴刀爾十九に、左欲布氣奴刀爾廿卷に、佐久良波奈知利加須疑奈牟和可我敵流刀爾、書記繼體天皇卷歌に、于魔伊禰矢度爾々播都等唎柯稽播儺俱儺梨などあるに同じ、古事記傳に、二説出せる中に、夜之不深刀爾は、俗言に、夜の更ぬうちになど云と同意にて、刀爾は外になり、其を俗に内にと云は、此方を内にし、彼方を外にして云言、外にと云は、彼方を内にして、此方を外にして云言にて、意は同じ、行を來と云も通ふが如しといへり、今一の説には、刀は早くといそぐ意なり、夜之不深刀爾は、夜のふけぬほどに、早くといそぐ意、古非之奈奴刀爾は、戀死なぬほどに、早くといそぐ意なり、十九に、行得毛來等毛船波早家無とあるも、船路は、往さまにも、歸り來るさまにも、いかで速くといそぐ物なる故に、其を行得來等は云るなり、又、于魔伊禰矢度爾々播都等利柯稽播儺俱儺梨は、鶏のいそぎて早く鳴意、佐久良波奈知利加須疑奈牟和可我敵流刀爾は、櫻花のいそぎて早く散むと此方の心に、然思ふ所なりと云り、いづれか是らむ、なほ上の説によるべきか、○歌意は、巨勢山に棲て鳴喚子鳥よ、今夜吾方より歸り賜ふ吾夫子を、その巨勢山を越すこと莫らしめて、夜の更ぬ内に、此方に喚かへしてよとなり、拾遺集十三に、題知ず、山部赤人、吾せこをならしの山によぶ子鳥君よびかへせ夜の更ぬ時とあるは、此歌を心得あやまれ

るなり、

朝井代爾來鳴杲鳥汝谷文君丹戀八時不終鳴

朝井代爾、岡部氏、井代は、堰堤のこと、すれど、堰堤はあまりに不意く聞え、且朝といはむもよしなし、思ふに朝戸代を誤れるなるべし、下にも、朝戸出といひたりと云り、さらば朝戸出の折節に、來鳴意なるべし、○來鳴杲鳥は、來鳴し貌鳥と云が如し、來鳴しといふ意なるを、直に來鳴とのみ云は、袖吹反せしと云意なるを、袖吹反すあすか風といへるに同じ、古人言のせまらざる思べし、杲鳥は、品物解に出す、○汝谷毛は、汝さへもと云意なり、○君丹戀八は、君を戀しく思へばにやの意なり、君とは杲鳥の妻を云り、古今集にも、あしひきの山ほととぎすわがごとや君にこひつゝいねかてにする、とよめり、○時不終鳴は、止時なく、頻りに鳴と云むが如し、時を終るとは、たとへば寅時に鳴て、聲を姑息て、又卯時に鳴は、時を終るなり、刻にていへば、たとへば寅時の一刻に鳴て、姑息を息て、又二刻に鳴は、刻を終るなり、こゝは時にしても、刻にしても、其時刻の終るにも、鳴息ず、しばしも聲を止ず、重々に頻り鳴よしなり、一日を十二時にわけ、一時を四刻にわけたるをも、皆古はときとのみいへり、○歌意は、朝戸出の折節に來て鳴し貌鳥よ、吾君を思ふに、忘るゝ隙なきことなるに、吾のみならず、汝さへも、その妻を戀しく思へばにや、今朝よりはじめて、時刻の終るをもしらずに、

重々に鳴頻るらむとなり、

冬隱春去來之足比木乃山二文野二文罵鳴裳。

冬隱は、春の枕詞なり、既くたびく、出づ、○歌意は、山にも來て鳴野にも出て鳴こ、にもか
しこにも、鶯のさても面白く鳴よ、これにて思へば、のどかなる春の節に至れるにてあるら
し、となり、

紫之根延横野之春野庭君乎懸管罵名雲。

紫之根延とは、契沖むらさきの根の横にはふこゝろに、かくはつゞけたり、紫の根を見侍る
に、横にはふものにはあらず、ほそき筆管ばかりにて四五寸なるがなほくて、めぐりに髭の
ごとくなるほそき根の横と云べくもなきが見ゆるなるを、大かたの草木になずらへて、か
くはつゞけたるなるべしと云り、○横野は、仁徳天皇紀に、十三年冬十月、築横野堤、延喜式神
名帳に、河内國澁川郡横野神社、と見ゆ、契沖云、今横野といふ處は、うけたまはり及ばず、横沼
といふ所ぞきこゆる、そこにや、また横野堤和泉なりとて、續古今集光俊霜がれのよこの、
つゞみかぜさえて入しほとほく千鳥なくなり、と云歌を、ある人かたり侍りし、未考へず、○
春野庭は、庭とは、山常庭の庭に同じく、爾波の借字にて、他所にむかへていふ詞なり、この面
白き春野には云々、他所はしらずといふほどの意なり、同じ春なれば、他所もしからぬには

あらねども、この春野の面白きけしきを、つよくいはむがためなり、○君乎懸管は、俗に、君が
ことをうはさしつゝと云意なり、○歌意は、紫根の蔓る、この横野の面白き春野には、いかで
君見に來賜へかしと、君がことを詞に言出つゝ、鶯の鳴よ、さても心ある鶯やとなり、鶯の聲
も、人の事をかけつゝ、鳴如く聞なざるゝは、深く思へる實情なるべし、

春之在者妻乎求等罵之木末乎傳鳴乍本名。

在、字、舊本に去に誤れり、○木末は、コヌレとよむべし、木之末枝のつゞまれる古言なり、ウラ
エはウレに切り、ノウレはヌレに切れり、梢のことなり、○鳴乍本名は、もとな鳴つゝの意な
り、本名は俗にむさゝと云むが如し、○歌意は、春になれば、己が妻をもとむるとして、諸木の梢
を、此方彼方と傳ひうつりつゝ、むさゝく、鳴て、人の戀情をもよほさしむるよ、となり、

春日有羽買之山從猿帆之内敵鳴往成者孰喚子鳥。

羽買之山は、二卷に出て既く註り、○猿帆之内は、佐保山の内に、集中にあまたよめり、猿は
サの借字なり、和名抄に、下總、國猿島郡佐之萬、これ猿をサといへる例なり、○歌意は、羽買の
山よりして、佐保山の内へ鳴て飛往なるは、そも誰を喚ふ喚子鳥ぞ、となり、

不荅爾勿喚動曾喚子鳥佐保乃山邊乎上下二。

歌意は、佐保の山邊を上りては喚、下りては喚、喚子鳥よ、誰ありて、答ふる人もなきことなる

に、しかのみ喚とよむることなかれとなり、契沖云、これは上の歌の作者おしかへしてよめり、二首にて、かやうによむこと、この集におほし、

梓弓春山近家居之續而聞良牟鷲之音

梓弓は、枕詞なり、これは弓を張、といふ意に、つゞけたり、古今集二卷に、あづさ弓春の山べを越來れば道もさりあへず花ぞ散ける、梓弓春立しより年月の射るが如くもおもほゆるかな、などあり、○家居之は、家居を爲賜ひてと云ほどの意なり、本居氏之は者の誤なるべし、イヘヲレバとよむべしと云るは、かへりていかゞ、○歌意かくれたるところなし、これは山近き處にすむ人をおもひやりてよめるなるべし、古今集に、野べちかく家居しをればうぐひすのなくなるこゑは朝なく、きく、これは自家居したる人のよめるなり、

打靡春去來者小竹之米丹尾羽打觸而鷲鳴毛

小竹之米は、シヌノメと訓べし、篠之群の意なり、十一に、秋柏潤和川邊細竹目云々、とあり、又元曆本に、米を末と作るに従は、シヌノツレニとよむべし、十二に、小竹之上爾來居而鳴鳥目乎安見云々、とあり、○歌意は、草木の萌出て、打しなひ靡くのどかなる春になれば、細竹の群に尾と羽を打觸て鷲の鳴よ、さても面白や、なつかしやとなり、
朝霧爾之怒怒爾所沾而喚子鳥三船山從喧渡所見

之怒怒爾所沾而怒怒、元曆本には、努努と作り、は、此下に、聞津八跡君之間、世流霍公鳥小竹野爾所沾而從此鳴綿類、とあるに同じ、しとくと沾漬りてと云意なり、俗に、しつほりとぬると云に同じ、伊勢物語に、蓑も笠も取あへで、之等等に濕てまどひきにけり云々、金葉集連歌に、雨降ば岸も之等々になり、けり、鵲ならばかゝらましやは、などある之等等は、もとの之怒怒を、シトトと訓誤りたるより出來たる詞なるべし、怒字には、トヌの兩音あればなり、されど集中には、ヌの假字にのみ用ひて、トには用ひざる例なるを、委く考へざりしものなり、霧は水氣よりおこれる物なれば、沾と云はさらなり、○歌意かくれたるところなし、

詠雪

この二字、こゝに必あるべきが、舊本になきは脱たるなり、上件十三首は詠鳥の歌、以下十一首は詠雪の歌なればなり、

打靡春去來者然爲蟹天雲霧相雪者零管

春去來者、契沖、この春さりくればといひて、下のつゞき、心たがへるやうに聞ゆるは、第四卷に見まつりていまだ時だにかはらねばとし月のごとおもほゆる君と云歌のごとく、此集に、者の字に、今の世とかはれることありて、心得がたし、此歌にては、春さりくればといはざれば、叶ひがたしと云り、さることなり、但し此歌にては、其大意はたがはねども、なほ來者を、

くれどときかむは、いさ、かよろしからず、來者は來るにの意なり、四卷なる、未時太爾不更者も、更らぬにの意なり、二卷高市皇子尊、殯宮の歌に、憶毛未盡者とあるも、いまだ盡ぬに云意にて、其處に既に委く註るごとく、今も春さりくるにの意なり、或人疑ひて云けらく、未盡者、未解者、未枕者、不更者、不有者、など云る類を、未盡ぬに、未解ぬに、未枕ぬに、更らぬに、有ぬにと聞ことは、古言の常なり、しかるを來者を來るに、往者を往に、と聞むことは、おぼつかなしといへり、まことにさることなり、しかれども、三卷に、稻日野毛去過勝爾思有者、心戀敷可古能島所見とある、思有者も、思へるにと云意に聞え、又此下に、木晚之暮間有爾雀公鳥何處乎家登鳴渡良武とある、歌の第二句を、一本に、暮間有者とあり、この有者も、意は有にと聞ゆれば、來者を來るにと聞こともありしか、○然爲蟹は、さすがにと云に同じ、俗に、しかしながらにと云が如し、後拾遺集に、しかしがのわたりにてよみ侍ける、思ふ人有となければ、ふる里は、しかしがにこそ、こひしかりけれ、○天雲霧相は、雪ふらむとて、雲の雨霧さまを云り、略解に、さらひを、霞のこと、せるは、あらじ、○歌意は、草木の萌出て、打しなひ靡く、のどかなる春になりぬるを、しかしながらに、なほさえかへりて、天に雲霧などの立覆ひ陰りて、雪はふりつゝ、寒さに堪がたく思はるゝ事ぞとなり、六帖に、此歌を、打なびき春さりくらしと改たるは、通え難し、

梅花零覆雪乎。裴持君爾令見跡。取者消管。

裴持は、ツ、ミ、モチと訓べし、○歌意は、梅花をふり覆ふ雪の面白ければ、この見どころある雪を、このまゝつゝ、みもちて、君に見せむと思ひて、とれば消つゝ、あとかたもなく失るを、いかにしてか見せまらせむ、唯獨見つゝ、あらむは、甚くちをしきものとなり、

梅花。咲落過奴。然爲蟹。白雪庭爾。零重管。

咲落過奴は、散過ぬと云に同じ、散を咲散といふは、古言の常なり、○歌意は、梅花は既に散失ぬ、これにて思へば、今はひとへに和に暖なるべき理なるを、しかしながらに、庭上に重に雪

今更。雪零目八方。蜻火之。燎留春部常。成西物乎。

のふり積つゝ、なほいと寒き事ぞとなり、蜻火は、陽炎にて、後世に遊絲とよむものなり、○歌意は、そらには陽炎の燎わたりて、遊絲くりわたしつゝ、まことにのどかなる春になりしものを、今更又さえかへりて、雪のふる事のあるべしやは、となり、

風交。雪者零乍。然爲蟹。霞田菜引。春去爾來。

風交は、五卷貧窮問答歌に、風雜雨布流欲乃雨雜雪布流欲波云々、八卷に、風交雪者雖零實爾不成、吾宅之梅乎、花爾今落莫などあり、(新古今集に、風まぜにとあるは拙し)、○春去爾來は、春

になりけりと云に同意なり、佐留と云義は、既に委註り、○歌意は、風の吹に雜りて雪はふりつゝ、なほ寒くはあれど、しかながらに、霞の立たなびきて、のどかなる春のけしきになりけりとなり、

山際爾。鶯喧而打靡。春跡雖念。雪落布沼。

歌意は、山際に鶯の鳴て、木芽萌出靡きつゝ、今はのどかなる春になりぬるよ、と思ひゆるしてあれど、又さえかへりしきりに雪のふりつゝ、寒くある事となり、(六帖には、終句、雪はふりつゝ、とて載たり)

峯上爾。零置雪師。風之共。此間散良思。春者雖有。

歌意は、春にはあれど、ちらりちらりと雪のふり来るは、此は今ふる雪にはあらじ、あの山の峯上に、去年の冬深く降積置たる雪が、風の吹につれて、此處に散來るにてあるらしとなり、これは實は春ふる雪をみて、去年の冬ふりおきたるゆきを、風の吹具しもて來て、此間にちらすらしといへるなり、

(右一首筑波山作)

爲君山田之澤。惠具探跡。雪消之水爾。裳裾所沾。

惠具は、芹の類なり、品物解に委註り、○歌意は、君が爲に、山田の澤に下り立て、惠具の若菜を

摘とて、雪解の水に裳裾は沾て、寒く苦しき事ぞ、君を思ふこゝろの深からずは、かくはあるまじきを、となり、

梅枝爾。鳴而移徙。翼之翼。白妙爾。沫雪曾落。

歌意かくれたるところなし、契冲云、此歌は、打きくよりおもしろきうたなり、

山高三。零來雪乎。梅花落。鳴來跡。念鶴鳴。

歌意は、山が高きゆゑに、雪のはらくとふもとにふりくるを、梅花の咲たるが風にちりくるにやと、見まがへつる哉、さても見事の雪やとなり、○舊本に一云、梅花開香裳落跡とあり、

いづれにてもよけむ、

除雪而。梅莫戀。足曳之。山片就而。家居爲流君。

除雪而は、雪をさしおきての意なり、○梅莫戀は、梅を愛ることなかれといふ意なり、戀は愛ることなり、三卷に、石竹之其花爾。毛我朝且。手取持而不戀。日將無とあるに同じ、○山片就而は、山にかたよりたるをいふ、六卷には、不知魚取海片就而とよみ、十九には、谷可多頭伎低とよめり、曾根、好忠歌には、とよまかたがけ、とよみ、源氏物語手習には、山かたがけたる家なれば、松かけしげく、風のおともいとこゝろばそきにと云り、このかたがけも、かたづくこと云に同じ、○家居爲流君は、流は行文なるべし、さらばイヘヲラスキミと訓べし、伊徹爲てふ詞

は、古今集の頃よりこなたには、常に云ことなれども、集中はさらにて、他の古書にも見えたることさらになければなり、○歌意は、山にかたよりて家居し、賜ふ君よ、雪をさしおきて、梅を愛賜ふ事なかれ、山かたよりたれば、雪には常にうとからじを、その雪は、見どころも、梅にはおとらじものをとなり、契沖、これはかへしなれば、梅の花ちりかもくるとおもふと云るは、梅を愛する心から、雪をもそれかと見て云るやうによみたれば、雪をば雪と見てめでずして、これをばおきて、なぞやかれにまがへては見ると、雪の方人する心によめりといへり、

〔右二首問答。〕

詠霞

昨日社年者極之賀春霞春日山爾速立爾來

歌意かくれたるところなし、契沖云、古今集に、きのふこそさなへとりしか、とよめる歌のこ
と葉とおなじくて、かれは時節のはやくうつるにおどろき、これは春とともに霞のはやく
たつを、よろこべるこゝろによめり、

寒過暖來良思朝鳥指澤鹿能山爾霞輕引

本、二句は、持統天皇御製に、春過而夏來良之、とあると、同じ語例なり、寒暖を、冬春といふに用
ひたること此、下にも、寒過暖來者、とあり、文選左太冲吳都賦に、露往霜來、註に、濟云、露秋也霜

冬也、とあり、此類なり、○朝鳥は、朝日なり、鳥字は金鳥の義もて書り、○歌意は、いまだ冬の節
と思ひ居しに、この朝日さす春日山に、霞の立たなびきたるを見れば、はやその冬は過て、春
來るにてあるらしとなり、六帖に、第二句、春立ぬらしとて載たり、

罵之春成良之春日山霞棚引夜目見侶

罵之春と云るは、罵の囀る春といふ意なり、白浪の濱といひて、白浪のよする濱と云意にな
ると、同例なり、このこと既に委云り、夫木集に、鶯の春になりぬと佐保道なる羽貫の山のま
づ霞みぬる、下に、宇能花乃五月乎待者、ともあり、○春成良思、成字元曆本には來と作り、さら
ばハルキタルラシとよむべし、此はいづれにても宜からむ、○夜目は、字の如し、宇津保物語
萬歳樂に、中納言なに〜ぞととひ給へば、うへのおと、夜目にもしるくぞときこえ給へ
ば云々、榮花物語つぼすみれに、御使の祿、夜目にもけさやかに見ゆる、つるの毛衣のほども
ことなり、駒くらべの行幸に、空はれ月くもりなくかやける、女房のなり袖口夜目にもし
るく、いへばおろかに、めでたうおはしましぬ、○歌意は、春日山を、晝はさらなり、夜目に見れ
ども、それと着く霞の立たなびきたるは、鶯の囀る、のどかなる春に成たるにてあるらしと
なり、

詠柳

霜干(シモカレシ)冬(フユ)柳者(ヤナギハ)見(ミ)人之(ヒトノ)繭可爲(カヅラニスベク)目生(メニウル)來(ク)鴨(カモ)。

霜干(シモカレシ)字、舊本十に誤り、は、字の如く、霜に枯ること、誰も思ふことにて、それも然ることなるべけれど、今一きは立入て考るに、霜は借字にして、凋枯(シボミカレ)の義なるべくぞ、おもひなりぬる、ホとモとは同韻にて、親通(ウチトヲス)へり、十一月を霜月(シモツキ)と云も草木の凋枯(シボミカレ)る時ゆゑ、凋月(シボツキ)といふなるべし、(霜の降月と云意と思ふは、古義にあらざ、)○見人は、良人の誤ぞといへど、猶思ふに見の下に、八字などの脱しものにやあらむ、さらば宮人の意なるべし、下に大宮人之繭有(オホミヤヒトノカヅラケル)ともよめるをおもへど、中山殿水(ナカヤマノミヅ)ひたりき、宮人は、大宮人のことなり、いはゆる宮人にかざるべからず、○目生(メニウ)は、(目は借字にて)芽生(メエ)なり、メハの切はマなるをモに轉じてモエといへり、○歌意は、冬の霜雪に凋枯(シボミカレ)て、見どころなくなりし柳は、今春を待得て、大宮人の繭に造るべく芽生(メエ)にける哉、さても麗(ウル)しの柳ぞとなり、

淺緑(アサキイドリ)染懸(シメ)有跡(アリト)見左(ミ)右(ミ)二春(ハルノ)楊者(ヤナギハ)目生(メニウ)來(ク)鴨(カモ)。

染懸(シメ)とは、染て掛乾(カケカサ)す意なり、○歌意は、薄緑(アサキイドリ)の絲を、染て掛乾(カケカサ)たるなりと、ふと見まがふまで、に、春の楊は芽生(メエ)にける哉となり、

山際(ヤマノヘ)爾(ニ)雪者(ユキハ)零管(フリツ)然爲(シカス)我一(ガニ)此河(コノカハ)楊波(ヤナギハ)毛延(モエニ)爾家(ニケル)留家(ルカ)聞(カモ)。

歌意は、山際に雪はふりつゝ、なほ寒くあれど、しかしながらに、春になりぬと知られて、この

河邊の楊は、芽生にける哉となり、

山際(ヤマノヘ)之(ノ)雪(ユキ)不消(ズル)有(アル)乎(ヤ)水飯(ミヅイ)合(ア)川(カハ)之(ノ)副者(オノゴハ)目生(メニウ)來(ク)鴨(カモ)。

水飯合(ミヅイカ)は、飯は激(イカ)字の誤ならむ、と岡部氏が云る、是はさもあるべし、但しミナギラフと訓るはわろし、霧(キリ)ふ意ならば、激(イカ)字は、遠(トホ)からむ、此はタギチアフと訓べし、一卷に、珠水激瀧(タマミヅイカ)之(ノ)宮子(ミヤコ)波(ハ)とある珠も、隕(ウツ)字の誤にて、オチタギツと訓べければ、相例すべし、なほ一卷に委(ウケ)云るを、考合(カウ)べし、さてこゝは、激(イカ)り落合(オチカ)にて、急流(イカハ)の貌をいへるなり、○川之副者(カハノオノゴハ)之(ノ)字、活字本にはなし、これによらば、者(モノ)字は、柳か楊かの誤にて、川副柳(カハノオノゴハ)ならむか、顯宗(クニノミ)天皇(ニ)紀(キ)に、笮(カ)笮(カ)沂(ヒ)比(ヒ)野(ノ)儼(ヤ)擬(ギ)とあり、現存六帖に、さ々れ浪いざ行て見む佐保道(サホミチ)なる河(カハ)そひ柳(ヤナギ)もえわたるらし、荷田(カネ)翁(ウヂ)副(オノゴハ)は楊(ヤナギ)の誤かといへり、さらばカハノヤナギハとよむべし、○歌意は、山際に降積(オシヨリ)置たる雪は、なほ消あへずして寒くあるを、さすがに春としられて、この激り落合(オチカ)河の邊の柳は、芽生(メエ)にける哉となり、これを略解に、右の歌と問答なるべしといへれど、あらじ、たゞ似たる歌なるゆゑに、並載(ナラビ)たるべし、

朝旦(アサナサ)吾(ガ)見(ミ)柳(ヤナギ)鷺(ササギ)之(ノ)來(キ)居(キ)而(シテ)應(オウ)鳴(ネ)森(モリ)爾(ニ)早(ハヤ)奈(ナ)禮(レ)。

森(モリ)は、(説文に、森、木多貌、とあり)思宜美(シヨシメ)と云むが如し、二卷に、木丘(キノサカ)開道(ヒラキミチ)乎(ヤ)とある、木丘(キノサカ)と同言にて、毛伎(モキ)毛久(モキク)毛利(モリ)毛留(モル)などは、たらく言なり、續紀(ツギキ)宣命(ノ)に、牟(ム)俱(ク)佐(サ)加(カ)爾(ニ)とある、牟(ム)俱(ク)も、是に同じ、

さてこゝは毛利と體言にいひすゑたれば、茂みと云るに同じ、源氏物語蓬生に、かたもなくあれたる家の、木立しげくもりのやうなるを過賜ふ、うつぼ物語俊蔭に、椎栗もりをはやし、たらむごとく、めぐりて生つらなれり、枕冊子に、もりは云々、かうたての森といふ、みゝと、まるこそあやしけれ、もりなどいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ、などあるもりも、みな繁茂みのことなり、夫木集に、玉はこの道のなはてのさしやなぎ早もりになれたちもやどらむ、これは全、今の歌によれり、○歌意は、朝毎に出て見る吾庭の柳よ、鶯の來り棲て、常に鳴べき茂みに急くなれとなり、

青柳之絲乃細紗春風爾不亂伊間爾令視子裳欲得

絲乃細紗は、大神眞潮翁のイトノクハシサと訓し、いとよろしき、略解に、綠乃細絲とありしを誤れるにて、ミドリノイトノと訓べし、と岡部氏の云るよし云れど、いと強解なり、細は、柳絲の麗しきを、ほめて云言なり、目細、心細の細に同じ、紗は、廣左、深左などいふ左なり、○不亂伊間爾とは、伊は助辭なり、不亂伊と屬て心御べし、用言の下に、伊の助辭をつけて云こと、續紀宣命などに例多し、七卷に向岡之若楓木下枝取花待伊間爾嘆鶴鳴とあるも、今と同じ、俗に亂れぬうちにと云むが如し、○歌意は、青柳の絲の、微く妙に麗しきも、春風の荒く吹來らば、亂れ混ぬべければ、いかでこの麗しさを、風の吹亂さぬ内には、やく見せむと思ふに、其

女もがな、こゝにあれかしとなり、

百礖城大宮人之蕪有垂柳者雖見不飽鴨

歌意は、大宮人の、蕪に造りて刺るし、だり柳、見れどあかぬ哉、さても麗しやとなり

梅花取持見者吾室前之柳乃眉師所念可聞

歌意は、旅にありて、梅花を折取れ持見れば、此ほど柳も芽生ぬらむと思へば、吾家の庭に殖る柳眉が、一すぢに戀しく思はるゝ哉となり、契沖は、わがやどの柳の眉は、妻のかほよきをおして柳眉と云り、梅をほめて、兼て梅によりておもひいづるなりといへり、こゝはさらずとも、まことの柳にてあるべし、但妻の美貌を思ひ出る意は、言外にあるべし、必比へたるものなりとせずとも、

詠花

春日在三笠乃山爾月母出奴可母佐紀山爾開有櫻之花乃可見

月母出奴可母は、いかで月も出よかしと希ふ意なり、○佐紀山は、既に一卷に委註り、○歌意は、佐紀山に咲る櫻花の夜さへ見ゆべく、三笠山にいかで月も出よかしとなり、三笠山は添上郡、佐紀山は添下郡にて、間近ければ、かくよめり、
盟之木傳梅乃移者櫻花之時片設奴

時片設奴は、契沖、櫻のうつろふころ、櫻はさきそむれば、時片まけぬといへり、時をまうけ得るなり、さかりにはならねば、片設といへり、今按に片設は、片附設るよしなり、片は、夕片、設山片附なども多く云る如く、中間を過て、其方に偏倚ることなり、○歌意かくれたるところなし、

櫻花時者雖不過見人之戀盛常今之將落

歌意は、櫻花の盛の時の過たるにはあらねど、人の賞愛るさかりをすぐしやりなば、又人をしてしまるゝこともあらじ、今は見はやす人々に、愛らるゝ盛りなればとてや、今かくちるらむとなり、古今集に、いざ櫻われもちりなむ一盛ありなば人にうき目見えなむ、

我刺柳絲乎吹亂風爾加妹之梅乃散覽

我刺は、契沖は、我頭刺と有けむ、頭字の脱たるか、例みなしかり、さらば、ワガサセルと訓べしと云り、九卷に、妹手取而引與治採手折君刺可花開鴨とあれば、なほもとのまゝなるべし、刺は、もとより頭刺事なり、○妹之梅とは、妹之家之梅と云が如し、○歌意かくれたるところなし、

毎年梅者開友空蟬之世人君羊蹄春無有來

毎年は、十九自註に、毎年謂之等之乃波とあり、○君羊蹄は、君は吾字の誤なり、といへる説に

よるべし、アレシと訓べし、羊蹄はシの假字なり、シは、例のその一すぢなることをいふ助辭なり、○春無有來は、伊勢物語に、君がやどには春なかるらむとあるを、思合べし、○歌意は、年ごとに、色もかはらず梅は咲ども、世の事業にかゝづらひて、暇なき吾身には、春の和かなる心もなかりけりとなり、

打細爾鳥者雖不喫繩延守卷欲寸梅花鴨

打細爾は、やがて打つけにの意なり、○四卷に出て、既く委いへり、こゝは打つけに、他事なく物する謂なり、○歌意は、時としては、葎蕊の甘味を來り吸喫事もこそあれ、打つけに他事なく來て、常にさらず鳥の喫事は無れども、標繩引延て、いつも目を離たず、守らまほしき梅の花にてある哉、さても見ても見足ぬ花ぞとなり、

馬並而高山部乎白妙丹令艷色有者梅花鴨

馬並而は、本居氏、馬は忍、字の誤なるべし、オシナベテとよむべし、といへり、○梅は岡部氏、櫻を誤れりといひ、梅は後に異國より來し花にて、村里にこそ多けれ、高山に有ものにあらず、といへり、○歌意は、此方の高山をも、彼方の高山をも推なべてのこさず、白たへの布引延たることく、眞白に艶々と見せたるは、櫻花にてある歟、さても見事に咲たる花の盛にてあるぞとなり、

花^{ハナ}咲^{サキ}而^{シテ}實^ミ者^ハ不^ナ成^セ登^ト裳^モ。長^{ナガ}氣^キ所^ノ念^ネ鴨^{カモ}。山^{ヤマ}振^{アツ}之^ノ花^{ハナ}。

長氣は、長き來經の約れる言にて、長き月日にと云が如し、○歌意は、花は既に咲たれど、未實はならず、されど未花の咲ざりし前より、此山振をなつかしく思入たれば、つひに實になる時を待て取むと、月日長く戀しく思はる、哉、といふにや、略解云、按に此歌、女のうけひきて、いまだ逢ぬをそへたる譬喩歌なるが、まぎれて入たるなるべし、

能^ノ登^ト河^{カハ}之^ノ水^{ミヅ}底^{ソコ}并^ニ爾^ニ光^{ヒカル}及^ツ爾^ニ。三^ミ笠^{カサ}之^ノ山^{ヤマ}者^ハ咲^{サキ}來^キ鴨^{カモ}。

能登河は、大和國添上郡にて、高圓三笠の二山の間を、西へ流るゝとぞ、○咲來鴨は、櫻なるべし、○歌意は、能登河の川面はさらにもいはず、水底までが、ひかりわたるまでに、三笠山の櫻は咲にける哉、さても見事の花盛や、となり、

見^ミ雪^{ユキ}者^ハ未^ミ冬^{フユ}有^リ然^シ爲^ス蟹^{ガニ}春^{ハル}霞^{カスミ}立^{タチ}梅^{ウメ}者^ハ散^{チリ}乍^ツ。

歌意は、この雪のふるを見れば、未冬のけしきなり、しかしながらに、霞の立わたりて、梅の花は散つゝ、春の節になりぬるさまの、かつはしるくてあり、となり、

去^ク年^{ツキ}咲^{サキ}之^ノ久^{キウ}木^キ今^{イマ}開^ク徒^タ土^{ツチ}哉^ヤ將^{マシム}墮^ツ見^ミ人^{ヒト}名^ナ四^シ一^ニ。

之久木は、略解に、久木は冬木の誤にて、フユキなるべしと云れど、謂なし、岡部氏は、之は左木は樂の誤にて、左久樂とありけむか、さらば、コゾサケルサク。ライマサクとよむべし、と云り、

今按に、之は上に屬べし、久木は、足氷の誤にてもあらむか、久足草書混ぬべし、木と氷と、もとより似たり、されば、馬酔木の借字とすべし、枕詞のあしひきをも、足氷木と書る所もあり、考合べし、○歌意は、去年、春咲し、馬酔木の花の盛に咲たるを、いかで心あらむ人に、今の間に見せたくは、思へども、さる人もなければ、いたづらに地に散て失なむか、となり、

足^{アシ}日^ヒ木^キ之^ノ山^{ヤマ}間^{カミ}照^{テラス}櫻^{サクラ}花^{ハナ}是^{コノ}春^{ハル}雨^{アメ}爾^ニ散^{チリ}去^ク鴨^{カモ}。

山間照は、ヤマカヒテラスと訓べし、ヤマノマと訓はひがことなり、ヤマノマならば、山際と書例なり、十七に、夜麻可比爾、佐家流、佐久良乎多、太比等、米伎美爾、彌西底、婆奈爾乎可於母波、とあるに同じ、山間は、山と山との間を云、山の峽ともいへるに同じ事なり、○散去鴨は、去の下に、來の字の脱たるか、さらばチリニケルカモとよむべし、○歌意は、山の峽を照して、盛に咲るさくらばなよ、見るほどもなくて、この春雨に散にける哉、さても惜ことぞ、となり、

打^{ウチ}靡^{ナヒク}春^{ハル}避^{サリ}來^キ之^ノ山^{ヤマ}際^{サヘ}最^{モト}木^キ末^ノ之^ノ咲^{サキ}往^{ユク}見^ミ者^ハ。

最木末は、トホキコソレとよみたるは、げにさもあらむ、○歌意は、遠山の梢の花の、日にそひて咲往を見れば、今はのどかなる春になるらし、となり、

春^{ハル}鳩^{トビ}鳴^{ナク}高^{タカ}圓^{マド}邊^ヘ丹^ニ櫻^{サクラ}花^{ハナ}散^{チリ}流^リ歷^レ見^ミ人^{ヒト}毛^モ我^ガ裳^モ。

散流歷は、チリテナガルを延云るにて、散事の緩なるさまなり、流は即落さまを云り、○歌意

は、春雉の鳴て面白き此、高圓山の邊に、さくら花のはらくと散飛けしきを、おはれ心ありて、見はやす人もがなわれかし、となり、

阿保山之佐宿木花者。今日毛鴨散亂見人無二。

阿保山は、谷川、士清、阿保山は、大和國高市郡にありて、今阿部山といへり、と云り、此説はいかがあらむ、頼朝陸奥へ下向の時従へる人に、阿保、次郎實光あり、もしは此地より出し人か、大神、眞潮翁説に、阿は佐の誤にて、佐保山なるべしと云る、さもあらむ、略解に、阿保山は、山城にも、伊賀にも在、といへれど、此前後國々の歌はなくして、大和の地名のみよみたれば、他國にはあらじかし、○佐宿木は、作樂の誤とする説やしからむ、又按に、宿木は、冥之の誤か、さらば、佐冥之なり、又宿は、空か宮の誤、木は樂の誤にて、佐空樂か、猶考べし、○歌意は、佐保山の櫻花は、行て見はやす人なしに、今日このごろ、いたづらに散亂るらむか、となり、

川津鳴吉野河之瀧上之馬酔之花曾置末勿勤。

馬酔之花曾、本居氏曾の詞聞えず、曾は者の誤なるべし、と云り、信にさもあるべし、アシビノハナハとよむべし、○置末勿勤は、大神、眞潮翁説に、末は土の誤なり、ツチニオクナユメと訓べしと云り、是よろし、又六帖に、此歌の末句を、おせみのはなぞ手なふれそゆめ、とあれば、置末勿末勤は、手勿觸勤とありしを、誤れるかともおもふべけれど、非ず、さるは勿云々曾と云

て、勤といへる例なし、云々勿といひて、勤といふ例なればなり、○歌意は、吉野河の瀧上の馬酔木の花は、ゆめく散て土に置な、いつまでもかくて梢にわれ、といふなるべし、

春雨爾相争不勝而吾屋前之櫻花者開始爾家里。

歌意は、雨にはいたみやすければ、いな咲出じとあらそひたれど、春雨にあらそひ勝ことを得ずして、櫻花は咲始にけり、いかで雨にいたまざるがなわれかし、心がよりなることぞ、となり、

春雨者甚勿零櫻花未見爾散卷惜裳。

歌意は、櫻花をいまだ行て見ぬうちに、はや散失む事のさてもをしや、いかでこの春雨は、さばかりいみじうつよく降ことなかれ、かやうにつよく降ては、得散ずにはあらじと思ふぞ、となり、(新古今集に、末句を、まだみぬ人にちらまくもをし、と載たるは誤なり、)

春去者散卷惜櫻花片時者不咲含而毛欲得。

櫻一本に梅と作り、○歌意は、春になりて咲といなや、はや散失む事の惜く思はる、櫻花よ、しばしの間は、なほ咲出ずにふくみてもがなわれかし、となり、

見渡者春日之野邊爾霞立開艶者櫻花鴨。

歌意かくれたるところなし、

何時鴨此夜之將明鷺之木傳落梅花將見

歌意は、いつしか此夜の明む、さてもいかに急く明よかし、さらば鷺の木傳ちらす、梅花のけしきを見むに、となり、三卷長歌に、何時鴨此夜乃將明跡侍從爾云々、十九に、袖垂而伊射吾苑、爾鷺乃木傳令落梅花見爾皆思合べし、

詠月

春霞田菜引今日之暮三伏一向夜不穢照良武高松之野爾

暮三伏一向夜は、暮月夜なり、夕月と云に同じ、三伏一向とかけること、詳なる説なし、東齋隨筆に、嵯峨帝御時、無惡善とかけける落書有けり、野相公に見せらるゝに、さがなくてよけむとよめり、惡はさがとよむゆゑなり、御門御氣色あしくて、さては臣が所爲かと仰られければ、かやらの御疑侍らむには、智臣朝にすゝみがたくやと申ければ、一伏三仰不來人待書暗雨降戀筒寢と、かゝせ給ひて、是をよめとて給はせけり、月夜には來ぬ人またるかきくもり雨もふらなむ戀つゝもねむとよめりければ、御氣色直りにけりとなむ、落書はよむ所にとがありと云ことは、これより初るとかや、わらべのうつむきざいと云物、一ふして三あふげるを、月夜と云なり、と云り、此事十訓抄にも見えたり、今つらく、按に、此の説は、かたぐまがひたるものならむ、さるは今の歌をもて考るに、三伏一仰とこそあるべきを、おほしたがは

せて、一伏三仰とかゝせ給へるものか、また一ふして三あふげるを、月夜と云よしあるも疑はし、但、一伏三仰とあるは、もとよりたがへることにて、其を三伏一仰と正して、三たび伏て一たび仰ぐものを、月夜といひしとせむに、もしさる物を、やがて月夜といひしならむには、今の歌暮三伏一向にて、ユフヅクヨと訓るゝことなれば、夜字は無用に餘れり、されば思ふに、古の少童の玩具に、都久と名づけしものありしにて、その都久と云物は、三たびころび伏て、一たび仰ぐものにこそありけり、今世小兒の玩具に、起あがりこぶしといふものなどの類なり、さる故に、都久と云に、三伏一向とかき、夜字をば別に添て、ツクヨとは訓せたるなるべし、さてその少童の玩具に、三たびころびふして、一たび仰ぐものを、都久とはいかで名づけむ、其はなほよく考べし、さて又その類の玩具に、許呂と呼るものもありしならむ、其は一たびふして、三たび仰ぐものにこそありけり、さるは十二に、末中一伏三起と見え、十三に、根毛一伏三向とあるなどにて、さ思はるゝなり、蓋囊抄小兒の玩物を多く擧たる中に、肚と云もの見えたり、この肚といふもの、一たび伏て三たび仰ぐものにてありつらむ、さて其を許呂と名づけし縁は、轉すものなる謂にて、もあらむ、此はこゝに用なけれど、三伏一向夜とかけるよしをことわれる因に、かつぐいへるなり、なほ後にもいふべし、○不穢は、穢は淨の反對なれば、義を得てキヨクとよませたり、○高松は、タカマトとよむべし、松は言を轉し

て、借用る例なり、高圓タカマなり、○歌の意は、霞の立たなびきたる夕の月なれば、朦朧オホロなるを、打晴たる高圓の野の高き地は、物にさへらるゝことなれば、なほかゝる夕も、きよく明らかに照らむ、と想ひやれるなるべし、

春去者木陰多暮月夜鬱束無裳山陰爾指天。

第二三句、舊本には紀之許能暮之夕月夜とあり、木之木暗之と云なるべし、今は一云、春去者木陰多暮月夜とあるを用ふ、陰は隱の誤なり、○鬱束無裳は、朦朧なるを云、裳は、歎息、辭なり、○山陰爾指天は、三卷に、吉野爾有夏實之河乃川余杼爾鴨會鳴成山陰爾之氏、今の歌終、句を六帖に、花陰にしてとあるはいかゞ、○歌意は、つねだに夕月は、十五夜月などの如くに、明ならぬを、まして春になりて、枝葉繁く萌出て、木陰多き山陰にして、霞は深く、いとゞおほしく朦朧なる夕月哉、となり、古今集に、夕月夜おぼつかなきを玉くしげ二見のうらはわけてこそみめ、

朝霞春日之晚者從木間移歷月乎何時可將待。

本一二句、解え難し、契沖、朝霞のたつ春の日、といへるか、朝霞のはるゝ、とつゞくる心か、はる日の晩者は、くれたらばなり、と云り、いかゞ、本居氏は、一二句は春日の朝に霞みてくらきを云、くれの詞は、このくれなど云に同じ、さて其朝霞のくらき時分はと云なり、朝霞のくらき

時分より、夜までのまち久しきよしなり、と云れど、穩ならず、もしは朝より霞の立覆ひて、春日の光の暗き時節なれば、まして夜になりなば、いよゝゝくらかるべし、たとひ月出ても、月の光のおぼろにて、きよく照べきならねば、その月のうつろふ影を、いつとか待べきといふにや、猶考べし、但し春日の枕詞に、春霞とおけること、三卷にも此上にも見えたり、此等を合思ふに、もしは此歌も、初句は枕詞にて、朝霞春日云々とつゞきたる歌なりけむを、とかく混れたるものならむも知べからず、末句六帖には、いざよふ月をいつしかも見む、とて載たり、

詠雨 春之雨爾有來物乎立隱妹之家道爾此日晚都。

妹之家道は、妹が家に行道なり、妹家にはあらず、○歌意は、春のならひの雨にて、つれづれとをやみなく降長雨なるものを、それに心のつかずして、降止たらば、その雨間に、妹が家に至らむと、妹が家に行道に雨やどりして、いたづらに此、日を晩しつる、となり、契沖、春の雨に有けるものをとは、はかゞしくもふらぬを、雨やどりをして暮せしとなり、と云るはいかゞ、

詠河

今往而聳物爾毛我明日香川春雨零而瀧湍湍音乎。

聳は、聞の異字なり、○歌意は、春雨に明日香川の水益りて、激り行湍、音の潔さを、今急く行て

聞べき暇もがなわれかし、と云なるべし、

詠煙

春日野爾煙立所見憾孀等四春野之菟芽子採而煮良思文。

菟芽子は若菜の名なり品物解に委いへり○歌意かくれたるところなし、

野遊

春日野之淺茅之上爾念共遊今日忘目八方。

淺茅之上爾七卷に家爾之氏吾者將戀名印南野乃淺茅之上爾照之月夜乎ともあり○遊今日はアソブコノヒノと訓べしアソベルケフハと訓はよろしからず○歌意は心のあへる友人共春日野の淺茅がうへに群居て遊ぶ今日の面白さの得忘れられむやはいつまでも得忘れじとなり、

春霞立春日野乎往還吾者相見彌年之黄土。

往還は往つ來つ幾回も度重ぬるよしなり○相見は思ふ友人共と共に見むとなり○歌意かくれたるところなし、

春野爾意述將跡念共來之今日者不晚毛荒粳。

意將述跡は十九に許己呂能宇知乎思延又振放見都念暢見奈疑之山爾云々又古今集長歌

にいかにして念ふ心をのばへましなどあるによらば、コ、ロノベムトと訓べし、但三卷に酒飲而情乎遣爾十一に戀事心追不得又意追(この二の追は遣の誤ならむ)十二に意遣十七に於毛布度知許己呂也良武等十九に見明良米情也良牟等などあるうへ、こゝも舊訓には、コ、ロヤラムトとあれば、述は遣の誤にてもあらむか(略解にも遣ならむといへり)○今日をケフノヒ明日をアスノヒなど云は古言なり集中に多し伊勢物語にもをしめども春のかぎりのけふの日の夕ぐれにさへ成にけるかなとあり○荒粳は有かしと希ふ意なり粳は、ヌカの借字なり四卷に人毛無國母有粳とかけり續紀に粳虫字鏡にも、稅俗作粳、奴可と見えたり(粳は糠の誤とするは、中々に非なり)○歌意は春の野に遊びて、いふせきこゝろをやり失はむとて、心のあふ友人共さそひつれて出て來し今日は、いかで晚ずもがなわれかし、となり、

百礮城之大宮人者暇有也梅乎挿頭而此間集有。

暇有也は暇あればにやの意なり○歌意かくれたるところなし、後世此歌の末句を、櫻かざして今日も暮しつとして、赤人の歌とせり、

歎舊

寒過暖來者年月者雖新有人者舊去。

雖新有は、アラタマレドモとよむべし、古今集に、百千鳥さへづる春は物毎にあらたまれどもわれはふりゆく、とあり、○歌意かくれたるところなし、
物皆者新吉唯人者舊之應宜

新吉は、アラタシキヨシと訓べし、新を、アタラシキといふは非なり、アラタは新字の意、アラは惜字の意にて、もとより別言なるを、言の似たるより混ひて、新をも惜をも、アタラといふことゝなれるは、後のことなり、この事は、はやくいへり、吉は字義の如し、縦といふにはあらず、○舊之は、舊本にフリヌルノミツと訓るによりて思ふに、之は耳の誤なるべし、○歌意かくれたるところなし、契沖云、尙書盤庚上曰、遲任有言、人惟求舊器、非求舊惟新、とあり、此心にて、此歌はよめるか、おのづからかなへるか、又云、次上の歌の作者、二首にてこゝろを足すゆゑに、此歌に春はなければ、春の歌とせり、按に、尙書に云る謂は、人は多くの年を経て、さまたまの理に習たる故に、老人を求め、器は年ふりたるは、敝れやすきによりて、新を求むと云るなりと、説るによれば、此歌の意にかなひたれば、實にかのからぶみを思ひて、よめるにもあるべし、但彼に求舊と云るは、老人の謂にあらざ、世臣舊家の人をいふなり、といへる説の如きは、とらざりしなるべし、

懽逢

住吉之里得之鹿齒、春花乃益希見、君相有香聞。

里得之鹿齒、岡部氏得は行の草書を短く書しより、得に誤しなるべし、さればサトユキシカバと訓べし、といへり、○春花乃は、賞愛の枕詞なり、○益希見は、三卷人麻呂の長皇子に奉られたる歌に、春草益目頼四寸、吾於富吉美可聞とあり、○歌意は、住吉の里を行たりしかば、思はずも賞愛しき君に行遇たる哉、と深く懽びたるなり、

譬諭歌

吾屋前之毛桃之下、爾月夜指下、心吉菟楯頰者。

下心吉は、本居氏吉は誤字にて苦なるべし、本の句は、下をいはむ爲の序のみなり、さて下心苦は、シタナヤマシモ、又シタニソナケク、などもよまむか、といへり、○菟楯は、借字にて轉なり、本居氏、宇多豆は、本よりあることの愈進て、殊に甚しくなるをいふ言なり、古事記、須佐之男命の悪行を爲給ふ所に、猶其惡態不止而轉云々、此集十一に、若月清不見雲隱見、欲宇多手比日、十二に、何時奈毛不戀有登者、雖不有得田直比來戀之、繁母、廿卷に、秋等伊弊婆許己、呂曾伊多伎宇多豆家爾花爾奈蘇倍豆見麻久保里香聞、又源氏物語葵上卷に、紫上の髪のことを、うたて所せらもあるかな、いかにおひやらむとすらむと云、同卷に、年ころあはれと思ひきこえつるは、かたはしにもあらざりけり、人の心こそ、うたてあるものはあれ云々、此等にて

心得べし、さて古事記穴穂朝段に、宇多互物云王子書紀に、武烈天皇御所行を言所に、設奇偉之戲などあるは、右の意よりうつりて、平穩に尋常ならで、奇僻く善からぬ意ときこゆ、といへり、なほ古事記傳に委見ゆ、○歌意は、本句は序にて、本より惱ましき心の愈進みて、殊に甚しく、このごろは下心の、さても苦く惱ましや、と云なるべし、

春相聞

これは、以下凡四十七首歌の總標なり、

相聞

此二字、舊本にはなし、目錄にはかくあり、總標に春相聞とあるは、をはりの問答十一首までの總標なれば、今の七首の題詞別に擧ずしては足はぬことなり、

春日野犬罵鳴別眷益問思御吾

犬罵は、犬は哭の誤にて、ナクウダヒスノなるべし、と或人云り、いとよろし、岡部氏が、犬は去の誤にて、イヌルならむと云るは、あらず、又略解に、犬は友の誤にて、カスガノ、トモウダヒスノならむと云るは、いみじきひがことなり、さて本二句は、鳴別を云む料のみなり、○鳴別は、夫婦泣つゝ相別るゝ意なり、○思御吾は、オモホセアレヲと訓べし、思御は、御思とありしを顛倒たるか、○歌意は、相共に泣別れ起出で、夫君の還ります道の間にも、吾思まゐらす

ごとく、いかでわれをも、あはれと思ほしめせ、といふか、

冬隱春開花手折以千遍限戀渡鳴

手折以は、タヲリモチと訓べし、モチといふは、わろし、既くいへり、○千遍限は、千遍までと云むが如し、實は、際カサの知れぬを云、○歌意は、咲花を折持て、或は女に見せたく思ひ、或は共に頭刺したく思ひなどして、際しられず戀しく思ひて、月日を送る哉、となり、花に感て戀情を催すなり、

春山霧惑在盟我益物念哉

歌意は、春山の霧にまどへるうぐひすは、いふせくあるらめども、戀ぢになよへるわれになさりて、物思をすべしやは、となり、朗詠集に、咽霧山罵啼猶少、

出見向崗本繁開在花不成不止

開在花は、本居氏、花は桃、字の誤なり、七卷には、しきやし吾家の毛桃本繁花のみ開てならざらめやも、十一に、やまとの室原の毛桃本繁いひてしものをならずはやまじと云るに、大方同じと云り、略解云、濱臣云、在は毛の誤なるべし、と云り、此に従べし、○不成不止は、實に成ずばやまじの意にて、思ひの成就するをたとへたり、○歌意第四句までは、成をいはむ料の序にて、思立たる心の成就ずしては、いつまでも思止らじ、となり、

霞發春永日戀暮夜深去妹相鴨

春永日は、按に、春永の二字、下上にいりまがひたるにて、永春日とありしなるべし、一卷に、霧立長春日乃晚家流云々、とあるをも考合べし、○歌意かくれたるところなし、

春去先三枝幸命在後相莫戀吾妹

先三枝乃、春になればまづ花の咲三枝と云意に、つゞけなしたり、されば先咲三枝といはでは、言足はぬごとくなれど、かくざまに用言を省きて、其意を帶せたる一格なり、されば吾通ふ通路といふべきを、七卷に、妹所等我通路細竹爲酢寸とよみ、吾夫子が使來むかとお立つ、出立の松原といふべきを、九卷に、我背兒我使將來歟跡出立之此松原乎とよみたる、みな同格なり、十八に、毛能乃布能八十伴雄乎麻都呂倍乃牟氣乃麻爾麻爾とあるも、服従はしむる、麻都呂敵の令趣のまに、の意を省きて云、廿卷に、伊佐美多流多氣吉軍卒等禰疑多麻比麻氣乃麻爾麻爾とあるも、勞たまひ任たまふ、任のまに、の意を省きて云、續紀十七詔に、皇親神魯伎神魯美命以吾孫乃命將知食國天下止言依奉乃隨とあるも、言依しまつりし、言依奉のまに、と云意を省きいへるにて、同例なり、三枝のことは、品物解に委云り、さてこれまでは、幸を云む料の序のみなり、○歌意かくれなし、

春去爲垂柳十緒妹心乘在鴨

爲垂柳は、シ。ダ。ル。ヤ。ナ。ギ。ノ。と訓べし、春になれば、しだる、柳のと云意なり、○十緒は、契沖とを、は、たわ、なり、登と多と五音相通なり、袁と和ともおなじ、わが心の妹が心の上のなること、かたちあるものならば、たわむばかりなれば、しだり柳の風にあひて、たわむによせてかくはよめり、と云り、今按に、わが心の妹が心の上のると云ること、すこしいかゝなり、妹がわが心の上にかびのる意にこそあれ、此は集中に多くいへり、既に二卷に委云り、なほ次にも云べし、○乗在鴨は、ノリニケルカモと訓べし、在字ケルと訓例、既に委云り、○歌意は、妹が容儀の常に吾心の上にかびて、わが心のたわ、と、たわみなびくばかりに、おもはる、哉、となり、二卷に、東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乘爾家留香聞、

〔右七首、柿本朝臣人麿歌集出〕

七首の二字、舊本には脱たり、○右相聞七首、人麻呂歌集の書體なり、

寄鳥

春之在者伯勞鳥之草具吉雖不見吾者見將遣君之當婆

伯勞鳥之草具吉は、顯昭袖中抄にもずの草ぐきとは、もずの草く、り、と云なり、考萬葉歌、あしひきの山邊にをればほと、ぎすこのまたちぐきな、ぬ日はなし、又同集第八に、あしひきのこのまたちぐ、ほと、ぎすかくき、そめてのちこひむかも、又第十九、長歌に、はるば

るになくほと、ぎすたちぐ、とはふれにちらすふぢなみのはななつかしみ云々、又同集云、やまふきのしげみとびぐ、うぐひすのこゑをきくらむ君はともしも、などありて、く、は、く、ること、聞えたり、と云り、其義なり、かゝるを中昔にもずの草ぐきと云歌につきて、あらぬ説どもを作り出て、世の人どものまよはざりしはすくなし、ひとり顯昭ぞ、古をよく考へてまよはざりける、(頭註、千載集、頼めこし野べの道芝夏ふき)久吉と云詞、なほ古くは古事記に、伊邪那岐命の加具土神を斬給ふ所に、集、御刀之手上、血自手、侯漏出、また大穴牟遲神の事を、自木、侯漏逃而去、また少毘古那神の事を、御祖命の、自我手、侯久伎斯子也、とも給へり、十四に、伊毛我奴流等、許乃安多理爾、伊波具久流水都爾、母我母與、とも見えたり、(本居氏、久具流と云は、此、久々を延たるなり、然らば伎を濁るべくもあれど、此、清音なり、集中清字をのみかきたり、と云り、今云、久々流は、久々を延たるなりと云こと、少しまぎらはしきにや、其は久流は、久と約る故に云るか、この久々流の流は、等與牟を等與牟流、志奴布を志奴布流などいふ流と、同例なり)さてもずの草の間をくゝるは、見えぬものなれば、雖不所見と云む料に、本二句は設たるなり、○吾者見將遣は、欽明天皇紀に、聘望をミヤルとよめり、熱田宮縁起歌に、奈留美良乎美也、禮波止保志比多加知爾己乃由布志保爾和多良部牟加毛、などあり、○歌意は、君が家の當の遠くて、たとひ見えずとも吾は見やらむぞ、と云なるべし、

容鳥之間無數鳴春野之草根之繁戀毛爲鳴

容鳥之云々は三卷に、容鳥能間無數鳴雲居奈須心射左欲比其鳥乃片戀耳爾、とよめり、さてこの歌本句は繁を云む料のみにて、容鳥に用はなし、(契沖が此、上に朝井でにきなくかほとりなれだにも君にこふれや時をへずなく、とよめれば、上の句は、わがかた戀になく、たとへたり、と云るは、あらず)○歌意は、さても重ねく、に繁くも戀しく思はる、事哉、となり、

寄花

春去者宇乃花具多思吾越之妹我垣間者荒來鴨

宇乃花具多思は、十九に、宇乃花乎令腐霖雨之始水逝、とよめり、さて右の十九なるは、五月の歌なれば、その頃の霖雨には、まことに卯花もくつべきを、こゝに春去ばとて、卯花をよめることを、人々いふかり思ふことなるに、本居氏、四月ごろまでも、大やうに春といふは古意なり、春さればきのこのくれなどいふも、四五月頃を云り、三月までは、さまで木はしげらず、もはらしげるは、四五月なり、と云り、(源氏物語若菜、上に、この秋の行幸の後とあるも、十月の行幸を、大やうに秋といへるなり、考合べし)○歌意は、わがしたしく通ひなれて、常に越て來し妹が家の垣間は、此ころわが遠ざかりて來ざりしかば、たゞさへあるに、卯花を雨に腐らし、など、いやましにわれまされるかな、と云か、三四一二五、と句を次第てきくべし、

梅花。咲散苑爾。吾將去。君之使乎。片待香花光。

片待香花光。花は行文なり。カタマチガテリ。なり。片待は、片懸待意なり。○歌意は、君が使を、片

藤浪。咲春野爾。蔓葛。下夜之戀者。久雲在。

本句は、下を云む料の序なり。葛は、木の下などに蔓ものなれば、蔓葛の下とつゞけたり。○下夜之戀者は、シタヨシコヒバと訓べし。夜は從の意なり。又從、字の誤にてもあるべし。之は、その一すぢなることを、おもく思はする助辭なり。○久雲在は、ヒサシクモアラムと訓べし。略解に、久は乏の誤にて、トモシクモアラムなるべしと云るは、太じきひがことなり。○歌意は、下に忍びて戀しく思ひつゝ、あらば、久しく逢ことのなき事もあらむ、いで今は色に出てこひむぞ、といへるなるべし。

春野爾。霞棚引。咲花之。如是成二手爾。不逢君可母。

如是成二手爾は、契冲云、かく實になるまでになり。○歌意、かくれたるところなし。

吾瀨子爾。吾戀良久者。奥山之馬。醉花之。今盛有。

第三四句は、句中の序なり。○歌意は、八卷に、茅花拔淺茅之原。乃都保須美禮。今盛有。吾戀苦波とあるに同じ。

梅花。四垂柳爾。折雜花。爾供養者。君爾相可毛。

花爾供養者は、或説に、花は神の誤なり、といへり。これによるべし。カミニタムケバと訓べし。○歌意は、梅と柳を折雜て、神にさげまつりて、ねもころに祈り申さば、君にあふ事のあらむか、さても戀しく思はるゝ事ぞ、となり。

姫部思。咲野爾。生白管。自不知事。以所言之。吾背。

姫部思は、咲とかゝれる枕詞なり。○咲野は、大和の佐紀野にて、はやく往々見えたり。○白管自は、白脚躑にて、不知を云むための序なり。○歌意は、契冲が、あふこともなきを、はやあひみたるやうに、世にいはれしと云て、わがせ、これをきゝ給へ、君故にこそ、かゝるうきことにはあへれ、と告てうれふるなり、いはれしと切て心得べし、と云り、其意なり、吾背は、吾背よといふほどのこゝろなり、心に知ず覺えのなき事によりて、とかく人にいひさわがれし、いで吾夫よ、となり、按に、上に曾乃也何等の言なければ、所言寸といふこと常格なるを、此歌は、偏格に所言之といひたるか、又は寸吉等の字なりしを、寫誤りて之と作るものか、十六に、家爾有之櫃爾。鏢刺藏而師とある歌も、上に曾乃也何等の言なければ、藏而寸といふこと常格なるを、偏格に而師といひたるか、もしは寸伎等の字なりしを、師の草書より誤れるものにもあらむか、なは余が歌詞三格例を披見て考べし。

梅花吾者不令落青丹吉平城之人來管見之根。

平城之人は之は在の誤なりと云るに由るべし。ナラナルヒトノとよむべし。○見之根は、見がためにと云意なり。既く委云り。○歌意かくれたるところなし。

如是有者何如殖兼山振乃止時裳哭戀良苦念者。

如是有者は義を得てコトナラバと訓べし。許等といふ言の義は、既七下に、委説り。古今集にかきくらしことはふらなむ春雨にぬれ衣きせて君をとめむ。後撰集に、ことならば折つくしてむ梅花吾待人の來ても見なくに、大和物語に、ことならばはれずもあらなむあき霧のまぎれに見えぬ君と思はむ。源氏物語帯木になよびかに女しと見れば、あまりなさけに引こめられて、とりなせばあだめく、是をはじめの難とすべし。ことが中に、なめなるまじき人のうしろみのかたは、ものゝあはれしり過し、はかなきついでのならあり云々、とある。ことが中にも、如之中にて、如此中にと云意なり。常に某の期等と期を濁りて唱ふるは、上より連ぬいふ言便にて、本は清音の言なれば、許等云々と初にいふときは、清て唱ふること勿論なり。○山振乃云々は、山と云をうけて、止時と云り。○歌意は、かねて見せむと深く思入し人の、花の咲る時に見にも來ずして、かやうに止ときもなく、ひたすら其人を戀しく思はるゝことをおもへば、この山振は、なにしにうゑけむ、中々に殖ざらましかば、かくのごとく

物念ひはすまじきものとなり。古今集に、やまふきはあやななさきそ花みむとうゑけむ君がこよひこなくに、とあるは、人の植しをいひ、今の歌は自ら植しなり。

寄霜

春去者水草之上爾置霜之消乍毛我者戀度鴨。

水草は、字の如く、水に生たる草なり。契沖が、水草とかきたれども、眞草なりといへるは、おしあてなり。○歌意は、本句は序にて、魂も消失るばかりに思ひつゝ、さても苦しき事とは知らず、ながらも、止ことを得ずして、戀しく思ひつゝ、長き月日を送る事哉、となり。

寄霞

春霞山棚引鬱妹乎相見後戀毛。

第一二句霞山は下上に誤れるにて、春山霞棚引とありしなるべし、と中山嚴水云り、信にさもあるべし。○歌意、本句は序にて、親く相見たらば、さもあるべき事なるを、たゞはつゝおほろにのみ妹を相見て、この後さても見たしや逢たしや、と久しく戀しく思はむか、となり。

春霞立爾之日從至今日吾戀不止片念爾指天。

終句、舊本に本之繁家波とありて、一云片念爾指天、と註せり、今は一云とあるに従り、指天は、其事をうけはりて、他事なく物するときにいふ詞なり。○歌意は、春霞の立始し日より、今日

まで久しき間、他事なく片思に戀しく思ふ心は、しばしもやまずとなり、
左丹頰經、妹乎念登霞立春日毛晚爾戀度可母。

春日毛晚爾は、本居氏、齊明天皇紀、歌に、于之盧母俱例尼、飲岐底舸庚舸武、と有俱例に同じく、
心のはれぬことなり、といへり、○歌意は、紅顔のうるはしき妹を戀しく思ふとて、くれぐれと心もくらみて、のどかなる長き春日をも、いたづらに暮しつゝ、時をおくる事哉、となり、(六帖には、うつくしき人を思ふとて載たり)

靈寸春吾山之於爾立霞雖立雖座君之隨意。

靈寸春は、枕詞なるべし、吾山とつゞきたる意は、未考得ず、○吾山は、本居氏は、吾は春の誤ならむ、と云り、さても枕詞よりのつゞきの意は、解えがたし、○雖立雖座は、タツトモウトモとよめるよろし、崇神天皇紀に、急居此云菟岐子、とあればなり、居は、爲宇惠と活く言なればなり、○歌意、本句は序にて、立居起臥をいはず、とにもかくにも、君が心まかせにせむとなり、見渡者春日之野邊爾立霞見卷之欲君之容儀香。

歌意、本句は、霞の立るけしきの見まほしき、とつゞきたる序にて、かくれたるところなし、戀乍毛今日者暮都霞立明日之春日乎如何將晚。

歌意は、戀しく思ひながらにも、とかくして今日はくらしつるを、又明日の長き春日を、いかにしてくらしむ、となり、(六帖には、第三句、あかねさすとあり)

寄雨

吾背子爾戀而爲便莫春雨之零別不知出而來可聞。

背は、妹の誤なるべし、と云る説によるべし、○戀而爲便莫は、あまりに戀しく思ひて、せむすべのなき故にの意なり、○零別不知は、雨のふるふらぬと云差別も知ず、心そらにて、と云なるべし、○歌意は、あまり妹を戀しく思ふ心に堪かねて、すべなさに、春雨のふるふらぬのわきをもしらず、家をいでて妹許來し哉、嗚呼、さても辛勞しや、となり、(六帖に、第四句を、踏分しらでとせるは、甚く誤れり)

今更君者伊不往春雨之情乎人之不知有名國。

君者伊不往は、君は吾字の誤なり、と云説によるべし、伊はそへ言なり、往は來と云意なり、今更に吾は來じとの謂なり、こゝは吾が方を内にし、妹が方を外にして、來と云べきを往と云るなり、さるはこゝは、妹を深く恨みたる意なるより、ことさらに、妹が方を外にして、いへるなるべし、さて往と云べき處を來と云ひ、來と云べき處を往といへることは、みなそのさす方を内にしたると、外にしたると、彼此の差別あるのみなり、此例は、かの倭爾者鳴而歎來良武、と云るにつきて、既に一卷に委説り、○春雨之情とは、此歌上の歌と、同人の作にて、上に春

雨之零別不知、と云るにゆづりて、春雨のふるふらぬわきをもしらず、おもひに切りて、出て
 こし情の深切さを、と云ならむ、○不知有名國は、しらざることなるをの意なり、戀しきこと
 なるを、と云意なるを、戀しけなく、といふと同例にて、古風の一の格なり、○歌意は、春雨の
 ふるのふらぬのと云差別をもしらず、思ひに堪かねて、出て來し情の深さを、妹は知らねば、
 來しかひもなし、今更に來ることを吾はせじ、と恨みたるなるべし、本居氏、説に、是も右同人
 の歌にて、これは道中にて、思ひかへして、よめるなるべし、春雨の降わきをもしらず、出ては
 來つれども、今より又いかに甚しくふるべきもしらねば、これより歸るべし、今更ゆかじ、と
 なり、人のと云るは、雨のことは、人間のはかり知べきならねばの意なり、と云るは、理窟めき
 たる説なり、

春雨爾衣甚將通哉 七日四零者 七夜不來哉

歌意は、契沖、細雨濕衣、看不見、と云ばかりの春雨なれば、ぬれ〜おはすとも、衣のいたくぬ
 れとほらむやは、ぬれとほらじを、君もしかばかりの雨にさはらむとならば、たとひ七日つ
 づきてふらば、七夜さはりて來じとやと、理をせめて云り、七日といひ七夜と云は、七は數の
 おほきを云り、第十一に、おふみの海おきつしらなみしらね、どもいもがりといは、七日こ
 えなむ、此歌を併見べし、七日四の四は、助辭なりといへり、今按に、四の助辭に力あり、四はす

べてその一すぢなることを、おもく思はする辭なり、(六帖に、本句を、春雨の心は君もしれる

らむ、とせるは、誤なるべし、)

梅花令散春雨多零客爾也 君之慮入西留良武

多零は、(サハニフルとよみたれど、いかなり、)多は重字の誤なるべし、草書よく似たり、さら
 ばシキテフルと訓べし、(略解に、多は痛字の誤にて、イタクフルなるべしと云るは、いみじき
 ひがことなり、)○歌意かくれたるところなし、此は、したしき人を旅にやりて、おもひやりて
 よめるなり、

寄草

國栖等之春菜將探司馬乃野之數君麻思比日

國栖等之は、クニスラガと舊本に訓る、是古稱なるべし、六帖にも、此歌、くにすらのとあり、夫
 木集にも、くにすらがと記せり、又同集に、くにすらが若菜つむべき時は、來ぬ野澤の草もし
 たねさしつゝ、(クズと云は、や、後の唱ならむ、)本居氏、古事記傳に、吉野國巢、昔より久受と呼
 來れ、ども、此記の例、若久受ならむには、國字は書まじきを、此にも他の古書にも、皆國字を
 作るを思ふに、上代には、久爾須といひけむを、や、後に、音便にて久受とはなれるなるべし、
 と云り、(又中山、嚴水は、國栖等之、一本にクズヒトノと點す、又袖中抄、八雲御抄にも同じくよ

めり、依て思ふに、古本には、國栖の下、比字などありしが、今は脱たるなるべし、といへれど、いかゞなり、古事記神武天皇條に、到吉野、河之河尻時云々、亦遇生尾人、此人押分巖而出來、爾問汝者誰也、答曰、僕者國神名謂石押分之子、今聞天神御子幸行故參、向耳、此者吉野國巢之祖、また應仁天皇條に、又吉野之國主等、瞻大雀命之所佩御刀、歌曰云々、書紀には、國標部、(天武天皇卷)また國標人、(應神天皇卷)など見えたり、民部式に、凡吉野、國栖永勿課役など見ゆ、本居氏、今も吉野川に添て、南國栖村と云ありて、其あたり七村を總て國栖莊といふなり、南と云ば、昔は北國栖と云も有しにや、と云り、○司馬乃野は、シマノヌなり、(シメノ野には、わらず、夏宮瀧國栖西川と、吉野川の流れ回れる内に島といふべき地は多ければ、其中に島の野と名に負せたる處ありて、云るなるべし、十三に、島傳雖見不飽三吉野乃瀧動動落白浪とある島は、地名にてはなけれども、其川に邊たる地を島といへるなれば、今も其川に邊たる處の野を、島の野といへるをしるべし、さて此までは序にて志麻志婆と言を疊ねてつかけなしたり、○歌意は、本句は序にて、たびく、君を戀しく思ふこのころぞ、となり、

春草之繁、吾戀、大海、方往浪之、千重積

春草之繁、吾戀、大海、方往浪之、千重積、
 春草之繁、吾戀、大海、方往浪之、千重積、
 ノと訓べし、これも千重積と云む序なり、○千重積は、戀の思のかぎりしられず、數多く幾重

も積ぬとなり、○歌意かくれたるところなし、

不明、公乎相見而、菅根乃、長春日乎、孤悲渡鴨

菅根乃、長春日乎、孤悲渡鴨、
 菅根乃、長春日乎、孤悲渡鴨、
 らば、なほさもあるべき理なるに、たゞ、かすかに見たるばかりにて、長き春日を、日ねもす戀しく思ひてのみ、月日を送る事哉、となり、

寄松

梅花、咲而落去者、吾妹乎、將來香不來、香跡、吾待乃、木曾

梅花、咲而落去者、吾妹乎、將來香不來、香跡、吾待乃、木曾、
 歌意は、梅花の咲たる時には、よも見に来ぬことはあらじと、其をたのみに、ひとへに待る、を、其梅花の散失たらば、其跡は松木のみにて、見に来べき物もなければ、もし來ることあらむか、今は來まじきかと、たしかにはたのまずして待のみぞ、と云にや、

寄雲

白檀弓、今春山爾、去雲之、逝哉、將別、戀敷物乎

白檀弓、今春山爾、去雲之、逝哉、將別、戀敷物乎、
 白檀弓は、枕詞にて、張と云意につゞきたるなるべし、今の伊の言には、關らぬなるべし、(射と云意には、あらず)、○今春山爾云々は、春山に、今行雲のと云意なるべし、今の言は、下に移して心得る例なり、○去雲之といふまでは、逝を云む料の序なり、○歌意は、かくばかり、戀しくお

もはるゝものを、をさしおきて、よそにわかれ行むかとなり、

贈纏。

大夫之伏居嘆而造有。四垂柳之纏爲吾妹。

四垂柳之之は曾字の極草より誤れるなるべし、シダリヤナギソとなくてはいかゞ、八卷に、吾時早田之穂立造有纏曾見乍師弩波世吾背とある曾に同じ、○歌意は、丈夫の伏ては嘆き居ては嘆き、色々心をつくして製りたる、しだり柳の纏ぞよ、おろそかに思はずして、髪に飾り給へ、吾妹子よ、となり、

悲別。

朝戸出之君之儀乎。曲不見而長春日乎。戀八九良三。

戸朝出は、契沖云、朝にわかれ歸る出立なり、○歌意は、朝に起出て、歸り給ふ夫、君が容儀を、まだ夜のほのぐらきが故に、委曲には見ずして、今朝の君がわかれの容儀を熟見たらば、かくまではあらひと、けふ一日戀しく思ひて、長き春日をくらさむか、となり、

問答。

左に載る十首歌どもの中、初二首は、問答としもきはめがたければ、もしは亂れたるにもあらむ、又舊本問答終に、相不念將有兒故の歌を、別に載たれど、其はその次上の、相不念妹哉本

名の歌の或本なるが、まぎれたることしるければ、本章を除きて、その上に小書せり、

春山之馬酔花之不惡。公爾波思惠也。所因友好。

不惡は、八卷に、山毛世爾、吟有馬酔木乃不惡、君乎何時往而早將見とあるに同じ、○思惠也は、縦やと云に近し、假に縦す辭なり、又此は、終に與之とあれば、たゞ歎息意に見むもあしからじ、○好は縦なり、○歌意は、本二句は序にて、もとより惡からぬ君なれば、よしやたとひ、吾身をいひよせぬともいとほじ、となり、

石上振乃神杉。神左備而吾八更更。戀爾相爾家留。

石上振乃神杉は、大和國山邊郡石上の布留社の地にある、神木の杉にて、既に委註り、三卷に、石上振乃山有杉村乃とあり、○神左備而は、上よりは、神杉の神々しう、物ふりたることに云つゝけて、下は、吾身の老て、ふるめきたる意にいひ承たり、○吾八更更は、今又更に吾哉と云意なり、八は疑の也なるべし、○歌意は、年老てあれば、今は戀と云くせものゝ、せめ來ることもさらにあらじと、思ひゆるしてありしに、思はずも、今又更に、戀と云くせものゝ、吾身に責來けるにやあらむ、さらば、かくはかなき物思ひに、心を惱すこととはあるまじきものと云なるべし、十一に、石上振神杉神成戀我更爲鳴とあるは、末句の少異れるのみにて、全同歌なり、○此歌、次上の歌の答ともきこえず、また春の歌としもなし、まがひてこゝに入た

るならむか、舊本こゝに、右一首、不有春歌、而猶以和故載於茲次とあり、もし答歌ならば、右の註のごとくならむ、されど答歌としもきはめがたし、いづれ註は後人の加筆ならむ。

狹野方波、實爾雖不成、花耳開而所見社、戀之名草爾。

狹野方は、此下に、沙額田乃野邊乃秋芽子、ともよめり、同所なるべし、十三に、師名立都久麻左野方云々、とよめるは、近江なり、別地か、○實爾雖不成は、事成就はせずともと云意を比へたるなり、實は、何にまれ草木の實なり、○花耳は、ハナノミ。モと訓べし、花は、實にあらでたゞうはべにうるはしきやうに云を比へ云り、○開而所見社は、咲て見えよかし、と云意なり、社は希望、辭なり、○歌意は、よしや實になりて、事成就することなくとも、せめて戀情のなぐさめに、花のみなりとも、さきて見えよかし、といふなり。

狹野方波、實爾成西乎、今更春雨零而花將咲八方。

歌意は、一たび逢そめたるうへは、實になりて、事成就せしと云ものなり、さるを花のみもさきて見えよとの給へども、今更雨に催されて花のさきたる如く、うはべをつくるひかざりて、見するやうのことをすべしやは、となり。

梓弓引津邊有、莫告藻之花、咲及二、不會君毳。

梓弓は引の枕詞なり、○引津は、十五に、引津亭作歌あり、筑前なり、今と同所か、○歌意は、思始

たるは久しき事なるに、引津邊のなのりその花の咲までに、未得あはぬ君かな、さても待久しや、となり。

川上之伊都藻之花、事何時何時、來座吾背子、時自異目八力。

歌意は、久しく絶て逢ぬ事と歎き賜へれども、吾夫子が此方に來座ぬ故にこそあれ、さればいつもく、常止ず繼て來座せよ、何時は來座べき時にあらず、と云こと有むやは、となり、○

此歌四卷に、既出。

春雨之不止、零零吾戀人之目、尙矣、不令相見。

零零は、零乍と云に同じ意なり、知乍と云意の所を、知知、知乍と云意の處を、荊荊と云ると同例なり、(しかるを零零は、零乍の誤ぞと云説は、いみじきみだりことなり) ○不令相見は、アヒミセナクニとよむべし、相見せぬことなるを、と云意なり、○歌意は、春雨のをやみなく、打つづきて降つゝ、その雨に障られて來座ずて、吾戀しく思ふ人の容儀をさへ、相見せぬことなるを、いかにしてか戀しく思はざらむ、となり。

吾妹子爾、戀乍居者、春雨之彼毛、知如、不止零乍。

歌意は、雨に障られて得行ねば、吾妹子を戀しく思ひつゝ、涙の雨の止ずる心を、彼も知たる如く、おなじさまに止ず降つゝ、いよく、物思をまさらしむとなり、契冲云、春雨のかれも

知ことば、涙の雨のふるを、春雨もしりて、おなじやうにふるこゝろなり、わがせこにわがこひをればわがやどの草さへおもひうれがれにけり、このこゝろに似たり、

相不念妹哉本名菅根之長春日乎念晩牟。

歌意は、互に心を通はして、相思もせぬ妹なるものを、むさくくと戀しく思ひつゝ、この長き春日をくらさむかとなり、

〔(戰) 相不念將有兒故玉緒長春日乎念晩久〕

將有兒故は、あるらむ兒なるものをの意なり、○歌意は、互に心を通はして、相思はずあるらむ兒なるものを、長き春日を戀しく思ひくらす事は、いたづらわざとなり、此一首舊本此問答の終に、別歌として載たれど、上の歌の或本なること著ければ、此間に收て、終なるは省きつるなり、

春去者先鳴鳥乃罵之事先立之君乎之將待。

本句は序なり、春はさまぐの鳥の鳴中にも、鶯はことに春をつぐる鳥なるが故に、先鳴鳥と云、言先立と云かけたり、○歌意は、相念はずとのたまへども、さらに此方より、思ひまゐらせぬにはあらず、されど先最初に、言先立て云出せし君が方より、事成就せむなれば、吾は、一すぢに其時を待居むぞとなり、四卷に、事出之者誰言爾有鹿小山田之苗代水乃中與杼爾四

手とある言出は、今の言先立と云に意同じ、神代紀に、如何婦人反先言乎と見ゆ、

夏雜歌

詠鳥

大夫丹出立向故郷之神名備山爾明來者柘之左枝爾暮去者小松之若末爾里人之聞戀麻田山彦乃答響萬田霍公鳥都麻戀爲良思左夜中爾鳴。

大夫丹、丹は乃の誤なるべし、マ。ス。ラ。ヲ。とあるべし、(マ。ス。ラ。ヲ。ニ。と。て。は。い。か。な。れ。ば。な。り。さ。て。出。立。は。男。女。に。か。ぎ。る。べ。か。ら。ぬ。が。如。く。な。れ。ど。も。男。は。日。々。に。外。に。出。女。は。内。に。の。み。隠。居。て。常。に。出。る。事。な。き。故。に。取。分。て。大。夫。乃。出。立。向。と。い。へ。る。に。や。あ。ら。む。○。出。立。向。は。人。の。出。立。ば。や。が。て。向。は。る。、神。名。備。山。と。い。へ。る。な。り。こゝは。山。の。自。の。出。立。に。は。非。ず。○。故。郷。は。飛。鳥。の。故。京。な。り。○。明。來。者。云。々。、暮。去。者。云。々。は。對。へ。て。云。る。の。み。な。り。○。聞。戀。麻。田。は。聞。て。愛。る。ま。で。と。云。意。な。り。愛。る。を。戀。る。と。云。る。事。既。く。た。び。く。出。た。り。○。答。響。萬。は。ア。ヒ。ト。ヨ。ム。マ。デ。と。訓。べ。し。(コ。タ。ヘ。ス。ル。マ。デ。と。よ。み。て。は。つ。た。な。し。八。卷。に。山。妣。始。乃。相。響。左。右。妻。戀。爾。鹿。鳴。山。邊。爾。猶。耳。爲。手。と。あ。り。考。合。べ。し。木。靈。の。應。る。ま。で。と。云。な。り。

反歌

客爾爲而妻戀爲良思霍公鳥神名備山爾左夜深而鳴。

爲而は、其事をうけはりて、他事なく物する意のときに云詞なり、既くたびく出づ、○歌意は、神名備山に、夜更て、他事なく鳴なるほと、ぎすは、旅にて、その本郷にと、めおきたる妻を、戀しく思ひてなくならしとなり、契沖云古今集にも、けささなきいまだ旅なるほと、ぎす、とよめり、旅ゆく人は、故郷にのこしおく妻をこひてなくによりて、ほと、ぎすも、旅にてやなくらむとなり、

〔右二首古歌集中出〕

霍公鳥汝始音者於吾欲得五月之珠爾交而將貫。

於吾欲得は、吾は、もしは花などの誤にはあらざるべきか、さらばハナニモガと訓べし、もとのまゝにては心ゆかず、○歌意は、霍公鳥よ、汝がめづらしく鳴その初音が、形ある花にてもがなわれかし、さらば五月の薬玉に貫交へて、玩ぶべきに、と云るならむ、

朝霞棚引野邊足檜木乃山霍公鳥何時來將鳴。

歌意は、この霞のたなびく野邊に、山ほと、ぎすは、いつか來て鳴べきぞとなり、古今集に、わがやどの池の藤浪さきにけり山ほと、ぎすいつか來なむ、末句全同、○此歌は、春よみし歌と聞えたれば、春部に入べきなれど、霍公鳥を主としてよめる歌なるゆゑに、此間に載

たるなるべし、下にいたりて、夏、相聞に、春之在者醉輕成野之霍公鳥、とある歌、又これに同じ、

旦霞八重山越而喚孤鳥吟八汝來屋戸母不有九一。

旦霞は、八重を云むための枕詞なり、此、下にも、かくつづけよめり、○八重山は、彌重に多く重なれる山を云、○吟八汝來は、按に、吟は喚呼等の字を誤寫にはあらざるか、さらばヨビヤナガクルとよむべし、○歌意は、彌重に多く重なれる山を、辛うして越て來る喚子鳥よ、此處には汝が宿るべき家もなきものを、何しに、しか喚てや來るらむとなるべし、○此、歌、春部に入べきを、まぎれて此間に入しなるべし、

霍公鳥鳴音聞哉宇能花乃開落岳爾田草引憾婦。

田草略解云、源、康定主の説に、草は葛の誤なりとあるぞよき、○歌意は、卯花のちりとぶ岳に、葛根を引取をとめ子よ、汝等も、あのほと、ぎすの鳴なる音を聞つるや、となり、

月夜吉鳴霍公鳥欲見吾草取有見人毛欲得。

欲見吾草取有、本居氏、吾は今の誤にて、イマクサトレリなり、草取とは、凡て鳥の木の枝にとまり居ることなり、欲見は、ほと、ぎすが、月をみまくほりて、今木の枝にゐるを、來て見む人もがななり、十九に、ほと、ぎすなきとよまば草とらむ花橋をやどにはうゑずて、とよめるも、ほと、ぎすの來てとまるべき橋をうゑむと云なりといへり、中山、嚴水云、此歌、大方は

本居翁の説の如し、但し欲見は、霍公鳥が、月を見まくほりする意に説れたるはいかゞなり、
 欲見は、ミマホレバとよむべし、見まくほりすればなり、鳴霍公鳥を見まほしと思ひて見や
 りたれば、草取て鳴居たるを見出したるなりと云り、その意ならば、ミガホレバとよむべし、
 (ミマホレバとよまむは、後世の詞づかひなり、凡て見まくほし、聞まくほしなど云べきを略
 きて、見まほし、聞まほしと云類は、古言の用格にあらざり、さてこゝは、欲見者とありしを、もし
 は者、字の脱たるにもあらむか、さて霍公鳥のすがたを見まくほりする歌、十八にも、霍公鳥
 を、登毛之備乎都久欲爾奈蘇倍會能可氣母見牟、八卷に、鳴霍公鳥見會吾來之、などあり思合
 べし、〔頭註、新羅西園寺、目に見れど草とる鷹のふるまひは云々、祐則、くれむかつかれにかへるは
 落てやす〕○歌意は、月がよく照たる故に、この月影には、霍公鳥のすがたも見ゆべきなれば、
 いかにごして、そのすがたを見まほしと思ひて、見やりたれば、今木の枝にとまりて鳴て居
 を、唯獨見むはくち惜ければ、いかで来て見む人もがなわれかし、となり、

藤浪之散卷惜霍公鳥今城岳叫鳴而越奈利

今城、岳は、大和國高市郡にあり、九卷に註す、○歌意は、この藤の花は、程なくちり失べきにも
 し散失てあらむ跡に來たらば、いかにくち惜からむとて、霍公鳥の、今城の岳を今鳴て越る
 なりとなり、

巨霧八重山越而霍公鳥宇能花邊柄鳴越來

且霧は、本居氏云、霧は霞の誤なり、○宇能花邊柄は、卯花の咲るあたりをと云が如し、柄は從
 と云に同じ、十一に、守山邊柄同卷に、直道柄、十三に、自此巨勢道柄同卷に、此山邊柄、十四に、安
 受倍可良、十七に、乎可備可良などあり、又古今集に、浪音の今朝から殊にきこゆるは、又かの
 かたにいつからさきに渡りけむ、又浪の花おきからさきてちりくめり、拾遺集に、紅葉に、衣
 の色はしみにけり、秋の山からめぐり來し間に、かげるふの日記に、去年から山こもりして
 侍るなる、枕冊子に、このたびやがて竹のうしろから舞出て云々、などあるも、みな從と云に
 同じ、又催馬樂本滋に、手止之介支支比乃名加也、萬牟加之與利牟加之加良名乃不利己奴波、
 伊萬乃與乃太女介不乃比乃太女とあるにて、加良と與利とは、同意なるを知べし、また歩よ
 りと云ことをも落窪物語に、かちからといへり、さてこゝの柄は、輕くて、乎と云辭に通はし
 たり、○來は、草書の成を來と見て誤しものなり、ナリとよむべし、○歌意かくれたるところ
 なし、

木高者曾木不殖霍公鳥來鳴令響而戀令益

曾は、此は俗に堅く、或は毛頭などいふ意なり、さてこの言は、初句の上につして心得べし、
 曾木高く木を殖ることはせじといふ意なり、○歌意は、木高く木を殖ることは堅くせじ、い

かにとなれば、木高く木を殖るときは、ほとゝぎすの其木に來棲て、常に鳴響て、人を戀しく思ふ心を、益らしむればなり、となり、

難相。君爾逢有夜。霍公鳥。他時從者。今社鳴目。

他時從者は、マタシトキヨハとも、コトトキヨリハともよむべし、○歌意、かくれたるところなし、

木晚之。暮闇有爾。霍公鳥。何處乎家登。鳴渡良武。

有爾、舊本に、一云有者と註せり、サレバにてもナルニの意になれば、同じことなり、○武、字、舊本哉に誤れり、契沖、説に從て改つ、○歌意は、木闇く繁り合たる暮闇の夜なれば、物のあやめも見えわかぬに、ほとゝぎすは、何處をさして己が家として鳴わたるらむ、となり、

霍公鳥。今朝之。旦明爾。鳴都流波。君將聞可。朝宿疑將寐。

末句、キミキ、ケムカアサイカネケムと訓べし、(キミキクラムカアサイカヌラムとよみては、鳴都流波とあるにかなはず)、○歌意は、今朝ほのぼのの明に、霍公鳥の初音もらして鳴つるをば、君は聞けむか、又は朝宿して聞ずにありけむか、となり、

霍公鳥。花橘之。枝爾居而。鳴響者。花波散乍。

歌意、かくれたるところなし、此は聲の響に、花の散をいへるなり、花を居散しとも、又は羽觸

に散すなどいへることも多し、みな同類なり、

慨哉。四去霍公鳥。今社者。音之干蟹。來喧響目。

本二句は、八卷長歌にありて、そこに委註り、○歌意は、今こそ鳴べきをりなれば、音のかる、ばかりに、來鳴ともすべきを、來鳴ずあるは、慨く悪き醜霍公鳥なる哉と、なくべきをりに鳴ざるを、惡罵ていへるなり、

今夜乃。於保束無荷。霍公鳥。喧奈流聲之。音乃遙左。

聲之音乃遙左とは、聲は啼聲につきていひ、音は風響につきて云るか、又た、聲之遙左として事足るを、調のために音といへるか、奥邊之方、或は木末之上などやうにいへること多ければなり、○歌意は、今夜のいと聞くおほく、しくて、物のあやめも見えわかざれば、霍公鳥の陰だに見ゆべきにあらぬを、ましてそのもらして過る聲のはるかに遠さや、今少し岡近く鳴たらば、たしかにそれと聞べきを、となり、

五月山。宇能花月夜。霍公鳥。雖聞不飽。又鳴鴨。

五月山は、地名にあらざ、たゞ五月ごろの山を云、古今集にも、五月山梢を高めほとゝぎすなく音そらなる戀もするかな、と見ゆ、○宇能花月夜は、卯花の月のしろく照たるを云なるべし、契沖は、うの花のさかりなるが月夜の如く見ゆるをいへり、といへれど、いかゞ後世には、

しか心得てよめる歌おほかめれど、此歌なるは然にはあらじ、○又鳴鴨は、いかで又もなけかしと希へるなり、○歌意は、五月ごろの山の卯花に、白く照たる月夜に、霍公鳥の鳴て過行なる聲の、聞どもわかず面白きに、いかで又もかへり來てなけかしとなり、

霍公鳥來居裳鳴香吾屋前乃花橋乃地二落六見牟。

來居裳鳴香は、キキモナカスカと訓べし、いかで來居ても鳴かしの意なり、○落六見牟は、六は文字などの誤にて、チルモミムなるべし、此下に吾屋戸之麻花押靡置露爾手觸吾妹兒落卷毛將見とあり、考合すべし、略解に、六見牟は、左右手の誤にて、ツチニチルマデニなるべしといへるは強解なり、○歌意は、霍公鳥は、いかで吾庭の花橋の枝に來居ても鳴かし、さらば羽觸や聲の響などに、その花のちるを見べきにとなり、

霍公鳥厭時無菖蒲蕩將爲日從此鳴度禮。

從此鳴度禮は、此處を鳴度れの意なり、集中に多き詞なり、○歌意は、霍公鳥の聲を、いつは聞じと厭ふ時なければ、常に聞まほしき中にも、菖蒲を蕩に製りて、頭に飾らむ日は、わきて與あれば、をりをたがへず、此處を鳴て度れとなり、

山跡庭啼而香將來霍公鳥汝鳴每無人所念

鳴而香將來は、啼て行らむかの意なるを、こゝは大和の方を内にして、來と云り、倭備波鳴而

與來良武呼兒鳥象乃中山呼曾越奈流とあるに同じ、○歌意は、あの霍公鳥は、大和の方に鳴て行ならむ歟、その聲を聞て、大和の方には愛らむかしらず、我は汝鳴音を聞ごとくに、なくなりし人の上の、戀しくおもはるゝよとなり、此歌は、霍公鳥の音に感じて、なくなりし人をおもひてよめるなり、

宇能花乃散卷惜霍公鳥野出山入來鳴令動。

歌意は、卯花は、程なく散失べき様に見ゆれば、その散失なむことを、霍公鳥の深く惜て、或は野に出、或は山に入など、とにかくして鳴とよもすならむとなり、

橘之林乎殖霍公鳥常爾冬及住度金。

林乎殖は、ハヤシヲウエムと訓べし、略解に、ハヤシヲウエツとよめるは誤なり、○住度金は、住わたるが料にの意なり、度は、月日を経る謂なり、九卷に、詠霍公鳥歌の末にも、吾屋戸之花橋住度鳴と云り、鳥は、鳴字の畫の減たるなるべし、十九に、霍公鳥雖聞不足網取爾獲而奈都氣奈可禮受鳴金とも見ゆ、○歌意は、霍公鳥の夏より冬まで來り棲て、月日を経りて、常にさらず鳴べきがために、橘の林を殖生し置むぞとなり、

雨霽之雲爾副而霍公鳥指春日而從此鳴度。

雨霽之は、霽字、書本には、臍と作り、今は拾穂本に従つ、アメハレシと訓べし、○雲爾副而は、雲

に傍てと云が如し、雨のはれゆきしなごりの雲にそひての謂なり、○歌意かくれたるところなし、

物念登不宿旦開爾。霍公鳥鳴而左度。爲便無左右一。

歌意は、さなきだに、物思ひしげくて、得寐入らずして、起明したる夜の朝開なるを、せむ方なきまで、いよく物思をまさらせて、霍公鳥の鳴て飛度るよとなり、

吾衣於君令服與登。霍公鳥吾乎領袖爾來居管。

吾乎領は、岡部氏この歌、末句意得がたし、契沖云、常の鳥だに、袖に來居るものにあらぬうへに、ことにほとゝぎすは、人なれぬ鳥なれば、これは竿にかけてはせる衣などを云にやさるにても、君にさせよとしらするといふこゝろをば得ずといへり、又こゝに高豊と云人、乎は干字かと云り、此二を合せて、乎は竿字として、義訓にホスとよみ、領は、衣一領と云を以て、是もキヌと訓べしさらばワガホスキヌノならむか、又末に、鳴毛の字を落せしかと云一説あり、それによらば、吾竿領袖爾來居管、鳴毛ならむか、猶考べしと云り、以上岡部氏説、中山嚴水、領は領の誤なるべし、ワレヲウナヅキなるべし、吾乎は、我爾といふ意の古言なり、さて領は、うなづきてしらする意にて、霍公鳥の鳴とき頭の動くが、領くが如くなれば云るなり、さて袖は契沖云る如く、竿にかけて、はせる衣なるべしと云り、以上嚴水説、ウナヅクは、中昔の物

語に、往々見えたる詞なり、古言なるべし、源氏物語帚木に、さは侍らぬかといへば、中將うなづく、と見えたる類なり、○歌意は、吾衣を君に服せ奉れよと、吾に領しらせて、吾竿にかけてほしたる衣の袖に、來居つゝ、鳴ならむといふか、

本人。霍公鳥乎八。希將見。今哉汝來戀乍居者。

本人は、契沖むかし相しれる友をもいひ、又昔の妻をも云ことなり、こゝはほとゝぎすの聲をもとよりきゝなれたれば、むかしの友とおもひて、かく云るなり、鳥獸草木までも、人とはよみならひたり、後撰集に、待人はたれならなくにはとゝぎす、おもひのほかになかばうらみむ、これもほとゝぎすをさして、待人と云り、第十二に、遠つ人かりぢの池とつゝけたるは、遠より來る鴈と云心に云り、第十七にも、遠つ人かりがきなかむと云り、源氏物語若菜下に、御猫どもあまたつどひはべりにけり、いづらこのみし人はと尋て、みつけたまへりともありと云り、○霍公鳥乎八は、やよほとゝぎすとよびかけたる意なり、乎八は八與と云むが如し、○歌意は、昔の友にてある、やよほとゝぎすよ、汝にあひたしと戀しく思ひつゝ、居れば、待しかひありて、めづらしく今來りしや、といふならむか、

如是許雨之零爾。霍公鳥宇之花山爾。猶香將鳴。

零爾は、フルニの伸りたるなり、ラクの切ル降ことなるにの意なり、○宇之花山は、名處にあ

らず卯花の咲たる山と云りもみちしたる山を紅葉の山と云に同じ十七大伴池主長歌に
見和多勢婆宇能波奈夜麻乃保等登觀須云々とも見えたり○歌意は霍公鳥はかくばかり
雨のつよくふれば雨やどりなどして大かたは隠居らむを卯花の咲たる面白き山にて雨
のふることをもいとほは止らずに鳴らむかとなり

詠蟬

默然毛將有時母鳴奈武日晚乃物念時爾鳴管本名

日晚乃は蟬之と云意なり○歌意は事もなくてたゞにあらむ時にもがな鳴かし物念のし
げき時に鳴べき事にてはなきにかゝる時に斟酌もなくむぎくと鳴ていよく吾思を
まさらしむるは心なの蟬ぞとなり

詠榛

思子之衣將摺爾爾保比與鳥之榛原秋不立友

爾保比與はにほへかしと希ふなり○鳥は大和國高市郡にあり五卷に奈良遲那留志滿乃
己太知とよめり七卷にも出たり○歌意は秋たゞばさもあるべきをいまだ夏の節なれば
色に出てにはふべき時にはあらざれども愛しく思ふ女の衣を染むがために鳥の榛原は
今も色に出てにはほへかしとなるべし

詠花

風散花橘叫袖受而君御爲跡思鶴鳴

君御爲跡を舊本に爲君御跡と作るは混れたるなるべし今改つ○思鶴鳴にシヌヒツルカ
モとよむべし○歌意は君が來座て愛べき花なれば其花橘の風にちるををしみてせめて
袖に受入て置てだに見せむとて君を慕ひつるかなとなり

香細寸花橘乎玉貫將送妹者三禮而毛有香

香細寸は薫のよきを云言なり橘に多くよむことなり○三禮は病羸るを云四卷下に出
て委云り○歌意は馥しき橘花を玉に貫まじへていつものごと吾に賚し示し示すべきに
さもなきはおもふに其妹は日者病羸てあるにてもあらむかといふならむ

霍公鳥來鳴響橘之花散庭乎將見人八孰

歌意は霍公鳥の來鳴とよもすにつれて橘花のちる庭の興あるさまを來て見む人や孰な
るぞ君こそ來て見べき其人なれとなり

吾屋前之花橘者落爾家里悔時爾相在君鴨

歌意は契冲云たちばなのにはひにこそいやしきやどもまざれつれそれさへ散過たるこ
ろ君がとへば何のいふかひもなしくやしき時にもましましつるかなとなり

見渡者向野邊乃石竹之落卷惜毛雨莫零行年。

零行年は、本居氏云行は所の誤にてフリソネなり、○歌意は見わたせば、この向ひの野邊のおもしろき石竹の雨ふらばやがて散失べきさまなるに、その散失べき事はさても惜や、いかで雨ふることなくて、あれかし、となるべし、

雨間開而國見毛將爲乎故郷之花橘者散家牟可聞。

國見は、一卷三卷などにも出て、既くいへり、○故郷は、飛鳥の故京か、いづれ故京なるべし、○歌意は、雨の晴間もあらば、立出て國見をもせむ、それにつれて、飛鳥の故京の橘花をも見むとおもふ間に、雨のをやみなければ、空しくて打過る程に、故京の花橘はちり失にけむか、となり、

野邊見者瞿麥之花咲家里吾待秋者近就良思母。

歌意かくれたるところなし、瞿麥は、夏の末より、秋かけてさくものなれば、かくいへり、後撰集に、なでしこの花ちりがたに成にけりわが待秋ぞちかくなるらし、似たる歌なり、

吾妹子爾相市乃花波落不過今咲有如有與奴香聞。

吾妹子爾は、枕詞なり、妹に逢、といひかけたり、○有與奴香聞は、嗚呼いかで有かし、と希望ふ意なり、○歌意は、あふちの花は散失ずして、いつも今、目前に咲たる如く、嗚呼いかで常に有

かしとなり、

春日野之藤者散去而何物鳴御狩人之折而將挿頭。

散去而の而は、吉字などの誤か、吉と而と草書よく似たり、チリニキとあるべし、吉は、さきにありしことを、今かたるてにをはなり、○歌意は、春日野の藤花は散失たり、今はなにをか、御獵の人の折て挿頭むぞ、さてもさぶく、しき野のさまになりけり、となり、

不時玉乎曾連有宇能花乃五月乎待者可久有。

宇能花乃五月は、卯花の咲、五月の意にて、鶯の春といふと同例なり、○歌意は、玉を貫とは、藥玉のことにて、其の五月にするわざなるを、これは五月を待ば、待久しからむとて、いまだ時ならねど、四月に玉をぞ貫るとなり、

問答。

宇能花乃咲落岳從霍公鳥鳴而沙渡公者聞津八。

沙渡は、眞渡なり、五卷上、多爾具久能佐和多流伎波美とある下に、既くいへり、かげるふの日記のおくに、ほとゝぎす今ぞさわたる聲するわがつけなくに人やきくらむ、○歌意かくれたるところなし、

聞津八跡君之間世流霍公鳥小竹野爾所沾而從此鳴綿類。

問世流は問賜へると云が如し、○小竹野爾所沾而沾字、舊本治に誤、今は元曆本に従り、は、しとくと沾漬りてと云意なり、此上にも見えたり、○歌意これもかくれなし、右二首は、八卷に、巫部麻蘇娘子と家持、卿と雁の歌を贈答せるに似たり、

譬諭歌

橘花落里爾通名者山霍公鳥將令響鴨

歌意は、中山、嚴水云、霍公鳥のめでなつかしむ、橘の花ちりまがふ里に、吾かよひなば、ほと、ぎすのねたく思ひて、鳴さわぎなむかと云意にて、多くの人の思ひよする女に我かよひなば、里もとるに、いひさわがむかと云に、たとへたり、

萬葉集古義十卷之上終

萬葉集古義十卷之中

夏相聞

寄鳥

春之在者、酢輕成野之、霍公鳥、保等穗跡、妹爾不相來爾家里。

鳴者、と云たぐひなれば、なくをなると云り、成と云字をかきたるに、まどふべからず、さて野のほととぎすといはむために、其野をいふとて、春の時は、すがるの花になく野と云り、ほととぎすは、ほととぎすと云むためなれば、次第にみな序なりと云り、(此、說平穩なるに似たり)但し、鳴意を奈流と云むはいかゞなり、これによりて考るに、成は、古語に、久羅下那須、螿成など多く云る成にて、如の意なるべし、さて春之在者とあるを思ふに、霍公鳥の春のころ巢立て、鳴聲は、かの蝶、蟬に似たる故に、蝶、蟬如、霍公鳥といふ意につきたるか、さて新撰萬葉にも、郭公、鳴立、春之山邊庭、杳直不輸人哉、住瀬とも見えたるを思ふにかの鳥の、春のころ巢立鳴

には、久都氏とも聞え、並河天民が片割記に、伊豫國の山里にては、ほとゝぎすを、こつて鳥と云よししるせり、又螺贏の音にも似たるならむか、其は聞なす人の耳により、少づゝは異なるべけれど、大やうは螺贏の音のやうなりとて、螺贏如とは云るならむ、但し螺贏に似たりと云ことは、余も聞知ねば、くはしく聞しれらむ人にも、聞きて正すべく、余も又今より心をつけて聞て、なほ定て云べきにこそ、いかにまれ、此までは保等保等と云むための序なり、さて春されば、螺贏如と云るは、其鳥の體をいへるにこそあれ、霍公鳥は夏の季を主とする鳥なればとて、夏部には收たるなるべし、○歌意、本句は全序にて、殆ふき事、妹を得相見ずして、歸來むとしけりと、からくして逢るをよるこべるなり、

五月山花橘爾、霍公鳥隱合時爾、逢有公鳴。

歌意、契沖は、橘にほとゝぎすのあひにあふとき、われも又君にあへりとよるこびてよめりと云り、今按に、此歌も本句は序にて、さてほとゝぎすは、橘の陰に隠れて鳴よしにいひて、隠合を云む料とせるのみか、さて人目をしのび隠るゝをりに、思はず君にあひて、思ふ心を語らふ事も得爲ず、さて悔しやと云るか、十一に、皇祖乃神御門乎懼見等、從侍時爾相流公鳴、と云に似たり、

霍公鳥來鳴、五月之短夜、毛獨宿者、明不得毛。

歌意は、暮るかと思へば、早明るやうなる、極めて短かき五月の短夜をさへも、唯獨宿をすれば、一すぢに人を戀しや戀しやと思ひて、たやすく明すことを得せず、さて明がたしとなり、

寄蟬

日倉足者、時常雖鳴、物戀手弱女、我者時不定哭。

物戀は、物字舊本に我とあるは、通がたし、元曆本に於と作て、一本物とあり、今は其に従つ、一卷に、旅爾之而物戀之、伎爾三卷に、客爲而物戀、敷爾などありて、物とは廣く云事なるを、こゝは人を戀しく思ふを云るなり、○不定哭の上、舊本時字なきは、脱たるなるべし、と大神眞潮翁の云るは、信にさる事なり、今は此説に従て補つ、六卷に、時不定鳴、此上に、時不終鳴などあり、○歌意は、蟬は時を定めてなげども、人を戀しく思ふ手弱き女、身の吾は、時の定りもなしに、いつも泣てのみあるを、丈夫ならば、かくまで心よわくは、あるまじきを、となり、

寄草

人言者、夏野乃草之繁、友妹與吾師、携宿者。

本句は、古今集に、里人の言は、夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやも、とあり、○師字、舊本にはなし、今は元曆本に従つ、○携宿者、といひのこしたるは、よしやそれはさもあら

ばあれと、云意を含ませたるなり、小町歌に、世中はあすか河にもならばなれ君とわれとが
中したえずば、とあるに似たり、○歌意は妹と吾と、二人手を取りかはして宿たれば、夏野の
草の繁きが如く、人言は繁くいひさわぐとも、よしやそれはさもあらばあれ、いとひはずま
じきを、いかにもして、一すぢに相宿せまほしく思ふ、このごろぞ、となり、

迺者之戀、乃繁久、夏草乃、苜掃友、生布如。

繁久は繁くあるやうはと云意なり、○生布如は、オヒシクゴトシと訓べし、○歌意はこのご
ろの戀しく思ふ物思ひの繁くあるやうは、たとへば夏野の草の刈掃へども、やがて其跡に
重々に生繁るが如しとなり、十一に、吾背子爾吾戀良久者、夏草之、苜除十方生及如大かた似
たる歌なり、

眞田葛延、夏野之繁、如是戀者、信吾命、常有目八方。

八方、元曆本には八面と作り、○歌意は、重々に繁く、かくの如く戀しく思ふからは、思に堪か
ねて死むより他はなし、嗚呼まことに吾命の常にながらへて、生てあるべし、やはとなり、
吾耳哉、如此戀爲良武、垣津旗、丹頰合妹者、如何將有。

垣津旗は、丹頰合を云む料の枕詞なり、○丹頰合、舊本頰合を類令に誤、今は元曆本に従つ、は、
ニッラフと訓べし、凡丹頰經、丹頰合など書るを、ニホヘルとよむは、いみじきひがことなり、

頰はホとよむまじく、合經などはヘルと訓べからざるをや、○歌意は、われのみひとりかく
ばかり戀しく思ふらむか、紅顔か、にうるはしきその妹は、いかにあらむ、わが戀しく思ふ
如くに、吾を戀しく思ふらむか、いかさまわがこふる如くに、戀しく思ひはせじ、となり、

寄花。

片搓爾、絲叫曾吾搓、吾背兒之、花橋乎、將貫跡、母日手。

歌意は、吾夫子が家の、うるはしき花橋の花を、玉に貫むと思ひて、敵對なしに、からくして、絲
を片搓にのみ吾搓ぞとなり、契沖云、寄花詞なれば、此花橋は花を云り、母日手は思ひてなり、
片搓と云るは、かた思ひのたとへなり、はなたちはなをぬくをば、事成にたとふるなり、

罵之往來、垣根乃、宇能花之、厭事有哉、君之不來座。

本句は、厭と云む料の序なり、罵は夏かけてもすむものなれば云り、さて八卷に、霍公鳥啼峯
乃上能、宇乃花之、とて、末句全、同歌あり、古今集雜、下躬恒歌に、水のおもにおふる五月のうき
くさのうきことあれやねをたえてこぬ、とも見ゆ、○厭事有哉は、我を厭ひて、うるさきもの
に思ふ事のあればにや、と云意なり、さきの人の身に、憂ことのあればにやと云にはあらず、
まがふべからず、○歌意は、吾を厭ひて、うるさきものに思ふ事のあればにや、このごろはす
べて君が問來坐ぬ、となり、

宇能花之開登波無二有人爾戀也將渡獨念爾指天。

宇能花之は開と云む料なり無二と云までには關らず○開登波無二は吾にあはむと思ふ心のひらけずしてある人になり岡部氏の云るが如しさてこれは契沖も云る如く咲とはなしにあると云心につけて心得べし有人は或人と云義にはあらざればなり○歌意は未吾にはあはむと思ふ心のひらけずしてある人を片思に無益に他事なく戀しく思ひて月日を送らむかとなり

吾社葉憎毛有目吾屋前之花橘乎見爾波不來鳥屋。

歌意は吾をばにくきものにおもほすらむなれば常には來座ぬもことわりなりよしや吾をこそにくはおもほすらむわがやどの花にまで罪あるべきよしなければこの花たちはなのさかりをば見に來ますべしと思ひしを其をだに見には來ますまじきとにやざりとはあまりに情なしとなり○契沖云拾遺集伊勢が歌に上の句今と全おなじうして花見にだにも君がきまさぬとよめりともにやさしきうたなりこれらのうたを得てばまことに雨のふるひならばみのかさもしとにぬれてまどひゆきぬべし

霍公鳥來鳴動崗部有藤浪見者君者不來登夜。

歌意はほととぎすさへ來鳴とよもしていと興ある此岡邊の藤浪を見には來ますまじ

とにやとなり

隱耳戀者苦瞿麥之花爾開出與朝旦將見。

隱耳はコモリノミと訓べし十六に隱耳戀者辛苦山葉從出來月之顯者如何とあり○歌意は契沖しのびてこふればくるしきになでしこのつぼめるが咲出ることくいまはおしあらはして人にもしらせよなでしこのうるはしきを見るごとく紅顔を日にく見むといふなり朝旦といへるは日ごとの意なりといへり

外耳見筒戀牟紅乃末採花乃色不出友。

外耳はヨソノミと訓べし○筒字舊本箇に誤れり拾穂本に従つ○末採花は契沖紅花は末よりさきそむるをつみとれば末つむ花とはいふなりと云り本居氏末は集中に宇禮とのみよめればウレツムハナとよむべしといへりさることなりさて第三四句は色に出といはむ料の序なり○歌意は色に出ておしあらはして人にしらせずとも外目にのみ見つ愛をらむと云なるべし古今集に人しれずおもへばくるしくれなるのすゑつむ花の色に出なむとあるは表裏なり

寄露

夏草乃露別衣不著爾我衣手乃干時毛名寸。

露別衣は契沖云、たゞ露をわけゆく衣なり、古今集に、山分衣とよめるとおなじことゝるにて、かれはおこなひ人の衣と聞ゆれば、すこしかはれり、○下著爾は、ケセナクニと訓べし、著てあらぬことなるをと云むが如し、四卷に、吾背子之蓋世流衣之、十六に、伊呂雞(舊本雅に誤)世流菅笠小笠云々、古事記中、卷倭建命御歌に、那賀那勢流意須比能須蘇爾云々、美夜受比賣歌に、和賀那勢流意須比能須蘇爾云々、などあり、○歌意は、夏草の露分衣を取着たらば、さもあるべきことなるを其、露分衣を着てもあらぬことなるを、何故に、吾袖の乾間もなく沾たるらむ、げにさりとはつよき涙ぞとなり、

寄日

六月之地副割而照日爾毛、吾袖將乾哉、於君不相四手。

歌意は、君にあひたらば涙もとゞまりて、おのづから乾もすべきなれど、君にあはずしては、他事なく戀しや戀しやと思へば、たとひ地さへ割裂て、つよく照六月の日影にほすとも、この涙にいみじく沾漬りたる吾袖は、乾はすまじとなり、(六帖には、終句妹にあはずとあり)

秋雜歌

七夕

天漢水底左閉而照舟、竟舟人妹等所見寸哉。

水底左閉而底字、舊本にはなし、今は一本に従つ、は、ミナソコサヘニなり、○照舟は、ヒカルフネと訓べし、艤の美麗きをいへり、○妹等所見寸哉といへるは、妹と相見えきやと、問かけたる意にて、妹等は、妹と共にといふほどにきくべし、妹に所見きやといへば、此方の容儀の、妹が目に所見きやとのみきこゆるを、妹等としもいへるは、此方の容儀は妹に見え、彼方の容儀は吾に見ゆる謂なるを思ふべし、○歌意、舟人は彦星、妹は棚機女なれば、天河の水底までひかるばかりに、装ひたる舟を泊し、その舟人の彦星は、棚機女の妹と相見えきやいかにと、かたへの人の問かけたる謂なるべし、

久方之天漢原丹、奴延長之裏歎座津、乏諸手丹。

奴延鳥之は、枕詞なり、かくつゞくる謂は、既く一卷軍玉歌に委説り、○裏歎とは、裏は表の對にて、裏に物することなり、歎は、程無あはむと長き息をつきて歎美よしなり、奈宜久とは、喜しき事にも、哀しき事にも、嗚呼と長き息をつく事なり、○乏諸手丹は、うらやましく思はるるまでにと云意なるべし、契沖かゝるこひはたぐひすくなく、めづらしきまでにと云なり、と云るはいかゞ、○歌意は、外に居て見やる人の、うらやましく思はるゝまでに、天河原に出立て、彗星の來まさむを、心に喜しく下待て、棚機女の裏に歎美座つるよ、と云ならむか、吾戀、孀者知遠、住船之、過而應來哉、事毛告火。

知字、彌と作る本もあれど、舊本を宜とす。○事毛告火は、岡部氏云、火は無か哭の誤なるべし、言も告無の意なり。○歌意、中山、嚴水、第一二の句は、アガコヒヲツマハシレヲと訓べし、嬬は彦星を云、往船とは、天漢を漕行舟にて、彦星の舟にあらす、過而は、時過而の意なり、わが待つ、戀ることを、彦星はよく知給ひぬるを、舟の過往、ごとく時過て來ますべしやは、もし時過むとならば、事のよしを告來すべきに、しかくと言もつけ來ずてあれば、時過て今更來座べきやうはなしといへるにて、かのこぎ行舟を見て、彦星の來り給ふにやと、つきそふ女どものいふに、こたふるさまなりといへり、今按、此説の如くならば、往船之は、たゞ天漢の縁に、枕詞の如くに云るものともすべきかなほ考べし。

朱羅引色妙子數見者人妻故吾可戀奴

朱羅引は、朱ら光の縮れるにて、紅顔を云なるべし、羅にそへ言なり、既く四卷に出づ。○色妙子は十三にも、日本之黃楊乃小櫛乎抑刺細子彼曾吾嬬とあり、刺細は敷細の誤なれば、こも舊本にシキタへとよめるよろし、イロタへとよむはわろし。二卷に色妙乃枕等卷而、とあるをも、考合べし、色は重浪の重にて、妙は微妙なる謂ならむ、美女を稱ていふなるべし、袖中抄に、崇徳院御製、たへの子がよとでのすがた見てしよりしえが命は逢にかへてき、とあり。○人妻故は、人妻なるものをの意なり、一卷に、紫草能爾保敵類妹乎爾苦久有者人婦故爾

吾戀目八方十二に、小竹之上爾來居而鳴鳥目乎安見人妻妬爾吾戀二來、こられ同體なり。○可戀奴は、コヒスベシなり、奴字は、いかゞしき用様なれど、かくかけること集中前後に例あり、既くいへり。○歌意は、人妻なれば、いかに戀しく思ひても、益なき事とは思ひながら、紅顔の美女をたびく見れば、見る度に心うつりて、なほ止ことを得ずして、戀しく思ふべしとなるべし。六帖に、此歌をいろたへの子のかずみれば、と載たるは誤なり、さて此歌、七夕によるものとしも聞えず、此間に収たるにやあらむ。

天漢安渡丹船浮而秋立待等妹告與具

安渡は、安河の渡なり、古事記に、是以八百萬神於天安河之河原神集々而云々、書紀にも、天安河邊とあり、古語拾遺に、天八端河原とありて、名意は彌瀬河なるべし。○秋立待等は、岡部氏アキタチマツト訓はわろし、アキタツ待トとよむべし、秋の立を待の意なりと云り、本居氏秋は、我の誤にて、アガタチマツトなりと云り。○妹告與具は、イモニツゴソにて、いかで妹につげよかしと希ふなり、與具は、乞其の誤なりと略解に云れど、十三にも、眞福在與具とあれば、誤とは決めがたし、其義は未思得ず、猶考べし。○歌意は、天の安河の渡に船を浮べて、吾立て今かくと待て居るよしを、いかで棚機女に告よかしとなり。

從蒼天往來吾等須良汝故天漢道名積而叙來

從蒼天は、大空をと云が如し、從は、例の輕く乎といふに通へり、○歌意は、大空を飛廻りては、汝が何處に出來て、吾を迎ふと云事が、たどくしきによりて、飛行自在の吾さへも、汝が河門に出て、待つゝあるらむと思ふが故に、他所をばたどらずて、天河道を辛うして艱難み來しとなり、

八千戈神自御世乏嬬人知爾來告思者。

八千戈神は、大穴牟遲神のことなり、六卷にもよめり、既くいへり、○乏嬬(嬬字、拾穗本には儺と作り)とは、年に一度ならでは、相見ること稀に乏しき妻と云なるべし、夫木集に天、河くらしかねたるともし、妻わたりをいそぐぬさ手向らむとあり、さて略解云嬬は、文選左太冲詩に、伉儷不安宅、張銑註に、伉儷謂妻也、とあり、儺嬬同韻にて、古通用ひしならむと清水、濱臣云り、(頭註、大神、景井云、乏嬬は、自麗の誤にはあるまじ、)嬬告思者は、繼而思へばにて、之は、その一すぢなるよしを思はする辭なり、(頭註、古事記傳、苦思者、苦字、今本は告)○歌意は、神代より今に至るまで繼きて、織女を一すぢに戀しく思へば、人目を隠ばむとしてもしのび得ず、吾戀妻なりと云ことを、世人皆よく知にけりと云ならむ、

吾等戀丹穗面今夕母可天漢原石枕卷。

丹穗面は、紅顔を云、五卷にも、爾能保奈酒意母提乃字倍爾とあり、さて十九に、御面謂之美、於

毛和と註したれば、面字ヲモワとよむこと見然なり、○今夕母可の母は、輕く添て歎息を合せたる辭なり、昨日母今日母などの母とは別なり、可は疑辭なり、○石枕は、石を枕にするを云、○歌意は、吾一年を經りて戀しく思ひし紅顔の女と、天河原に石枕を共に纏て、嗚呼今夜相宿せむかとなり、

己嬬乏子等者竟津荒磯卷而寐君待難。

己嬬(嬬字、拾穗本には儺と作り)は、オノガツマと訓べし、岡部氏、嬬一本に嬬とあり、何れにてもあるべしと云り、さて嬬は借字にて、彥星を己夫の云ならむ、○乏子等者は、トモシムコラハと訓べし、さて乏子等とは、己が夫の彥星に逢ことを、稀に乏しめる子等と云にて、その子等は、棚機女なり、○竟津は、ハテムツノと訓べし、竟津とは、彥星の舟の將、竟、天河の津と云なるべし、○歌意は、夫君を待に堪難にして、その夫君の彥星の將、竟津の、荒磯をやがて枕にして、棚機女の宿と云るにや、

天地等別之時從自嬬然叙手而在金待吾者。

白嬬(嬬字、拾穗本には儺と作り)契冲云、彥星になりて、たなばたを云なり、○然叙手而在は、天地はやく割判れしより、織女はおのが妻とさだまりて、かくぞ我手にあるなりと、これも契冲云り、今云、右の説の如く、然は如此といふ意に聞べし、然と如此とは、彼と此との差ありて、

もとより表裏の辭ながら、又相通はしてきく例あり、そのくはしき理は、既くいへり、彼の然と云は、此の如此、此の然と云は、彼の如此なる謂よりいふことなり、たゞ何となく心まかせに、通はし云るにはあらず、各、その前後の語勢の趣によることなり、と知べし、○金待吾者と、は、むかしよりさだまれることなれば、七日の夜はあはむと、まつなりと、これも同人云り、○歌意は、天地の割判れし時より、織女は自妻とさだまりて、如此我手にあるなれば、その相見む初秋の七夕を、吾は待ぞと云なるべし、

彦星嘆須嬬事谷毛告爾叙來鶴見者苦彌

彦星は、契沖云、ヒコホシハと訓べし、○嘆須嬬嬬、字、拾穂本には、儷と作りは、ナゲカスイモニと訓べし、嘆く妹になり、とこれも契沖云り、今云、嬬は、ツマニとよみて然るべし、嘆須は、奈宜久の伸りたるにて、嘆き賜ふ妻にと云ほどの意なり、○爾、字、舊本には余に誤れり、今は古寫本に従つ、○歌意は、つまこひに嘆き賜ふを、よそめに見ればくるしさに、そのなげき賜ふ織女に、物をなりとも告なぐなめむとてぞ、彦星は、天河を渡りきつるとなるべし、これも彦星に擬てよめるなり、

久方天印等水無河隔而置之神世之恨

天印等は、此下長歌にも、天驗常とあり、○水無河、無の下、拾穂本には、瀬、字あり、は、元曆本にミ

ナシガハとよめり、八雲御抄にもしかよませ給へり、それによるべし、則、天河の事なり、實に、水の無河のよしに云るなり、○歌意は、天河を天つ勝示隔に置いて、一年に一度ならでは、相見ることかなはぬやうに、定めたりし神代が、一すぢに憾めしとなり、

黒玉宵霧隱遠軻妹傳言速告與

妹傳言の言、字、舊本になきは、脱たるなるべし、イモガツテゴトと訓べし、○速告與は、いかで速く告よかし、と云意なり、與、字、ゴソとよみて、希望辭とすること、集中前後に例多し、○歌意は、たとひ夜霧に隠りて、いとど吾居あたりの、遠く隔てありとも、織女の傳言をば、いかで速く告よかしと、織女の使を待わびて、彦星のよめる謂なり、

汝戀妹命者飽足爾袖振所見都及雲隱

汝は、彦星をさして云、○飽足爾は、略解に、アキタリニとよみたれども、いかゞなり、足は迄の誤なるべし、さらば、アクマデニと訓べしと、中山、嚴水が、いひたるぞよき、○歌意は、汝彦星の戀しく思ひて待と云、織女は、遠く雲隠るかぎり、此、土より見る目に飽まで、袖擧て往さまの見えつるなり、されば、今ぞ織女の相見え奉るならむと、此方より見やりて、おしはかりたる謂なるべし、

夕星毛往來天道及何時鹿仰而將待月人壯

夕星毛は、もしは毛は、之字などの誤にはあらざるか、毛とありては穩ならざればなり、されば姑、ユフヅツノと訓つ、夕星は、二卷、五卷にありて既に云り、俗によひの明星と云是なり、○月人壯の下、子字を脱せりと略解に云れど、十六に、飛鳥壯蚊、又、舍人壯裳など見えれば、猶もとのまゝにてもあらむ、○歌意は、夕星のかよふ夕の天を仰て、月の出來むを、いつまでか待つゝ居むぞ、となるべし、中山嚴水云、月人壯は彥星の異名にやと、契沖が説るは誤ならむ、集中、月のことを、月人壯子とよみたれば、此歌は月を待歌なるが、まぎれて七夕の歌中に入たるならむ、

天漢已向立而戀等爾事谷將告嬬言及者

已向立而は、舊訓に、イムカヒタチテとあるよろし、廿卷にも、已を伊の假字に多く用たるを、も思ふべし、此下に、天漢射向居而とあるに同じく、伊はそへ言なり、又十八に、夜須能河波許牟可比太知豆云々とあるも、許は伊字の誤にて、イムカヒタチテなるべし、(岡部氏が今のをも十八なるをも、コムカヒと訓て、從此鳴渡など云從此の略言なり、と云るはあらず)○戀等爾は、通難し、八卷に、玉切命向戀從者公之三船乃梶柄母我とあるによりて考るに、等爾は、從者か自者かを誤れるなるべし、さらばコヒムヨハと訓べし、(岡部氏は、等は樂の誤なり、コフラクニと訓べし、といへり、字形は近ければ、さもあるべきがごとくなれど、さては歌意穩

ならず)○嬬言及者、嬬字、拾穂本には儼と作り、言字、元曆本には奇と作り、は、中山嚴水云、言を奇に作るによるに、奇は寄の誤にて、ツマヨスマデハなるべし、(按に、儼の寄來る謂なれば、ツマヨルと云べき理なるに似たり、ツマヨスと云ては、主とあるものありて、其が令てよする義となれば、すこしいかゝなるやうなれど、妻余斯來世禰などもいひて、いづくにても妻ヨスといふが定にて、ツマヨルといへることなれば、なほツマヨスと訓べきなり)○歌意は、七日の夕になりて、天河に向立て、空しく戀しく思はむよりは、嬬寄せ來るまでは、せめて使して、言をなりともつけやらむとなり、

水良玉五百都集乎解毛不見吾者干可太奴相日待爾

水良玉は、白玉なり、水の拗音を直言に轉して、志の假字に用たり、○五百都集は、契沖云、此集十八、家持の歌に、しらたまのいほつつどひをてにむすびおこせむあまはむかしくもあるか、とあり、ひとすぢの緒にて、五百箇の玉をぬきたるを、いほつつどひといふ、神代紀には、たぶさにまつふといひ、十八には、手に結びとよみたれば、たなばたの手玉にかざるなり、と云り、古事記に、八尺勾璣之五百津之美須麻流之珠、書紀に、御統と書て、此云美須麻屢とあり、纂疏に、以絲貫穿總括之とある、この統と集と同意味なり、○解毛不見は、解看することをも得せずといふなるべし、手に纏たる玉を、再び解て試ることをする間のなきよしなり、○吾者干

可太奴は岡部氏云干は在の脱畫なるべし、在可太奴にて、在難ぬといふなるべし、○歌意は、白玉の五百津集の手玉を、裝ひ飾て容して、今か〜と彦星の來座てあはむ日を、立待に、よりて、その飾の手玉を、再び解て試むることをも得せず、心を安むる間もなくして待に、在にも在れず堪がたし、となるべし、

天漢水陰草金風靡見者時來之。

水陰草は岡部氏云十二に山河の水陰に生山草云々と云を、一本に水隠とあり、しかればここも、陰は隠とありしなるべし、陰にても意は同じかるべし、然ればミコモリクサと訓べし、さて十二に、山草といひしかば、水中のことならで、水分をミクマリと云如く、水派などの地の草を云べし、故秋風になびくといへり、○靡見者は、ナピカフミレバと訓べし、○時來之は、岡部氏云、來の下に、良字脱たり、トキキタルラジと訓べし、○歌意は、天河の水派に生たる草の、秋風に吹れて靡くさまを見れば、彦星の相見に來座む時來るならし、となり、

吾等待之白芽子開奴今谷毛爾寶比爾往奈越方人邇。

白芽子は秋芽子なり、かく書るは、白は西方秋色なるが故なり、と契冲云り、此下にも白風とあり、○爾寶比爾往奈は、染に往む、さらば急ぐといそぎたる意なり、爾寶布は、染ると云むが如し、奈は牟を急ぐ云るなり、さてこゝは、織女に相觸て、媚きに往むと云意を帶たるなるべし、

し、○越方人は、織女なり、○歌意は、見れば吾待し秋はぎ咲たり、常に往まほしけれども、秋ならでは往ことのかなはざれば、今なりとも急ぐ往て、そのはぎの色に染らむ、言にこそ芽子に染らむといへ、實はそのはぎに入交て、色に染る如くに、織女に往て相觸む、と云るなるべし、

吾世子爾裏戀居者天河夜船撈動梶音所聞。

吾世子は、彦星なり、○裏戀は、下戀と云に同じ、下心に裏て、戀しく思ふ意なり、○歌意かくれたるところなし、織女の意に擬へたるなり、

眞氣長戀心自白風妹音所聽紉解往名。

眞氣長は、眞來經長にて、月日長くと云意なり、既に註り、○紉解往名は、往は待字の誤にて、マタナなり、と本居氏の云る、そは此下に、天漢川門立吾戀之君來奈里紉解待とあると同じければ、さも有ぬべきことながら、又思ふに、十二に、雨毛零夜毛更深利今更君將行哉紉解設名とあるによらば、往は枉の誤なるべきか、さらば、設に借て書るなるべし、十一に、夕片設を夕方枉と書るをも合考べし、又八卷にも、天漢相向立而吾戀之君來座奈利紉解設奈とあり、名は牟を急ぐ云るなり、○歌意は、他人は未さともしらしむを、吾心裏より戀しく思ひて、今か今かと待につれて、織女の來る音が秋風に傍て、速に吾には聞ゆるなり、さらば急ぐ、そのいそ

戀敷者氣長物乎今谷乏牟可哉可相夜谷

ぎして縛解設けて待むとなり、戀敷者は戀しかるはといふが如し、○歌意は、戀しく思ひたることは、年月日長くてありしものを逢べき今夜なれば、乏しむべきに非ず、今なりとも、心足に速く相見むとなるべし、谷の言二ありていか、此下に、戀日者氣長物乎今夜谷令乏應哉可相物乎とあるは、今の歌の重出たるものときこの彼、方理かなへるか、

天漢去歲渡伐遷者河瀨於蹈夜深去來

去歲渡伐、これをゴゾノワタリバとよみて、渡場の意とする事なれど、おぼつかなし、場を古々と云しことなし、古くは爾波とのみいひたればなり、故考に、こは伐は代、字の誤にて、ワタリデならむ、代をテとよむことは、既く云るが如し、ワタリデは、應仁天皇紀歌に、知波椰臂等于泥能和多利珥和多利涅珥云々とあるに同じく、渡出にて、即渡の水門を云詞なり、○歌意は、去年の秋渡りし天河の渡出が、遷ひ易りて異處になりたれば、そこかこゝか、とたどりて踏惑ふ間に夜ぞ更にける、となり、古今集に、天河淺瀬白浪たどりつゝ、わたりはてねばあけぞしにける、とあり、

自古舉而之服不顧天河津爾年序經去來

歌意は、織女が布おらむとして、往古より機にはあけおきたれども、彥星をこひしく思ふ心の切なる故に、天河津にのみ立出て、其機物をかへりみずして、年ぞ經にける、となり、

天漢夜船撈而雖明將相等念夜袖易受將有

袖易受將有は、契沖有の下に哉字に落せりとみゆといへり、ソテカヘゾアラメヤと訓べし、○歌意は、天河に夜船を漕て、そこゝとたどるほどに、たとひ夜は明ゆくとも、かねて今夜は相見むとおもへる夜なれば、織女と袖をかはずしてあらめやは、かにかくに袖はかはさむぞと云るなり、

遙嫖等手枕易寐夜雞音莫動明者雖明

嫖字、古寫本には嫖、拾穂本には嫖と作り、妻と通ふ義は見えざれども、古はツマと訓しにこそ、○歌意は、遠方に隔りて居る織女と、手枕易して相宿したる今夜は、たとひ夜は明はずとも、雞は明るを告て、鳴ことなかれ、となり、

相見久狀雖不足稻目明去來理舟出爲牟嬾

稻目は、明の枕詞なり、此は、稻目は、稻之群と云なるべし、目とは、集中に小竹之目とよめる目に同じくて、群の意なり、牟禮切米、鳥魚などの群を、目と云ることも例多し、さて明とかゝるは、熟らむと云意にいひかけたるなるべし、稻の熟するをわからむと云は、古言にて、皇極天

皇紀に九穀登熟天智天皇紀に一宿之間稻生而穗其且重穎而熟などあり○嬬字拾穗本には儷と作り○歌意は相見て語ふことの飽足はせねども夜が明ゆきにたればためらふべきに非ずいざ舟發して歸らむ妹よと別を告いへるなるべし(六帖にわひ見まく秋たずともしのゝめの明果にけり舟出せむかはとあるはかたぐ誤りたり)

左屋始而何太毛不在者白棹帶可乞哉戀毛不遇者

不在者は字の意の如し次の不遇者は不盡にの意にて異なり○不遇者遇字拾穗本には端と作り元曆本には過と作てスギネバとよめりいづれにてもあらむ不遇者は盡ぬにの意不遇者は過去ぬにの意なりこの言の事既くいへり○歌意は相宿そめて未何程の間もあらねばなほ戀しく思ふ心の盡はてもせぬにその白妙の帯を乞べしやはとなり彦星の帯を解て織女の取おきたるをそれとりて給はれと別に臨て彦星の乞ふるまゝに織女のみゆるなり

萬世携手居而相見願念可過戀爾有莫國

爾字舊本に奈と作るは誤なり元曆本に従つ○歌意は萬世に手を携へ居て相見るとも思の盡べき戀にあらぬことなるをたゞ一夜のみにて別るゝはくちをしとなり三卷に明日香川川余藤不去立霧久念應過孤悲爾不有國今に似たり

萬世可照月毛雲隱苦物叙將相登雖念

歌意は萬世に永く久しく照べき月なればたゞ一夜の賞にあらざれどもしばし雲隱て見えぬは苦しきものぞ吾等が中もその如く萬世に永く久しく相見むとは思ども年たゞ一夜の逢瀬なれば別に臨てはかの月の雲がくれたるを見る如くにせむ方なく心もくれて苦しきものぞと云ならむ契冲云此はいづれの星につきていふともなし

白雲五百遍隱雖遠夜不去將見妹當者

夜不去はヨヒサラズと訓べし此下にも初夜不去とあり毎夜の意なり○歌意は別れて後は五百重の雲に隔り隠れて遠くはあれども戀しく思ふ棚機女のあたりなればせめての心やりに見えぬとも夜毎に見やらむとなり

爲我登織女之其屋戶爾織白布織豆兼鴨

屋外は家のことなり他處にいへるはおほくは屋外にて屋の外なりこのこと既に云り○織白布はオレルシロタへと訓べし○織豆兼鴨は織は縫の誤なるべしさらばヌヒテケムカモと訓べし此の下に足玉母手珠毛由良爾織旗平公之御衣爾縫將堪可聞又古織義之八多乎此暮衣縫而君待吾乎などあるを考合べし○歌意は衣に服せむが料にと織女の其屋戸にて織る白布をばこのころ縫て衣に製りけむかさてもきかまほしやとなり

君不相久時織服白袴衣垢附麻豆爾

歌意は、彥星の君に著せむ料にと、織たるはた物の白布衣の、舊びて垢つくまでに、久しき時より、君にあはずてあるよと、織女のいへる意にや、

天漢梶音聞孫星與織女今夕相霜

孫星は、彥星なり、和名抄に、爾雅云、子之爲孫、和名無万古一名比古とあるを借るなり、○歌意かくれたるところなし、此、土の人のおもひやりてよめるさまなり、

秋去者河霧立天川河向居而戀夜多

立字、舊本になきは脱たるなり、今は古寫本に従つ、○河向居而は、元曆本には、河而向居と作り、(これによらば、カハニムカヒキと訓べし)なほ舊本に従べし、○歌意は、秋になれば、天河に向ひ居て、戀しく思ふ夜の數ぞ多きとなり、第二句は、たゞ秋の景色をいへるのみなり、後撰集に、秋くれば川ぎりわたる、天河かはかみ見つゝ、こふる日のおほきとあるは、此歌を少し換たるなり、(略解に、此後撰集の歌によるに、今の歌も、河霧渡とありつらむが、渡字落たるなるべしと云るは、ひがことなり、立渡るといはずして、たゞ霧渡といはむは、古語のさまに非るをや)

吉哉雖不直奴延鳥浦嘆居告子鴨

雖不直は、直に不逢とも、の意なり、○奴延鳥は、裏歎の枕詞なり、上に見ゆ、○告子鴨は、子は使の童にて、かくと告ゆかむ使もがなわれかしの意なり、(略解に、子鴨は、子にもがもの意にて、子は、妹をさすといへるは、いみじき誤なり)○歌意は、直に逢ことはかなはずとも、縦やせめては、かくばかり、裏に歎き居ると云ことを、嗚呼往て告む使の童もがなわれかしとなり、一年邇七夕耳相人之戀毛不遇者佐宵曾明爾來

戀毛不遇者(過字、拾穂本には、謁、元曆本には、過と作り)は、上にも云如く、戀も不遇にの意なり、○終句、舊本には、夜深往久毛と作り、一云、不盡者、佐宵曾明爾來、と註り、今は一云の勝りたるに従つ、○歌意は、一年はたゞ七日の夕のみに相見人の、戀しく思ひ積來し、その思ひの未遇もはてぬに、はや夜ぞ明にけるとなり、

天漢安川原定而神競者磨待無辰年作之

此歌、説どもあれど、通難し、(略解に、一説を出して云く、而は西字の誤、競は鏡字の誤にて、ヤスノカハラニサダメニシカミノカハミハトグマタクニと訓て、これは月を神代の鏡に見なして、此鏡は磨ことをまたずして、いつもくもらぬと云なり、と云り、然れども甚しき強解なり、亦その如くにては、七夕歌とせむこともおぼつかなし、これによりて、今強て按に、神競は競字、舊本の訓に従て、ツドヒと訓むか、競字は競集る義をめぐらして、ツドヒと訓せたる

ならむ、つどふは集ることなればなり、さて磨待は禁時の誤にて、第三句以下は、サダマリテ
カミノツドヒハイムトキナキヲと訓むか、○歌意は、神代より天安河に神の競ひ集り給ふ
ことは、いつと定りて禁さくる時なきものを、かく七夕とのみ定りて、他時にあふことな
らぬが恨めし、と云ならむか、猶考べし、○庚辰年は、天武天皇白鳳九年なり、

〔右③④⑤柿本朝臣人麿歌集出〕

棚機之五百機立而織布之秋去衣孰取見。

五百機立而は、多くの機を立ての意なり、多くの機を、萬機千機など云類なり、神代紀下に、高
皇產靈尊女子栲幡千千姫萬幡姫命云々(上の姫、字は、幡の誤ならむ)と見ゆ(元可法師集に、織
女のいははた立ておるがうへにかさねて猶や衣かさまし)○秋去衣は、本居氏秋去は、和布
の字の誤にて、ニキタヘコロモならむ、と云り、○歌の意は、たなばたの女の、多くの機を立て、
勞きて織たる布の和たへ衣は、彥星ならで孰か取見て服むぞ、と云るなるべし、七卷に、今年
去新島守之麻衣肩乃間亂者阿誰取見とあるは、妻あらねば孰か取見て補つらむ、と云に
て、意は反對なり、

年有而今香將卷烏玉之夜霧隱遠妻手乎。

歌意は、一年有々て戀しく思ひし、遠方にある織女の手を、夜霧隱りに、密々に今相纏て寢ら

ひかとなり、此土の人より、想ひやりていへるなり、一五三四二と句を次第て意得べし、

吾待之秋者來沼妹與吾何事在曾紉不解在牟。

在曾は、有可と云むが如し、誰可と云べき處を誰曾と云と同例なり、○歌の意は、吾待々し秋
は來りぬるものを、何事の障あればにや、紉解て相宿せずあるらむ、となり、

年之戀今夜盡而明日從者如常哉吾戀居牟。

歌意は、一年中の戀情を今夜盡しはて、又明日より來し方の如く、戀しく思ひつゝ居むか、
となり、

不合者氣長物乎天漢隔又哉吾戀將居。

氣長は、來經長にて、上にも出、○歌意は、相見ずしてあるは、年月日の長き間なるものを、今夜
あひても、心だらひにかたらふことも得せずして、ほどなく別れたらば、又天河を隔に置て、

一年の間戀しく思ひつゝ居むかとなり、

戀家口氣長物乎可合有夕谷君之不來益有良武。

夕谷の下に、何事の障あればにや、といふ意を、假に加へて聞べし、古今集に、久かたの光のど
けき春の日にしづ心なく花の散らむ、といへるも、何故にやしづ心なく云々、といふ意とな
ると同類なり、例多し、○歌意は、戀しく思ふ事は、年月日の長き間なれば、あふべき今夜は、早

く來座べきものなるを、何事の障あればにや、今夜さへも君が早く來座ずあるらむとなり、上に戀敷者氣長物乎云々、とあるに似たり、もとは彼と同歌なるを、少し詞の異なるによりて、重出たるなるべし、

牽牛與織女。今夜相。天漢門爾。波立勿謹。

歌意は、彗星とたなばたつ女と、今夜あふなれば、天の河門に、ゆめく浪荒く興て、舟の出入を障ふることなかれ、となり、

秋風吹漂蕩。白雲者織女之。天津領巾毳。

歌意は、秋風の吹たゞよはする白雲と見ゆるは、まことの雲にはあらで、織女の天つ領巾にてあらむか、さてもめづらしや、となり、

數裳相不見君矣。天漢舟出速爲夜不深間。

君矣は、君なるものをの意なり、○歌意は、たびくあふ事のあらばこそあれ、一年に一度ならでは、あふこともかなはぬ君なるものを、今夜は夜の更ぬ間に、速く天河を舟出して來座せ、となり、

秋風之。清夕。天漢舟撈度。月人壯子。

清夕は、風音のそよくとそよめき立夕と云なるべし、佐夜は、曾與と云に同じ、既に云り、

○歌意かくれたるところなし、これも月を詠る歌なるが、天漢をよめる故に、まがひてこゝに入しならむ、

天漢霧立度。牽牛之。橈音所聞。夜深往。

歌意は、夜の更行ば、彗星が舟を出して漕往と見えて、その榜櫂のはじきに、天河の水が水霧立て、橈音が聞ゆ、となり、

君舟今撈來見之。天漢霧立度。此川瀨。

歌意は、彗星の君が舟今漕て此方に來るらし、その故は、天河の此見やる河瀨に霧が立わたるよ、その霧は、君が舟の榜櫂のはじきによりて、水が水霧立たるものと思はるればなり、となり、

秋風爾。河浪起暫。八十舟津。三舟停。

暫は、シマシクハとも、シマラクハともよむべし、○八十舟津は、安之舟津にて、安は安河なるべし、○歌意は、秋風の吹につれて、河浪が高く起ぬるなり、この荒浪を凌ぎて、強て漕行むは危し、安河の舟津に暫御舟をとめて、浪風の静らむを待賜へ、となり、

天漢川聲清之。牽牛之。秋撈船之。浪蹙香。

川字、元曆本には河と作り、下なるも同じ、○秋撈船は、本居氏、秋は速の誤か、次下に、早撈船之

賀伊乃散鴨とありといへり。○歌意は、天河の河音さやけく聞ゆるなり、これは牽牛の急ぎて漕行船に觸て、浪音の動き立て、かくきこゆるならむかとなり。

天漢川門立吾戀之君來奈里。紉解待。

來は、キマスと訓べし、座か益などの字の脱たるにもあらむ、又省きて書る處も多ければ、もとのまゝにもあるべし。○歌意は、天河の湊に出立て、今か來座む今か來座むと、吾戀しく思ひて待居し君が、今來座が見ゆるなり、さらば紉解て待むとなり、八卷山上憶良、天漢相向立而一云向河、吾戀之君來益奈利、紉解設奈、右養老八年七月七日、應令作之、とある歌のこゝに重出たるなり。○舊本に、一云天川河向立と註り、いづれにてもよろし。

天漢川門座而年月戀來君今夜會可母。

歌意は、天河の湊に出居て、年月長く戀しく思來し君に、今夜あへる哉、さてもうれしや、となり。

明日從者吾玉床乎打拂公常不宿孤可母寐。

玉床は、床を美て云るなり、二卷に、家來而吾家乎見者玉床之外向來妹木枕とあるに同じ。○打拂は、宿と云にかけて意得べし、不宿と云までにはかゝはらず。○歌意は、今夜は吾玉床を打拂ひて相宿したれど、明夜よりは君來座ねば、誰爲にかは、玉床を打拂べきなれば、其まゝ

にすておきて獨宿をすべきか、さてもこのりおほや、となるべし。

天原往射跡白檀挽而隱在月人壯子。

往射跡は、岡部氏は、ユクユクイムトとよみたれど、いかゞ中山、嚴水、往は注の誤にや、さらばサシテヤイルトとよむべし、といへり。○歌意は、弦月を弓に見なして、天原をさして射るとてや、月人男の白眞弓を引て、山端に隱せるならむと云るにや、月人男とは、やがて月を云ことゝきこゆめれども、と月夜見を治る人をいふ稱なれば、弦月を弓に見なし、さてそれを治る人の取て射るさまにいへるなるべし、かくてこれも、たゞ弦月の山端にかくるゝを、かくよみなせるが、混れて七夕の中に入しにや。

此夕零來雨者男星之早撈船之賀伊乃散鴨。

歌意は、此夕俄に降來雨と見ゆるは、雨にはあらで、彗星の急て船をはやくこぐとて、その船の榜に觸る、天河の水の散て落來るならむか、さても俄なる雨や、となり、契沖云、續古今集には、下句をとわたる舟のかいのしづくかと改て、赤人の歌とせり、古今集ならびに伊勢物語に、わがうへにつゆぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくか、とある、似たる作なり。

天漢八十瀬霧合男星之時待船今撈良之。八十瀬霧合は、八十と多くの瀬々に、霧立覆へり、と云なり、この八十は、安河の安にはあらず。

霧合は、キラヘリなり、○時待船とは、その船出すべき時刻を待船と云なり、○歌意は、彦星の時待船は、その時を待得て、今漕わたるにてあるらし、其船の榜櫂のはじきに、天河の水がみなぎり立て、おの八十と多くある瀬々に、霧立覆へりと見ゆればなり、と云なるべし、

風吹而河浪起引船丹度裳來夜不降間爾

夜不降間爾は、ヨノフケヌトニともよまるべし、○歌意は、風荒く吹て、河浪高く興ぬれば、船漕て來座むは危し、ざりとて浪風の静らむを待ば、夜更ぬべし、されば夜の更ぬ内に、引船に乗て綱手繩を挽せて、その繩をたのみて、難なく渡り來賜へ、と云るなるべし、

天河遠度者無友公之舟出者年爾社候

歌意は、遠渡のあるならば、なほさもあるべきを、間近き渡にてあれば、たびくあふ事のなるべきに、昔より一年に一度ならでは、あふ事のかなはぬさだまりにて、彦星の君が舟出を、一年中遠々にこそまで、となり、此歌後撰集にも六帖にも載て、第二三句、遠き渡りにあらねどもとせり、

天河打橋度妹之家道不止通時不待友

打橋度は、ウチハシワタセと訓べし、打橋をわたせよ、と云意なり、打橋は轉橋にて、假に渡す橋なり、二卷、四卷、七卷などにも見ゆ、既に二卷に註り、○歌意は、天河に轉橋を渡せよ、さらば

その橋をわたりて、秋の時を待ずとも、止す榎機女の家道に通ひ行て、常に相見むぞ、となり、
月累吾思妹會夜者今之七夕續巨勢奴鴨

會夜者は、アヘルヨハとよむべし、○今之七夕とは、今は、又と云に通へり、十七に、伊毛我伊弊爾伊久理能母里乃藤花伊麻許牟春毛都禰加久之見牟土佐日記に、一歌に事の飽ねば今、などあるに同じ、之は、その一すぢなることを、おもく思はする助辭なり、七夕は、數多の夜の謂にて、必しも七に限りたることには、非ず、七夕と書るによりて、七日の夜の事と思混べからず、此上に、七日四零者七夜不來哉、とあるに同じ、又九卷に、及七日家爾毛不來而、又吾去者七日不過十一に、七日越來十九に、七世申禰十三に、久有者今七日許十七に、等保久安良婆奈奴可乃宇知波須疑米也母などあり、皆同じ、又五卷に、麻都良我波奈奈勢能與騰波七卷に、明日香川七瀬之不行爾十三に、河瀬乎七湍渡而十六に、珠乃七條又吾身一爾七重花佐久などある七も、數の多きをいへるにて同じ、○歌意は、一年の月を重ねて、戀しく思ひし妹に、たまあへる今夜の、早明なむ事のくち惜ければ、今又今夜に、七と數多くの夜を繼て、このまま開ずにもがなわれかし、となり、

年丹裝吾舟撈天河風者吹友浪立勿忌

年丹裝は、一年の間待々て、舟を撈ふ謂なり、廿卷に、奈爾波都爾余曾比余曾比豆氣布能日夜

伊田豆麻可良武美流波波奈之爾又都乃久爾乃宇美能奈伎佐爾布奈餘曾比多志埜毛等伎爾阿母我米母我母此下にも船装とよめり○歌意は一年待々て、舩したる舟を、たま〜今夜出して漕行むとおもふぞ、天河にたとひ風は吹とも、浪荒く起て、ゆめ〜障る事なかれとなり、

天河浪者立友吾舟者率擄出夜之不深間爾。

歌意かくれたるところなし、

直今夜相有兒等爾事問母未爲而左夜曾明二來。

直今夜は、今夜直に相見たるよしなり、唯今夜耳と云ことにきこゆれども、直は直に相見る謂なり、○歌意これもかくれなし、逢たる夜のあかず明易きをいへり、

天河白浪高吾戀公之舟出者今爲下。

歌意これもかくれなし、かい機にふる、浪の音の高きにて、彥星の舟出をしれるさまなり、機、蹋木持往而、天河打橋度、公之來爲。

蹋木持往而は、フミキモチユキテと訓べし、蹋木は、はたおるとき、尻うちかくる板なり、と契沖云り、和名抄に、辨色立成云、機躡、万禰岐、躡踏也、とあり、これも同物か、但し今万禰岐と稱ものは、機の上の方にありて、一昂一低するさまの、手を以て人を招くごとくなるゆゑに云、とい

へり、然れば蹋木とは別ならむか、○歌意これもかくれなし、

天漢霧立上棚幡乃雲衣能飄袖鴨。

歌意は、見れば天河に霧が立上るよ、あれはまことの霧にはあらで、棚機女の雲衣のひるがへる袖にてもあるか、さてもめづらしや、となり、

古織義之八多乎此暮衣縫而君待吾乎。

古は、既往の時にと云むが如し、○義之を、テシの假字に用ふること、既くいへり、○歌意は、はやくの時に織て置し絹布を、此夕君に服むと衣に縫て、今か今かと君を待吾なるものを、何とてはやく來座ざるらむ、となり、

足玉母手珠毛由良爾織旗乎公之御衣爾縫將堪可聞。

足玉手珠は、古の婦女のなべての装にて、ことに機織には觸あひて、音のあるを拍子とせしこと、神代紀に、手玉玲瓏織紵之少女是誰之子耶、とあると、今の歌にて、そのさま思ひやるべし、さてその玉を手足の裝飾とせしことは、なほ古事記に、天照大御神云々、亦於左右御手、各纏持八尺勾璉之五百津之美須麻流之珠、而云々、書紀仁德天皇、卷、四十年、爰皇后、奏、言、云、云、莫取皇女所賚之足玉手玉、云々、此集三卷に、泊瀬越女我手二纏在玉者云々、十一に、新室踏、静子之手玉鳴裳、十三に、海部處女等手爾卷流玉毛湯良羅爾云々、など見えたり、〔頭註、現存六〕

さがにのたにもゆらにひくいとの手玉いば人を○由良爾は古事記に伊邪那岐命云々其御
 頸珠之玉緒母々由良邇取由良邇志而云々また奴那登母々由良爾とあるを書紀には瓊譽
 瑤々此云奴懶等母々由羅爾とあり瑤々玲瓏も玉聲と字書に見ゆ玲瓏は上に引り又職員
 令集解に饒速日命降自天時天神授瑞寶十種息津鏡一部津鏡一八握劍一碧玉一足玉一死
 反玉一道反玉一蛇比禮一蜂比禮一品々物比禮一教導若有痛所者合茲十寶一二三四五
 六七八九十云而布瑠部由良由良止布瑠部如比爲者死人返生矣此集十三に小鈴文由良爾
 又同卷に上に引如く玉毛由良羅爾などある皆同じ又古事記袁祁天皇大御歌に奴豆由良
 久母夜此集廿卷に由良久多麻能乎とよめるも同じ言の活用たるものなり遊仙窟に鏘々
 をユラメイテとよめり此字も瑤々と意同じさて右の集中なるは母はみな語辭なるを古
 事記と書紀なるとの一の母の詞は語辭にはあらずて眞の意なり眞を轉して母と云こと
 も已考あり一卷に云り○御衣は古事記上卷八千矛神御歌に久路伎斯祁美遠云々書紀推
 古天皇卷に衣裳をミケシと訓り此集十四に伎美我美祁志伊勢物語に是や此天の羽衣宜
 しこそ君が美祁志に奉りけれなどあり名義は本居氏太刀は佩物なる故に御佩と云弓は
 執物なる故に御執と云如く衣は着物なる故に御着と云なり著を古言に祁流と云りと云
 り按に佩を波可之と伸云ときは佩賜ひと云意執を等良之と伸云ときは執賜ひと云意に

なると同じく着を祁之と伸云ときは着賜ひと云意になりてみな敬ひて云詞なり祁之は
 伎と縮るにて知べし波可之は波伎と縮り等良之は等利と縮るに同じ○歌意は足玉も手
 玉も瑤々にゆらめかして勞き織たる絹布を夫君が御衣に巧に縫て服せむと思ふにもし
 今夜のいそぎに堪ずして君が來座むまでに得縫竟ずあらむかさてもいかで早く縫竟む
 となり

擇月日逢義之有者別乃惜有君者明日副裳欲得

擇月日は七月七日ならでは逢まじければ月日を擇と云るなり○別乃乃は久字の誤なる
 べしワカレマクとよむべし別る事のと云意なり○歌意は月日を擇てたまへ逢たる
 君なれば別る事の極めて惜くあるに嗚呼いかで明日までも此方に留り座てがなあれ
 かしとなり

天漢渡瀨深彌泛船而棹來君之櫂之音所聞

渡瀨深彌は渡瀨が深き故に歩わたり得せずして船を浮ぶる意のつゞけなるべし○歌意
 かくれたるところなし

天原振放見者天漢霧立渡公者來良志

歌意は天原を振仰て夫君が來座むを遠く望み待居るにあの天河に霧の立わたるは君が

漕す舟の榜楫のはじきに、水がみなぎり立るものと見ゆれば、今は君が來座にてあるらし、となり、

天漢渡瀨每幣奉情者君乎幸來座跡。

渡字、舊本になきは脱たるならむ、第二三句ヲタリセゴトニヌサマツルとよむべし、舊本のまゝにてセゴトニヌサヲタテマツルとよみては、いと拙し、十二に、吾妹子夢見來倭路度瀨別手向吾爲とあるを相照して、必渡字あるべきをしるべし、故今補つ、七卷にも、從此川船可行、雖在渡瀨、別守人有とあり、○幸來座跡は、彥星の幸くて通ひ來ませと、云なり、○歌意は、天河の渡瀨毎に、盡に幣帛を獻りて、ねもころに祈り白す情は、他の故にあらざ、夫君が平安くて、いつもかはらず、此方に通ひ來ませとぞ、となり、

久方之天河津爾舟泛而君待夜等者不明毛有寐鹿。

不明毛有寐鹿は、明ずもがなわれかしと希ふなり、既に委いへり、○歌意かくれたるところなし、

天河足沾渡君之手毛未枕者夜之深去良久。

足沾渡は、十一に、念餘者丹穂鳥足沾來人見鴨とあり、河を渡りしいたづきを云り、○未枕者は、未まかねにの意なり、○歌意は、天河を足ぬれつゝ、辛うして勞き渡り來て、君が手を

渡守船度世乎跡呼音之不至者疑梶之聲不爲。

とりて未纏もせぬには、はや夜の更ぬる事となり、君は妹とあらまほし、
渡守は、十八長歌に、和多理母理とあるによりてよむべし、皇極天皇紀、渡子をワタシモリとよめるは、やゝ後の唱へのまゝに、假字付せりと見ゆ、和名抄に、涉人云々、日本紀に云、渡子和太之毛利、一云和太利毛利とあり、○度世乎は、度せ叫々と呼聲なり、集中に、叫字をヲの假字に用たるは、其意なり、叫呼也と字書に見えたり、七卷に、氏河乎船渡呼跡、雖喚不所聞有之、機音毛不爲とあるに同じ、○至は、聲の此より彼へとくをいふ、古事記に、下照比賣之哭聲、與風響到天云々、樂師寺佛足石讚歌に、美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利、此下に、左男牡鹿之妻、整登鳴音之將至極、云々などあり、○歌意は、渡守よ船度せ叫々と呼聲の、彼方に至り届きて聞えねばか、機の音爲ぬならむ、嗚呼かくまで呼聲の、さこえぬことはあるまじきを、となり、

眞氣長河向立有之袖今夜卷跡念之吉沙。

歌意は、月日間長く、天河に向ひ立て待つゝありし袖を、今夜夫君を待得て、纏れて相宿せむと思ふ心の、たのしさかぎりなし、となり、

天漢渡湍每思乍來之雲知師逢有久念者。

歌意は、かくあへることを思へば、天河のわたり瀬毎に、嗚呼戀しや戀しやと物念をしつゝ、辛うして渡り來しかひもありけり、となり、
人左倍也。見不繼將有牽牛之。孀喚舟之。近附往乎。

第一二句は、人さへ見繼ずあらむやはの意なり、○歌意は、中山嚴水云、ひこほしの妻迎舟の近づくを、織女はいふもさらなり、よそ人さへ、あからめもせず、見つづかずあらむやは、となり、○舊本、一云見乍有良武、と註り、本文よろし、

天漢。瀨乎早鴨。烏珠之夜者。闌爾乍不合牽牛。

歌意かくれたるところなし、瀨が急きゆゑに渡りかねて、夜のふくるまで、彥星の來座てあはぬならむ、となり、

渡守舟早渡世。一年爾二遍往來。君爾有勿久爾。

歌意は、一年に二度とかよひきまます君にてはなきことなるを、ためらはずに船を急くわたせ、渡守よ、となり、(六帖には、二度きますとせり、)

玉葛不絶物可良。佐宿者年之度爾。直一夜耳。

玉葛は、不絶の枕詞なり、○歌意は、幾年経ても、ちぎりの絶はせぬものながら、相宿する事は、たゞ一年に一夜ばかりぞ、となり、後選集に、第三句を、あら玉のとして載たり、古今集に、とし

ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける、
戀日者氣長物乎。今夜谷令乏應哉。可相物乎。

歌意は、月日間長く戀しく思ひて、稍あふべき今夜を待得たるものを、今夜さへ乏しむべきにあらず、今夜なりとも、心足ひに速く相見む、となり、上に、戀敷者氣長物乎、今夜谷令乏、可哉、可相夜谷、とあるに、少か詞の異なるによりて、重出たるなり、今の歌理かなへり、既くいへり、
織女之。今夜相奈婆。如常明日乎阻而。年者將長。

歌意は、織女の今夜逢て別れなば、又明日を隔にして、今來む年の今夜まであふべからねば、一年の月日長く、來し方の如く戀しく思ひつゝ、あらむ、となり、上に、年之戀、今夜盡而云々、とあるに似たり、

天漢。棚橋渡織女之。伊渡左牟爾。棚橋渡。

棚橋渡は、タナハシワタセとよむべし、棚橋は、契冲云、橋をかけたるは棚のごとくなれば、棚橋と云か、○伊渡左牟爾は、伊はそへ言、渡左牟は、渡らむを伸云たるにて、渡り賜はむと云如し、こゝは渡り給はむ料に、といふ意なり、○歌意は、棚機女の渡り給はむ料に、天河に棚橋を渡せ、となり、この歌は、織女のわたるさまにのみなしたりとみゆ、
天漢。河門八十有。何爾可君之三船乎。吾待將居。

河門八十有は、上にも、八十瀬とよめり、河門の數多きを云、十三に、近江之海泊八十有ともあり、○歌意は、天河の湊は、八十と數多くあれば、何の湊に、夫君が御船の泊賜はむもしるべからず、されば何處にてか、御船を待居るべきぞ、となり、七卷に、近江之海湖者八十何爾加君之舟泊草結兼とあるは、大方似たる歌なり、

秋風乃吹西日從天漢、河瀬爾出立待登告許曾。

河瀬爾出立は、河字、舊本には落たり、カハセニデタチとよむべし、○歌意は、秋風の吹始し日より今日まで、天河の河瀬に出立て待て居ると、いかで告よかし、となり、便ある人などに乞よしなり、古今集に、秋風の吹にし日よりひさかたのあまのがはらにたゝぬ日はなし、似たる歌なり、

天漢去年之渡湍有、二家里君將來道乃不知久。

有二家里は、略解云、有を荒に借たるものとせむはいふかし、絶の草書より誤て、タエニケリならむ、○歌意は、天河の去年の渡湍は、絶廢りて處異りたり、されば何の處をわたりて、君が來座む、その道のしられぬ事となり、

天漢湍瀬爾白浪、雖高直渡來、沼待者苦三。

雖高は、タカケドモと訓べし、高けれどもの意なり、○歌意は、天河の瀬每瀬毎に浪高く起て、

わたるに艱難はありつれども、此方にて來座むを待居むは、待遠にて苦しからむとて、その河瀬を歩渡りして來ぬるぞ、となり、これは彥星の妻迎舟を遣て、織女を待に堪がたくて、自渡り來しといへるにや、後撰集に、あまのがはせゝのしらなみたかけれどたゝわたりきぬまつにくるしみ、として載たり、

牽牛之婦喚舟之、引綱乃將絕跡、君乎吾念勿國。

引綱は、綱手なり、和名抄に、唐韻云、牽絃挽船繩也、訓豆奈天とあり、○吾下、一本に久、字あるは、衍文か、又は之の誤か、○歌意は、本句は、目にふるゝものもて序としたるにて、いつまでも君とちぎりの絶むと、わが思ひはせぬことなるを、末長くたのもしくおぼし賜へと、彥星に告るなるべし、十四に、多爾世婆美彌年爾波比多流多麻可豆良多延武能己許呂和我母波奈久爾とあるに、末句大かた同じ、

渡守舟出爲將出、今夜耳相見而後者、不相物可毛。

舟出爲將出は、下の出字、異本には去とあり、それも誤にて、來なるべし、フナデシテコムと訓べし、○歌意かくれたるところなし、

吾隱有檝棹無而渡守、舟將借八方、須臾者有待。

借字、舊本に借と作るは誤なり、今は元曆本、古寫本、拾穂本等に從つ、○歌意は、檝棹をわが隱

しおきつれば、船ありてもその益なし、されば渡守も漕べきすべなければ、舟をかすべしやは、借まじきなれば、嗚呼しばらく此方にありて、まぢ給へ彦星よ、と織女のいふなり、古今集に、久方のあまのがはらのわたしもりきみわたりなばかぢかくしてよ、

乾坤之初時從天漢射向居而一年丹兩遍不遭妻戀爾物念人天漢安乃川原乃有通出乃渡丹具穗船乃艦丹裳舳丹裳船裝眞梶繁拔旗荒木葉裳具世丹秋風乃吹來夕爾天川白浪凌落沸速湍涉稚草乃妻手枕迹大船乃思憑而撈來等六其夫乃子我荒珠乃年緒長思來之戀將盡七月七日之夕者吾毛悲鳥

射向居而は、此上にも已向立而とあり、射はそへ言なり、○物念人は、彦星をさす、○有通は、有つ、通ふと云意なり、集中に多き詞なり、○出乃渡は、岡部氏出出は、歳の一字を誤れりしなり、といへり、トシノワタリとよむべし、上にも年之度とよめり、一年に一度の渡と云意なるべし、○具穗船は、本居氏は、其穗船の誤ならむ、といへり、又按に、具は意の誤にて、オホブチにて、もあらむか、具意草書相似たり、○船裝は、廿卷にも、都乃久爾乃字美能奈伎佐爾布奈餘曾比多志泥毛等伎爾阿母我米母我母、とあり、上にもいへり、○旗荒本は、木を本に誤りたるにて、ハタス、キなるべし、荒はス、ともよむべければなり、略解に、荒は萩の誤か、或は篤

木の誤ならむと云るは、甘心がたし、○末葉裳具世丹は、末字、舊本になきは脱たるなるべし、七卷にも、水門葦末葉誰手折とあるを、合思べし、具は、本居氏の、其の誤ならむと云るぞ宜しき、ウラハモソヨニと訓べし、十二に、布妙之枕毛衣世二歎鶴鳴、新撰萬葉下卷に、夏之夜之松葉牟曾與丹吹風者五十人連歎雨之音丹異成、などあり、末葉もそよくとそよめき動して、風の吹よしなり、曾與は風の音なり、○稚草乃は、妻の枕詞なり、既くいへり、○妻手枕迹は、ツマガテマカムトとよまむは、甚拙し、手は乎字の誤なるべし、ツマヲマカムトと訓べし、妻は織女をいへり、○大船乃は、思憑の枕詞なり、二卷に出て、既く委説り、○其夫乃子は、彦星をさせり、○七月は、布美月と稱こと、岡部氏の考に、穗含月なり、と云る、是はさもあるべし、凡て月月の名ども、昔よりくさく、説あれど、おほくはあたらす、○吾毛悲鳥、一本に焉と作り、は、鳥は、焉と通用たること、既く云り、名和抄裝束部鳥帽、註に、俗訛鳥爲焉、今按、鳥焉或通、見文選註玉篇等、とあり、星合のそらをおもひやれば、人の心もたゞならず、嗚呼吾さへも憐しや、と云なり、

反歌

狛錦紉解易之天人乃妻問夕叙吾裳將徳

狛錦は、高麗錦なり、和名抄に、本朝式云、有暈細錦高麗錦軟錦兩面錦等之名也、とあり、○紉解

易之は、妻も夫も互に紐をとくよしなり、交合さまなり、書紀允恭天皇の御歌に、佐瑛羅俄多
邇之、枳能臂毛弘等、枳舍氣帝阿萬、哆絆泥受邇多、儂比等用能未とあり、○天人は、彦星を云、十
八に、安萬射可流比奈能、夜都故爾安米比度之、可久古非須良波伊家流思留事安里と云る、安
米人は、皇都人を云るにて、言は同くして、意異れり、○歌意は、高麗錦の紐を互に解かはして、
天人の妻問すると云今夜ぞよ、吾も慕ひて天原を見やらむとなり、

彦星之川瀬渡左小舟乃得行而將泊河津石所念

左小舟とは、左は真に通ひて、真小舟と云が如し、○得行而將泊は、行て泊ることを得むと云
意なり、今世には口づかぬこゝちすれど、これ古の物いひざまなるべし、十一に、面忘太邇毛
得爲也、登手握而雖打不塞戀之奴とあるも、得爲也は、爲ることを得むか、と云意なり、十二に、
玉勝間安倍島山之暮露旅宿得爲也、長此夜乎とあるも、爲ることを得むやは、と云意なり、し
かるを、この十一なると、十二なるとの得爲也を、エスヤと訓はいかゞなり、爲をスと云ふと
きは、現在のうへのことなるを、現在のうへに得云々とは、古くもいはざりしこと、おも
へばなり、セム、セメと訓ときは、未然らぬことを、兼て云訓となりて、爲ることを得むと云ふ
ことを、エセム、爲ることを得むやはと云ことをエセメヤとは云しとおぼえたればなり、○
歌意は、彦星の天の河瀬を漕渡る真小船の、彼方の湊に行至りて泊ることを得むその河の

の湊のやうが一すぢにおもはるゝとなり、

天地跡別之時從久方乃天驗常、互大王天之河原爾璞、月累而妹爾相、時
候跡立待爾吾衣手爾、秋風之吹反者立坐、多土伎乎不知、村肝心不知、欲
比、解衣思亂而何時跡、吾待今夜此川行、瀬長有欲得鴨。

天驗常は、上に、久方天印等水無河隔而置之、神之世之恨とあり、一年に一度ならでは、逢事を得
まじき天津勝示と、天漢をその隔に定め置たるよしなり、○互大王は、互は定の誤としてサ
ダメテシと本居氏のよめるよろし、○時候跡は、トキサモラフトと訓べし、時節をうかゞひ
居とて、と云なり、○吹反者は、フキシカヘレバと訓べし、幾度もく、袖に風の吹來るを云、袖
を吹翻すと云にはあらず、○立坐は、タチテキルと訓べし、○村肝は、心の枕詞なり、既く出、
不欲は、不知欲比とありしが、知比の字を落せる事しるし、さらば、イサヨヒと訓べし、略解に、
欲は歡の誤にて、不歡はサブシクならむと云れど、うけがたし、集中に、サブシキと云に、不樂
不恰などとは多く書たれども、不歡と書るは見えざればなり、そのうへこゝは、サブシクと
云べき處にあらず、七卷に、山末爾不知夜經月乎とあるを、考合べし、但しこれは字訓のみな
るを、欲比と字音を雜へ用ひむ事、いかゞと思ふ人もあるべけれど、同卷に、不知與歷とも
あれば、少しも妨なし、さてこゝは、三卷赤人歌に、雲居奈須心射左欲比とあるに同じく、心の

浮れて定らず散亂れたるをいへり、○解衣は、これも枕詞なり、解たる衣はみだるゝものなれば、かくつゝけたり、○行長有得鴨は、既く契沖もうたがひおきたる如く、脱字誤字あるべきにつきて、岡部氏考に、行行良爾有不得鴨とありて、ユク。ラ。ユク。ラ。ニアリ。カ。テム。カ。モ。ナリ。けむを古の重字の書例をしらぬものゝ、さかしらにゝゝを誤とし、良爾を長となせしにや、こはなほ考べきことぞと云り、此説も甘心がたし、まづ中山嚴水が行の下に、瀬字ありしが脱たるにやと云る、これは實にさもあるべきことなり、但し其説に、得の下に、而之の二字などありしを、又落せるにて、行瀬長有得而之鴨と訓べきか、といへるは心ゆかず、さてよく思ひめぐらすに、得の上に、欲字の脱たるなるべし、さらば欲得は、コソと希ふ處に多く用ひたれば、ユク。セ。ノ。ナ。ガ。ク。ア。リ。コ。セ。ヌ。カ。モ。と訓べきことなり、故瀬欲の二字を姑補入つるなり、

反歌

妹爾相時片待跡久方乃天之漢原爾月叙經來

歌意は、妹にあふ時をひとへに、片かけ待とて、天河原に多くの月をぞ經にける、となり、

詠花

竿志鹿之心相念秋芽子之鐘禮零丹落僧惜毛

竿志鹿之心相念とは、契沖芽子をば鹿の妻と云ば、相思と云と云り、今按に、鹿は芽子の咲比に鳴、芽子は鹿の鳴比に咲て、互に心を通はしたる如く見ゆる故に、相念と云るなるべし、○秋芽子之は、秋芽子がと云如し、○落僧惜毛は、僧は信字の誤寫なるべし、チ。ラ。ク。シ。ヲ。シ。モ。と訓べし、本居氏の、僧は漢の誤にて、チ。ラ。マ。ク。ならむと云るは用がたし、又略解に、僧は俱の誤なりと云るは、非なり、俱字を假字に用たること、集中に例なきをや、○歌意は、鹿の心を通はして、入立むつれて鳴、この面白き芽子の花が、霖雨に降みだされて散行事の、嗚呼さても一すぢに惜や、となり、契沖云、しぐれは大むね九月中旬より、十月中旬におよぶほどにふるを云り、芽子は八月中旬まではあることまれなるに、しぐれにちるとよめるは、和名抄に、霖雨小雨也之、久禮、かくの如くあれば、しぐれは小雨の名なるを、いつとなく、秋冬のあはひに、ふりみふらずみさだめなきを、わきて名付たるを、人麻呂の比は猶ひるくて、小雨をしぐれと云るなるべし、

夕去野邊秋芽子末若露枯金待難

露枯は、契沖、ツ。ユ。ニ。カ。レ。ツ。と訓べし、やはらかなる葉に、あまりにいたく露のおきて、置からすなり、と云り、本居氏の、枯は、沾の誤にて、ツ。ユ。ニ。ス。レ。ツ。なるべし、といへるは強解なり、○金待難は、芽子は秋の最中かけて盛に開なれば、己さかりの最中を待がたし、と云る意なり、

るべし、しかする時は、此歌、秋の初つ方によめるものとすべし、又夏の末によめるものとせば、たゞひろく秋を云りと見て難なし、さて芽子は秋の景物なる故に、夏よみたりとしても、秋部に入たること、何ぞ疑はむ、篇次に拘るには及ばず、○歌意は、夕になれば、まだうら若くやはらかなる芽子の葉に、あまりにいたく露の置て、置枯しつゝ、己が盛に開、比の最中を持得難し、となり、

〔右二首、柿本朝臣人麿之詩集出。〕

眞葛原名引秋風吹每阿太乃大野之芽子花散

名引秋風は、令靡秋風なり、ナピカス。を切ればナピクとなれば、反切にも叶へり、廿、卷家持卿歌に、秋風乃須惠布伎奈婢久波疑能花登毛爾加射左受安比加和加禮牟、この奈婢久も、令靡の意なり、合考べし、○阿太乃大野は、和名抄に、大和國宇知郡阿陀、陀讀可濁讀、とある地の野なり、大はその廣く寛なるを云、大海、大空などの大に同じ、○歌意かくれたるところなし、(金葉集に、眞葛延阿太の大野の白露を吹なはらひそ秋の初風、

鴈鳴之來喧牟日及見乍將有此芽子原爾雨勿零根

歌意は、鴈が來鳴ば、鴈に心をうつしてなぐさむべきなれど、其鴈の來鳴ぬ間は、ひとへに見愛つゝ、あらむと思ふこの芽子原に、雨ふりて花をちらすことなかれ、となり、此下にも、秋芽

子者於鴈不相言有者香音乎聞而者花爾散去流、と見ゆ、大むね芽子は、七月の末より咲て、八月下旬ばかりにうつろひはて、鴈は速くは八月中旬すぎ、遅くは九月になりて渡るものなれば、かくよめり、故、八、卷に、九月之其始鴈乃云々、とあり、

奥山爾往云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜裳

第一二句は、鹿はもはら奥山に住ものなればいへるなり、古今集にも、奥山に紅葉ふみ分なく鹿の、とよめり、○初夜不去は、毎夜にの意なり、夕、不去朝、不去などの例なり、○歌意は、奥山に常に住と云なる鹿の出來て、夜毎夜毎に入立むつれて妻問する、この面白き芽子の散失むこと、の、さても惜や、となり、

白露乃置卷惜秋芽子乎折耳折而置哉枯

折耳折而は、而は六字、或は無字などの誤なるべし、ヲリノミヲラムと訓べし、○置哉枯は、其まゝに置て枯しめむやは枯しめじ、と云こゝろなり、十八橘の歌に、於枳豆可良之美、とあるも、木に置て令枯といへるなり、考合べし、○歌意は、かく露のあまりに多く置ては、その露にいたみて、枯むと思へば、惜き故に、其まゝに置て枯しめじ、いで折のみ折て、心たらひに愛むぞ、となり、略解に、舊本の誤字あることを考ずして、露にしをれ枯るを惜て、折て置て枯さむと云なり、と云るはいかゞ、折置て枯さむは、何の興やはある、且置の辭も相應はず、上に引十

八の歌をも考合すべし。
秋田 蒨借廬之宿爾穗經及咲有秋芽子雖見不飽香聞。

借廬は假に造りたる廬なり和名抄云毛詩云農人作廬以便田事和名伊保○歌意は秋田を刈爲に造りたる借廬の宿の花の色に光り映くまでさきたる芽子の見れども見れどもあきたらずさてもうるはしき哉となり後撰集に本句秋田のかりほの庵のにはふまでとして載たり。

吾衣摺有者不在高松之野邊行之番者芽子之摺類曾。

行之者は契冲が之の下に香可等の字落たるかと云るはさもあるべし略解に之は去の誤なりと云るは從がたし三卷にも焼津邊吾去鹿齒とある例をも思ふべし○芽子之摺類曾とは行觸に觸て衣の芽子花の色に摺染れるぞとなり○歌意はことさらに設けて吾衣を摺るにはあらず高圓の野邊を行しかばその芽子の花に行觸て自然に染れるぞとなり下にも事更爾衣者不摺佳人部爲咲野之芽子爾丹穗日而將居催馬樂に衣かへせむやわがきぬは野原しのはら萩が花ずりなどあり新古今集に頼政かり衣われとはすらと露しげき

野原のはぎの花にまかせて今の歌によれるに似たり。
此暮秋風吹奴白露爾荒爭芽子之明日將咲見。

荒爭とは花のや、開出むとする間に露の重く置亂れて咲せじとするに似たれば云るなり中山嚴水は白露のうるはしきに劣らじと争ふ意なるべしと云りさても通ゆ此下に白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞ともあり○歌意は此夕秋風のすしく吹ぬるなり露の重く置亂れて咲せじとするに争ひて咲むとするその芽子の明日は咲出むを見むぞとなり又は露のうるはしき色に劣らじと争ふはぎの花のと云にもあるべし。

秋風冷成奴馬並而去來於野行奈芽子花見爾。

歌意かくれたるところなし。

朝果朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮。

朝果は果字の音をカホに借る例既くこれかれあり木槿にて品物解に委云りさてこの花朝にもはら開よしもて朝貌と名付たるは例の一方によれるものにして夕にも多くさくものなればかくよめり夫木集に槿花朝貌の名にこそ立れ夕露に咲そふ花の色もありけり〔頭註源氏物語朝貌かれたる花どもの中に朝貌のこれ賜ふ云これには牽牛花也此以前にも牽牛をあき貌と云〕○歌意は朝貌は必朝露を負て開物の如く人はいへど暮陰にこそ朝よりはまさりて咲なれとなり。

春去者霞隱不所見有師秋芽子咲折而將挿頭。

歌意かくれたるところなし、

沙額田乃能邊乃秋芽子時有者今盛有折而將挿頭。

沙額田は上に狹野方と書り同處なるべし。○時有者はトキシアレバとよむべし。シはその時を得たることを一すぢにおもく思はせる助辭なり。○歌意は沙額田の野の芽子のいつか咲むと待遠にのみ思ひしに時至りたれば今盛に咲たりいざ折てかざしにせむとなり。事更爾衣者不摺佳人部爲咲野之芽子爾丹穗日而將居。佳人部爲は枕詞なり咲とつゞきたり。○咲野は大和の佐紀の野なり既く委云り。○歌意は殊更に設けて衣はすらじ佐紀野の芽子原に入交りて花の色に衣の染まで染りて居むじどとなり。

秋風者急之吹來芽子花落卷惜三競竟。

急之吹來は之を古寫本には々と作れどそれも非なり久字の誤ならむと云説に従べし。ハヤクフキキヌと訓べし荒く吹來りたるよしなり。○競竟は舊訓にオホロオホロニとあるはいふにたらず甚疑はし契沖試にアラソヒハテツとよみたれどいかなり岡部氏は競立見ならむといへるに姑從てよみつ猶考べし。○歌意は秋風は疾く荒て吹來ぬるなりかくては芽子の花も散ぬべきなればその散ぬべき事の惜さに風にあらそひて立出て花を

見愛むとにや、

我屋前之芽子之若末長秋風之吹南時爾將開跡思手。

若末長は契沖のウレナガシとよめるぞ甚宜しき。○手字舊本に乎と作るはわろし今は元曆本に従つ。○歌意は秋風は程無興べきを其吹なむ時に至らば急く咲むと思ひて吾やどの芽子の末長く立のびて其豫をしたるよとなり。

人皆者芽子乎秋云縱吾等者乎花之末乎秋跡者將言。

歌意は契沖云皆人は秋萩とて秋の草の中には萩をのみ云りよしさもあらばあれ我はをばなを秋の草には第一の物と云むとなりこれは心ありてよく秋の草をしれる人のよめるなり清少納言に秋の草とてさまざまかきて後にいはくこれにすきをいれぬいとあやしと人いふゆり秋の野のおしなべたるをかしさはすきにこそあれはさきのすはうにいとこきが朝ぎりにぬれて打なびきたるはさばかりの物やはある秋のはてぞいとみどころなきいろくにみだれ咲たりし花のかたもなく散たるのみ冬の末までかしらいとしろくおほどれたる名をもらでむかし思ひ出がほになびきてかひろきたてる人にこそいみじうにためれよそふることありてそれこそあはれとおもふべけれとかけるこのころを此歌は一首にこめてみゆるにや、

玉梓タマシヅ公キミ之ノ使ツカヒ乃ハ手折テ來ル有ル此コノ秋アキ芽エ子コ者ハ雖レ見レ不レ飽カ鹿カ裳モ。

來有は、來家留の約りたるなり、(キケの切ケとなる)○歌意は、君が使の折て持來ける、この芽子の花は、その折し使さへも、そのうるはしき人の使ぞと思へば、いよくなつかしく、見れども見れどもあきたらず、さてもめでたく思はる、哉となり、
吾屋ワガヤ前マヘ爾ニ開ケル有ル秋アキ芽エ子コ常ニ有ル者ハ我ガ待マツ人ヒト爾ニ令ミ見セ猿サレ物モノ乎ヤ。

常有者は、ツネシアラバとよみて、常にあらばと云意となるなり、シはその常ならぬもの、常にあらばと一すぢに思ふ心をおもくきかせたる助辭なり、○猿字、舊本猿に誤れり、拾穂本に従つ、○歌意かくれたるところなし、

手寸テサ十ト名ナ相サヒ殖ウヅ之ノ名ナ知ル久ク出イ見レ者ハ屋ヤ前マヘ之ノ早ハヤ芽エ子コ咲サキ爾ニ家ケ類ル香カ聞ク。

手寸十名相、これに兩説あるべし、まづ一、舊本の從にて釋へし、手寸は、集中に、髮カミ多タ久ク、また七卷に、通女等之織機上乎眞櫛マコシ用搔ユキ上ノ栲カク島シマなどある多タ久クと同言なるべし、さてこの多タ久クてふ言の意を、熟考るに、總束るやうのことを云言にて、即今世に物を束ぬ寄るを、多タ久ク須ス禰ネ流ルと云と同じかるべし、然るを略解に、手寸はたぐりを約めたるにて、たぐり備へなり、と云るは、いかにぞや、たぐる意の多タ具グは、集中にも、駒コウ多タ具グなどある多タ具グにて、繩緒などの類にいふこととにこそあれ、芽子などにいふべきにあらざ、そのうへ多久、多具は、清濁の差別さへあるを

も思ふべし、十名相は、十は具足へるを云言なり、佛足石碑讚歌に、彌蘇知阿麻利布多都乃加多知夜蘇久佐等會太禮留比等乃布彌志阿止止己呂とあるは、釋迦を備足れる人と云るにて、この會は、今の十に同じ、名相は、占をするを占奈比、賂をするを賂奈比、商を商奈比、荷を荷奈比、咒を咒奈比、仇を仇奈比、賂を賂奈比、など云ごとく、活かぬ言を、活かすときに添る辭なり、かゝれば、芽子を間繁く總寄て殖しを云りと聞えたり、其二には、仙覺が註釋を見るに、この歌第一二句、古點には、テモスマニウエシモシルクとあり、いさゝか相叶はず、いまよみかへて、タキソナヘウエシナルクとすと云り、此に依て思は、仙覺より前は、テモスマニと訓來れりしを、字に就て訓を改めしなり、夫木集に、てもすまにうゑしもしるくいでてみればやどの初はぎ咲にけるかも、とあるにても、仙覺より前は、かくよめるを知べし、テモスマニとする時は、理やすらかにて、甚宜し、八卷に、戲奴之爲吾手母須麻爾ニハル春野爾ニハル拔流ニハル芽花ニハル會御食ニハル而ニハル肥座ニハル同卷に、手母須麻爾殖之芽子爾也還者雖見不飽情將盡アヒカサヒなどあるにも、よく相照てきこゆるなり、然れども舊本の「字のまゝにては、しか訓べきやうなく、多く誤字あらむとおもはるゝにつきて、このこと門人南部、嚴男にかたりしに、嚴男、さらば手文寸麻仁なりけむを、例の打とけ書たるに、文麻仁を十名相に誤寫し、さて轉倒して、舊本の如くなれるなるべし、寸は、集中多くは訓を取てキの假字に用たれど、十一に、小簾之寸鷄吉と見えなれば、スの假

字に用ひたりとせむに、妨あらじと云り、猶考べし、字を助けて説ときは、前に云るを然るべき、詞のかたにて云ときは、後の説ぞげにしかるべき、見む人用捨すべし、○殖之名知久は、名は毛、字の誤なり、ウエシモシルクと訓べし、右に云如く、古き點にはしかありしと見ゆ、元暦本にもかくよめり、○早芽子は、ソサハギと訓べし、殊に先立て咲芽子を云り、早田早穂、早飯、早瓜など云類なるべし、但し古事記傳に、早田早穂など云は、早稻田早稻穂の意にて和佐と云稱は、稻に限れることなり、とあるは、何によりていはれしにや、いとおぼつかなし、字鏡にも、稷早熟禾、和世阿和とも見えたるをや、されば和佐は稻に限ることなく、凡て先立て開實るを、和佐某と云り、とおぼゆ、但和世と云は、稻にのみ限り、和佐と云は、某と限れることなく、ひろく何にもいふ稱ならむとおぼえたり、さるは、和世は、和世氏の約りたる言と思はるればなり、さてその氏は、稻を云ことなるべし、袖中抄に、早田の稻を和世と云、中田の稻を那可氏と云、晚田の稻を於久氏と云よし見えて、今俗もさる事なり、されば、その那可氏、於久氏の氏は、稻を云こと、とおぼゆれば、和世は和世氏の約れる言ならむとはいへるなり、しからは字鏡の和世阿和は、世は、佐の誤か、又通云るにもあらむ、しかるを古事記傳に、和佐を、和佐と云は、下に言をつらねて云ときの例にて、稻を伊那某と云が如し、と云る、理はさることながら、なほうけがたし、〔頭註内膳式に、〕○歌意は、心を盡し、〔イタツ〕勞きて、〔ウエオホ〕殖育し、かひもありて、庭に立

出て見れば、世に殊に先立て、芽子の咲にける哉、さても見事の花や、となり、
 吾屋外爾殖生有秋芽子乎、誰標刺吾爾不所知。

歌意は、はじめより、わが勞きて、吾庭に殖育したる芽子なれば、其花も吾物にして見べき事なるに、吾に知せず、ひそかに標結て、自物に領て見るは、そも誰なるぞ、さはあるまじき事なるを、と咎めたるなり、これは譬喩なるべし、女を芽子にそへたり、

手取者袖并丹覆美人部師此白露爾散卷惜。

袖并丹覆は、袖まで染ふと云意なり、色に染をにほふといへる例、集中に多し、覆字は、オホフの訓を略て借り、○歌意は、手に折取て見れば、袖までその色に染るほど、盛に咲たるこの女

郎花の露にしをれて散失む事の、さても惜や、となり、
 白露爾荒争金手、咲芽子散惜兼雨莫零根。

歌意は、露は花を咲せむとし、花はいなまだ咲じとあらそふに、つひにあらそひ得ずして咲たる、この見事なる芽子の散失なば、いかに惜からむ、雨ふりて、その花をちらすことなかれ、いでその雨よ、となり、

憾孀等行相乃速稻乎、蒞時成来下芽子花咲。

憾孀等は、フトメドモと訓べし、行合の早稻を、憾孀等が蒞時にと云意なり、此一句をば、第三

句の上へうつしてきくべし、これをヲトメヲニと訓て、女に行逢ふ意のつゞけとするはわ
 るし、○行相乃速稻は、契沖立田山に行相の坂と云所あり、そこにある田の稻なり、と顯昭い
 へり、第九に、いゆきあひの坂のふもとに云々、とよめる處なり、むろのはやわせ、ふるの早田、
 かづしかわせなど云たぐひに、顯昭は心得られたるなるべし、或説には、行合のわせと云は、
 夏田をうゝる時、苗のたらざれば、おなじ苗にあらぬを植つぐなり、これを行合の稻と云と
 民間に申す、とかけり、民間にさへ、さやうにいひならはしたらば、これを正説とすべきにや、
 と云り、行相を地名とする説もすて難し、然名におへる地あればなり、又三代實錄に、貞觀十
 二年三月五日、對馬島云々行相神、とある行相も、地名によれる神名か、略解に、夏と秋と行あ
 ふころ、みゆる早稻を、行相のわせとはいふなり、といへるは推度なり、○歌意は、この芽子の
 花の咲るにて思へば、行合の早稻を、とめ等が刈收時に、今はなりにけるらし、さても見事
 にさける花ぞ、となり、現存六帖に、秋はきはうつろひぬらしをとめこが行あひのわせもま
 だからぬ間に、これは今の歌によりてよめり、
朝霧之棚引小野之芽子花今哉散濫未厭爾
 歌意は、朝霧のたなびきて、風景の面白き野の芽子花は、毎日々々に行て見てさへ、いまだあ
 きたらず、なつかしくおもふことなるを、今は盛も過たれば、今日この頃は、散失らむか、いざ

今日も、はやくゆきて見む、となり

戀之久者形見爾爲與登吾背子我殖之秋芽子花咲爾家里

戀之久者は、戀しく思はゞといふ意なり、此は夫の遠き處にあるか、或は旅に行などしたる
 に、遺居たる女のよめるならむ、○歌意は、吾遠く別れ行によりて、吾を戀しくおもはゞ、其時
 に、吾形見に見よとて、吾夫が殖置し芽子の花咲にけり、その形見の花を見るにも、なぐさみ
 はせず、いよく戀しき心がまざるよ、となり、

秋芽子戀不盡跡雖念思惠也安多良思又將相八方

本句は、芽子に、さのみ心を盡すまじとはおもへども、と云なり、賞愛のあまりに、雨風などに
 付ても、さまざまに心をなやますが、戀を盡すなり、○思惠也安多良思とは、この思惠也は、縦
 やと云に近し、假に縦す意の辭なり、さて此詞は、第二句の上にくぐらして、意得べし、縦や、戀
 を不盡と、云意なり、安多良思は、惜愴などの字を用たる、其意なり、古事記に、天照大御神者、
 登賀米受而告云々、離田之阿理溝者地矣、阿多良斯登許曾我那勢之命爲、此云々、また大
 雀、天皇御歌に、阿多良須賀波良、書紀雄略天皇卷、歌に、阿拖羅陀俱彌幡夜、又、阿拖羅斯枳偉
 離謎能陀俱彌云々、阿拖羅須彌幡、など見えたり、○又將相八方は、又盛に相むやは、得あは
 じの意なり、○歌意は、芽子に縦や、さのみ心を盡してなやますまじ、とは思へども、又もこの

盛に得あはじとおもへば止事を得ずしてなほ心をつくして惜まるとぞとなり、
秋風者日異吹奴高圓之野邊之秋芽子散卷惜裳。

歌意は、秋風は日毎々々にたゆまず吹ぬるなり、かくては花もちらずには得堪まじきなれば、かの高圓の野の芽子の散失む事の、さても惜やとなり、
大夫之心者無而秋芽子之戀耳八方奈積而有南。

無而は、舊訓にナシニとあるぞ宜しき(ナクテとよみてはいたくおとれり)而は、此上にも、水底左開而また然叙手而在、などニの假字に用ひたり、○奈積而有南は、苦惱て將有と云なり、○歌意は、何にも障りあへぬ、したゝかなる大丈夫と思ひしかひもなく、女々しくおめくと、秋芽子の戀にのみ苦み惱みて、丈夫の心もなしにありなむやは、あゝさはあるまじきことなるを、となり、

吾待之秋者來奴雖然芽子之花曾毛未開家類。
曾毛の毛は、軽く添たる助辭なり、○歌意は、吾待々し秋は既に來りぬ、されどもなほあかぬことは、吾待々て戀しく思ひし芽子の花を、未咲ざりける、となり、

欲見吾待戀之秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里。
思美三荷は、常に繁うにといふが如し、○歌意かくれたるところなし、

春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾落來根。

朝東風は、アサゴチノカゼとよみて、そのチは、則風なり、さて東風の風とつゝくるは、荒風の風ともいふと、同例なり、○歌意は、春日野の芽子の、もし風に堪ずて散失なむことは、一すぢに惜くはあれど、すべきやうなし、よしや散失なば、他所に行ことなかれ、その散ぬる花も、必朝東風と共に、吾方に散きたれよ、となり、

秋芽子者於鴈不相常言有者香音乎聞而者花爾散去流。

歌意は、契沖云、たとへば人の中をたがふとき、又もあはじといひたることを、たがへぬやうに、秋萩は、鴈にあはじといひければ、にや、鴈の聲するころは、かならず花のちる、となり、花にちりぬるは、あだ花と云ことあれば、あだにちりぬると云こと、るなり、上にも、かりがねのきなかむ日まで見つゝ、あらむこのは、きはらに雨なふりそ、ね、鴈は、八月の末より、大むね渡り來れば、萩のうつろひは、つるころなり、○舊本第三句の下に、一云言有香聞と註せり、いづれにてもしからむ、

秋去者妹令視跡殖之芽子露霜負而散來毳。

秋去者は、アキサラバと訓べし、○露字、舊本に霧と、作るは、誤古寫本、拾穂本、活字本等に從つ、○歌意かくれたるところなし、

詠鴈

秋風爾山跡部越鴈鳴者射矢遠放雲隱筒。

山跡部越は、大和の方へ飛越るなり、六卷に、朝波海邊爾安左里爲暮去者倭部越鴈四乏母とあり、○射矢遠放は、イヤトホザカルとよめるを宜しき、雲隱つゝ彌遠放ると句を置かへて、心得る例なり、○歌意は、秋風の吹につれて、大和の方へ、山飛越て行、鴈は、雲居はるかに雲隱つゝ、いよゝゝ遙に遠ざかり行よ、となり、此下に、秋風爾山飛越鴈鳴之聲遠離雲隱、といへるは、全、同歌の一本と見ゆ、いづれかもとならむ、枕雙紙に、鴈の聲は、遠く聞えたるあはれなり、とあり、思合べし、

明闇之朝霧隱鳴而去鴈者言戀於妹告社。

明闇は、夜の明むとするほど猶闇くて、明きと闇きと離れる間を云、毛詩に、昧旦の字を、アケグレと訓せたり、註に、昧、旦、明也、昧、旦、天欲旦、昧、晦、未辨之際也、とあり、拾遺集八卷にも、朝ほらけ日ぐらしの聲きこゆなりこやあけぐれと人のいふらむと見ゆ、なほ既く四卷上に云り、○言字、元曆本、異本等には吾と作り、言字を、吾に通して用ひたること、集中前後に例多し、もろこしの書にも、言、我也、と註り、○歌意は、朝朝に霧隠りて、妹が家の方に、鳴て行なるその鴈は、吾思ふ心の内を、吾戀しく思、妹に告よかし、となり、

吾屋戸爾鳴之鴈哭雲上爾今夜喧成國方可聞遊群。

遊群、二字、舊本次の行に放ちて、題の列に書たるは誤なり、○歌意は、吾屋外のあたりにて、鳴なれし鴈の、今夜雲上遙に鳴ゆくなるは、汝が本國へ去ならむか、さても、亮なる聲や、となり、左小牡鹿之妻問時爾月乎吉三切木四之泣所聞今時來等霜。

切木四之泣を、カリガネと訓ことは、既く六卷長歌に、折木四哭とある處に、具註り、○歌意は、牡鹿の妻問交す、秋のさかりの月夜が清なる故に、その月に愛て、今夜渡り來らし、初鴈の音のほのかに聞ゆるよ、嗚呼、さても一すぢになつかしき聲なるぞ、となり、

天雲之外鴈鳴從聞之薄垂霜零寒此夜者。

薄垂は、離にて、離々に霜のふりたるをいふ、雪にも、波太體とも、保村呂ともよめる、みな同言なり、此言既く三卷八卷等に、出て委註り、伊勢物語に、富士の雪を見て、かの子まだらにとよめるによりて、波太體は、斑ぞと云説はあたらす、○舊本に、一云彌益爾戀許曾増焉、と註せり、○歌意は、雲居の外に、初鴈が音を聞そめしより、早むらゝと霜のふりて、今夜は肌寒し、となり、

秋田吾荊婆可能過去者鴈之喧所聞冬方設而。

荊婆可は、今の俗言にていは、荊場合といはむが如し、此言、四卷、十六卷等にも出、既く委註

り、○歌意は、秋の田を吾刈時節の過往ぬれば、早冬の節を片方に設けて、初鴈の音が聞ゆるよとなり、

葦邊在荻之葉左夜藝秋風之吹來苗丹鴈鳴渡。

荻は、品物解に云、○左夜藝は、音のさやくとさやめきさわぐを云り、此言も既に委註り、小竹之葉者三山毛清爾亂友の清の言を活かしたるなり、○舊本に、一云秋風爾鴈音所聞今四來霜とあるは、本末と、のはず、○歌意かくれたるところなし、

押照難波穿江之葦邊者鴈宿有疑霜乃零爾。

押照は、難波の枕詞なり、既に出つ、○宿有疑は、ネタルラシと訓べし、○零爾は、フルニの伸りたる詞なり、ラクの切ル、かく伸云は、その物の緩なるを云なり、緩なるは、その物の絶間なく引つゞきて物するよしにて、こゝは、絶間なくふることなるを、と云ひが如し、○歌意は、夜々絶間なく引つゞきて霜の降ことなるを、なほ堪忍びて、難波堀江の葦原には、鴈が宿たるらし、いかに寒くわびしからむとなり、

秋風爾山飛越鴈鳴之聲遠離雲隱良思。

歌意は、秋風の吹につれて、山飛越て、行鴈の聲が次第に遠くなり行よ、今は雲居のあなたに、雲隠ゆくなりしとなり、

朝爾往鴈之鳴音者吾如物念可毛聲之悲。

朝は、ツトとよみて早朝を云、言意いかならむ、いまだ考得ず、(初時の略ぞといふは従がたし) ○歌意は、早朝になきつゝ、行鴈は、吾と同じ様に物思をすればにや、あの如く聲の身にしみて悲しくあるらむ、さてもあはれなる聲ぞとなり、

多頭我鳴乃今朝鳴奈倍爾鴈鳴者何處指香雲隱良武。

武、字、舊本には、哉に誤れり、今は、元曆本拾穂本等に從つ、○歌意かくれたるところなし、野干玉之夜度鴈者、鬱幾夜乎歷而鹿已名乎告。

鬱は、覺束なくと云意にて、心あてのなくと云程のことなり、○己名乎告は、鴈の鳴聲は、かりかりと聞ゆれば云り、後撰集に、行かへりこゝもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりゝとなく、又、秋ごとにくれど歸ればたのまぬを聲にたてつゝ、かりとのみなく、又、ひたすらにわが思はなくにおのれさへかりゝとのみ啼わたるらむ、これらみな、なく聲のしか聞ゆるによりてよめるなり、○歌意は、夜中に飛渡りて鳴なる鴈は、何の心あてありての事にもあるまじき、幾夜をか經つゝ、かりゝと己が名を名告ることぞ、と問かくるよしなり、

璞年之經往者阿跡念登夜渡吾乎問人哉誰。

阿跡思は、誘ひ奉ふを云言にて、集中に多し、○歌意は、これは、鴈になりて、答のこゝろをよめ

るなり、年の經ゆけば、親しかりしも疎くなりなど、ありしにかはるならひなれば、それがうれたさに、心がはりのせざらむため、己が友を誘ひ奉ふとて、夜中に己が名を告つゝ、飛わたる吾なるものを、不審げに問給ふ其人は誰なるぞとなり、この二首の歌、古來の註者等、説きまあしくて甚まぎらはし。

詠鹿鳴。

比日之秋朝開爾霧隱妻呼雄鹿之音之亮左。

亮左は、契冲が、サヤケサとよめるぞ宜しき、仁徳天皇紀に、寥亮をサヤカナリとよめり、○歌、意かくれたるところなし。

左男牡鹿之妻整登鳴音之至將極靡芽子原。

妻整は、本居氏の呼立る意なりと云るが如し、二卷に、御軍士乎安騰毛比賜齊流鼓之音者、三卷に、綱引爲跡網子調流海人之呼聲、十九に、物乃布能八十友之雄乎撫賜等登能倍賜、廿卷に、安之我知流難波能美津爾大船爾末加伊之自奴伎安佐奈藝爾可故等登能倍、由布思保爾可遲比伎乎里安騰母比豆許藝由久伎美波、又奈爾波都爾船乎宇氣須惠夜蘇加奴伎可古登々、能倍豆安佐婢良伎和波己藝渥奴等、などあり、略解に、整は將求二字の誤にて、ツマヲマカムトなるべし、といへるは、わろし、○將至極は、聲の聞え届かむ地の限、と云なり、佛足石碑歌に、

美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利云々、○靡芽子原は、妻よぶ聲をさへぎることなく、行いたらしめむ爲に、靡けよと云るなり、七卷に、妹所等我通路細竹爲醉寸我通靡細竹原、○歌意は、牡鹿の妻を呼立るとて、鳴音の至り届かむ限は、其聲を遮り隔ることなく、芽子原も靡き伏てあれよとなり、

於君戀裏觸居者敷野之秋芽子凌左牡鹿鳴裳。

於君戀は、君を戀と云むが如し、○裏觸は、恍惚として、憂ひうなだるゝよしなり、○敷野は、和名抄に、大和國城上之岐之加美郡城下之岐乃芝毛郡とある處の野なるべし、本居氏は、もしは、此はアシキ野なるがアの字の脱たるにてもあるべし、蘆城こゝかしこに見えて、八卷には、蘆城野とよみて、芽子をよめり、といへり、○歌意は、君を戀しく思ひて、恍惚と憂ひうなだれをれば、折しも敷野の秋はぎを踏分凌ぎて、牡鹿の鳴よ、さてもあはれなる聲や、彼も妻を呼立るにてあるらし、あの聲をきけば、いよゝ物思が益るぞとなり、六帖に、いもにわがうら戀をればあしびきの山下とよみ鹿ぞなくなる、

鴈來芽子者散跡左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹來。

芽子着散跡は、はぎの花は、已く散ぬとて、となり、跡は等底の意の跡なり、○歌意は、時過て已く鴈は來りぬ、はぎの花は散失ぬとて、鹿の鳴音も、恍惚と物思はしげに、憂ひうなだれてあ

るよとなり、芽子は鹿の妻問よし云て、故に親しむよしなれば、鴈の來て芽子の花散ぬとて、鹿の鳴音もうらぶる、と云るなり、鴈にことに用はなけれども、時候のうつるを云むため、に云るのみなり、

秋芽子之戀裳不盡者左小鹿之聲伊續伊戀許曾益焉。

戀裳不盡者、は、芽子の散て、未ほども經ざれば、その花を戀しく思ふ心も、未盡終ぬにと云意なり、この戀は、上に、大夫之心者無而秋芽子之戀耳、八方とあるに同じく、芽子を戀慕ふよしなり、終句の戀は、世人の妻戀にて別なり、不盡者は、盡ぬにの意にて、上にあまた出たり、○聲伊續伊戀は、芽子の散に、鹿の聲の繼て鳴なり、伊は二ながらそへ言なり、略解に、下の伊は行文かと云れど、さにはあらじ、伊のそへ言をおきて、八言に云る例多し、又朝ナ朝ナを、アサナサナと云例なり、と云るはたがへり、伊はそへ言朝ナをサナと云は、連便によりて本言をはぶけるにこそあれ、○歌意は、秋芽子のちりてほどもへねば、その芽子を戀しく思ふ心も、未盡はてぬに、鹿の聲がつぎて聞ゆる故に、妻戀しく思ふ心が催されて、常もある物思ひこそいよ／＼まさるなれ、はぎの花を戀しく思ふ心の未盡終ぬに、又重々に如此ある事の、さてもくるしやとなり、

山近家哉可居左小牡鹿乃音乎聞乍宿不勝鳴。

歌意は、鹿の鳴音を聞つゝ、感を催されて、終夜寐入むとすれど、得寐入ぬ哉、さてもくるしや、されば、山近きわたり、家居して住べき事かは、いなや、此、後山近き處に住ひは爲じとなり、古今集に、山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなく音に目をさましつゝ、思合すべし、

山邊爾射去薩雄者雖大有山爾文野爾文沙小牡鹿鳴母。

射は、そへ言なり、○歌意は、山邊に入立て、窺ふ獵人の多くあれば、密び隠れて、音も出さずしてあるべきことなるに、然とも知ぬなるべし、山の方にも野の方にも、おびたしく鹿の鳴よ、さてもあはれの事や、彼等はほどなく、獵人に獲らるべきに、となり、

足日本笑山從來世波左小鹿之妻呼音聞益物乎。

來世波は、來りせばと云が如し、○鹿の上、元曆本には牡、字あり、○歌意は、山の方に廻りて、此處に通る來りせば、鹿の鳴音を聞てあらしものを、人の語るを聞ば、彼山にておもしろく鹿の鳴しと云を、その山を經らずして來しことの、今更に悔しとなり、

山邊庭薩雄乃禰良比恐跡小牡鹿鳴成妻之眼乎欲焉。

山邊庭は、庭とは、他の地に對へて云詞なり、山邊には然れども、他地は然らずとの意をもたせたるなり、○禰良比は、うかゞふことなり、○歌意は、山邊には獵人の入立て、窺ふことのおそろしければ、其を恐れ逃隠れてあるべきことなれど、猶妻の戀しく思はるゝに、堪かねて

鹿の鳴なり、彼等はほどなく、獵人に獲られなむといとほし、あはれ他の地にて鳴ば、然はあ
るまじきを、となり、

秋芽子之散去見、鬱三妻戀爲良思、棹牡鹿鳴母。

鬱三は、契沖鬱は、鹿のこゝろの鬱陶して、むすばほれふさがるなり、といへり、此は心のむす
ばほる、故にの意なり、○歌意は、己が妻になすらへし、はぎの花の散失ぬるを惜みて、心の
むすばほれさぶくしき故に、いかで己が實の妻にそひてだにあらばや、と妻戀するにて
あるらし、鹿の鳴よ、さてもあはれの聲や、となり、

山遠京爾之有者、狹小牡鹿之妻呼音者、乏毛有香。

京爾之有者とは、京は、本居氏、ミサトと訓べし、ミヤコといふは、廣くわたれる名なれども、其
中に、皇大宮に關らで、たゞ京の内のことと云には、ミサトと云り、十六に、京兆爾出而將訴、こ
れも京兆をミヤコと訓るは、わろし、和名抄に、左右京職、美佐止豆加佐と見ゆ、書紀にも、京を
ミサトと訓る所々あり、孝徳天皇紀に、凡京、每坊置長などあるを以て、ミヤコといふとの
けぢめをしるべし、といへり、之は助辭にて、そのさだかにしかりとする意のとき、爾之とつ
づくるなり、○歌意は、鹿の聲の聞まほしく思へど、山の方に遠き京内にてあるなれば、鹿の
聲は、めづらしく少なく、乏しくもある哉、山の方に行て、鹿の鳴聲を聞たらば、いかばかりか

秋の感を催さむ、となり、

秋芽子之散過去者、左小牡鹿者、和備鳴將爲名、不見者、乏見。

不見者、乏見、下の見字、舊本には焉と作り、活字本に鳥とあるは、鳥の誤なるべし、今は一本に
従つは、乏しき故に、不見者と云意なるべし、○歌意は、今こそあれ、ほどなく散失べきに、もし
はぎの花の散失たらば、いかに戀しく思ふとも、その花の残り少に乏しくあるべき故に、そ
の花を見て、親るべきよし、のなれば、わびしく思ひて、鹿は、佗鳴せむな、と歎息きたるな
り、

秋芽子之咲有野邊者、左小牡鹿曾露乎、別乍、孀問、四家類。

歌意かくれたるところなし、

奈何牡鹿之和備、鳴爲成、蓋毛、秋野之芽子也、繁將落。

歌意は、なそも牡鹿の、わびしげに、わび鳴をすることぞ、もしや秋野の芽子の繁くちるによ
りて、それを惜み歎て、鳴ならむとなり、初に疑ひて、後にそのあるやうを、推度りたるなり、

秋芽子之開有野邊、左牡鹿者、落卷、惜見、鳴去物乎。

歌意は、はぎの咲てある野邊に出て、その花の散失なむ事の惜さに、鹿の鳴ぬるものを、この
おもしろき野の景色を愛に、いかでわが思ふ人の、來座ざり、けむ、となり、